青鞜

三月號

明治四十四年八月二十八日（第三種郵便物認可）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十五年三月一日

第二巻　第三號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜　第二巻第三號　目次

きさらぎ(短歌)……一……茅野雅
移りゆく心(詩)……五……與謝野晶
叔父ワーニャ(戯曲)……八……瀬沼夏葉譯
母の死(小説)……二一……岩田由美
エロスとチャーミオンの對話(散文詩)……三五……ポオ
この胸に(短歌)……四三……三ケ島よし
降神(短篇)……四四……らいてう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

或日と或日（日記）……五四……田原祐
習作（戯曲）……七〇……岡田八千代
我が影（短歌）……八八……岡本かの
木瓜（俳句）……九一……白雨
お葉（小説）……九三……物集和
二月の小説を讀む……一〇四……水野仙
幽靈を論ず……一一〇……メレジコウスキー
ゴーストを讀む……一二五……林千歳
編輯室より……一三〇……編輯係

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

きさらぎ

茅野雅

わがぬげる羽織のうらの白さへも泣くがごとくに青む夕ぐれ

あぢきなくもの思ひ伏すかたちしぬ庇の横のなでし子の花

はらはらと涙こぼれぬしら玉の散り落つるにも似てこころよく

友禪を水につけつつ逢ひに來し人とものいふ河原の男

大比叡もきぬがさ山もしろがねの冠おもげにみゆるきさらぎ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わがしろき夢のなかにも二三人おどけ囃（にやし）をしてありしか
な

仰ぎみて涙こぼれぬ青しろき入口の中に立てる常盤
木

待ちあかす夜の水盤の花のごと白くつめたき星あまた見
ゆ

火を得むと冷たき灰をかき探すごとしこころにわれをさ
ぐれば

黍の穂のややに傾かむそのころにまた逢はましと別れける
かな

あなわびし子を尼にする日にたれむ帳のごときそらの色
かな

いとよろし刀ぬくとき衝立の後にかくるるおかるのかた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ち

戀の火のかつ消えつつもわがこころ洞(ほら)のごとくに靜なる
かな

蠟梅のうらさびしくも匂ふかな病める小指の癒えそめし
日を

化物の出るときゝたる穴倉をのぞきにゆきぬわれと久
吉

かなしげに枯木の伏せる谷あひに耳ちかく來て啼きぬ鶺
鴒

たはむれに云へる言葉の不思議にもわれをさいなむ日と
なりしかな

うす青み梅匂ふらむふるさとのわが夢のあとわが戀のあ
と

われうまれ母さへしらず世にあれば思ふことみなあはつけきかな
水晶のごとくつめたくすき透る心にむかひあれば神めく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

移りゆく心

與謝野晶

（一）

善しと人の褒むる物事の裏に
僞と慢心と嫉妬と潛む。
そは醜き不純の光なり
我は身を投げてあらゆる罪悪と悔恨と恥辱とに抱かれし
その隱れて徐徐にあらはるるもののほと、
遠空の星の永久に輝く如く、
純金の錆びず、金剛石の透きとほる如く、
いつ見ても活活として美くしく好ましきかな
あだし人のそを罵るも正直に罵るなれば亦美くし、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

○

彩色硝子の高き窓を半ひらき、
引きしぼりたる印度更紗の窓紗の下に
下町の煙突の煤煙を見下しつつ、
小やかな輕き朝飯のあとに若き貴女の彈くピヤノの一曲
東京の二月の空は曇れども、
若き貴女の心に緑さす
明るき若葉の夏の色、戀の色生の色、

過こし方を思へば空わたる月の如く、
流るる星の如くなりき。
行方を定めぬ身をば歎かじ。
わが道は明日も弧を描かん、
踊りつつ行かん。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

曳くひかり水色の長き裳の如くならん。

○

藝術はわれを此處まで導きぬ。
今こそ云はめ、
われ藝術を彼處に伴ひ行かまし
より物質的に、より藝術的なる處へと

○

われは軛となりて挽かれ、
駿足の馬となりて挽き、
車となりてわれを運ぶ。
わが名は「現實」なれど、
われと呼ぶこそすべてなれ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

脚本 叔父ワーニヤ（承前）

瀬沼夏葉譯

第一幕

（二）

アストロフ。あ、教授は？

ライニツキイ。博士かい、矢張相變らず、朝から夜更まで、自分の書齋に引込み切りて書いてゐるのさ。有丈の智力を絞つて、額に皺を寄せてからに、人にも自分にも役に立たん、何處の誰も聞いても呉れん其の論文を書いてゐるのだ、無暗矢鱈に書いてゐるのだ。書かれる紙こそは災難よ！　其れよりも寧ろ自分の自傳でも書く方がよからう、那樣ことよりも遙に可い材料よ、なあ、君、退職教授の何のことはない、乾からびたパンよ、腐れ學者よ……足痛風、僂麻質斯、半面神經痛、嫉妬と、怨恨から來る肝臟炎患者……で以て先生この先妻の所有地に住んでゐる、が、これは心ならず住んでゐるのだ、如何となればね、市に住むのは其財政が許さんからさ。而して永久愚痴を零し通してゐる。其癖彼れ自身位幸福なものはないのだのに（以下神經的に）なあ君、見給へ、これを幸福と云はずして何ぞやぢやないか、詰らん副補祭（下級の僧位）の息でさ、唯僅に神學校出身に過ぎん男が、學位を得て講座を得て、閣下とまで云はれる位置になつたのだらう、まて、

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

まだ其上に、樞密院議員の婿となりさ、いやまあまだ其他にも種々あるが、それらはまだおくとしてだ、ねえ君、聞き給へ、さうぢやないか、滿二十五年の長日月の間、先生美術其のものゝ何なるかを解せずしてだ、なあ、徒にたゞこれに就いて書いてゐる、讀んでゐる。ねえ、この二十五年間をさ。曰く寫實主義、曰く自然主義、曰く何とかかと、皆下らん、馬鹿氣切つた、他人の思想をたゞ口眞似してゐるのさ、え、いゝかいこの二十五年の間をだ、恁うも讀み、恁うも書いて居るのぢやないか、若し役に立つ奴なら、もうとうに群を拔いて頭角を現はすだらう、又若し馬鹿なら、一體這麼ことをしてゐるのは、面白くもない譯だ。畢竟この二十五年の間をだ、空ぽうの德利から、空ぽうの德利へ酒を注ぎ移してゐるのだ。然るに君、彼れ自身の己惚と、其の主張と云つたら奈何だらう！　が、奴はもうとうに退職して了つて、世間の奴等は誰ももう彼を知らん何も著しいことはないんだ。要するに彼はこの二十五年間を、まづ他人の場所を塞げてゐたのに過ぎんのだ。所がまあ見給へ、あの威張つた樣子と云つたら、もう半分ばかり神にでもなつた意かも知れん。

ヲストロフ。いや、君は大に教授を羨んでゐると見えるね。

ヲイニツキイ。羨まなくて君！　何と云ふ女に又成功する先生だからなあ、ドン、ジュアンも遠く及ばんよ。全く我輩には分らんよ、よく恁うも女にかけて成功するとは！　まあ彼の先妻のだ、その我輩の兄弟だが、實にそれは好い女であつたんだ、おとなしい、純潔な、丁度此の淸らかな空のやうに心の澄んだ、品性の高い、度量の廣い、さうして君甚麼に彼女を崇拜したものが澤山あつたと思ふ。恐らく教授先生の生徒の數より澤山だつたらう。それで又夫に對して愛の深かつたこ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とは、あの潔白な天使がたゞよく出來得る、そのやうな愛を有つてゐた女であつた。それからね、又我輩の母がだね、つまり先生には姑だが、これが又何と云ふ彼の崇拜家なのだか、彼女は今に至るまで絶對の讃美を彼に献げてゐるのだ。て、又彼の第二の妻君は如何だらう。那麼美人で、那麼利發な、君はまだ些と見たばかりだらうが、彼女が教授の許へ嫁つた時には、先生もう可加減な年寄さ、然るに彼女は先生に、其の美と、其の若さと、自由と、其光りとを皆献げた。何の爲にだ。ねえ君、是は何の爲にだ？

アストロフ。夫人は教授には貞實なのか？

ヲイニツキイ。いやもう、殘念ながら貞實なのだ。

アストロフ。何故又殘念ながらなのだ？

ヲイニツキイ。其れはだ、抑もこの貞操と云ふ奴が、我輩に云はせると徹頭徹尾首肯り難い奴よ。貞操と云ふ其物は如何にも理屈は綺麗だが、其處に全て道理がない、筋がない、理不盡である。いゝか君、嫌で堪らん所の老人の夫を棄てる、これは不徳義である、憐むべき若さと、活きた感情とを強いて自分に葬つて了ふのが徳義である。是が貞操なるものゝ眞相なのだ。

テレエギン。（泣くやうな聲で）ワーニヤ樣（チイニツキイを優しく呼ぶ）私はな、お前樣が那樣ことを云ふのを誠に嫌いだよ。ねえ、さうぢやないか、若し誰か、其の妻とか、夫とかを棄てるやうなものがあればね、其者は即ち不義な人間でせう。さういふものは國家をでも棄るでせう。

ヲイニツキイ。（焦燥つたさうに）おいワツフル！口に栓を支はんか、其の噴水の栓を！

テレエギン。まあワーニヤ樣、お聞きなさい。私もね女房に棄てられた覺えがあるのでさ、然も結婚

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をした翌日、私の容貌が氣に入らないつて、それでもつて男を拵へて逃げて了つたと云ふもので
す。然るに私はそれにも拘らず、自分の義務を破りません、私はどこまでも女房は矢張女房とし
て愛して、實を守つて、出來得る丈けを助けてやり、其男との間に出來た子の養育費として財產
をも遣つて了ひました。ですから私にはまあ幸福は無かつたのです、ですが其換り心の底には自
負心が確に殘つて、それで大に心强かつたのです。所が女房の方は奈何です、施て天然自然の法
則の下に、容貌は美が失せ、其上に男には死なれて了ひました……
さあ奈何です、恁うなつて來ちや女房の方には何が心强い賴みになることがありませう？
（ソーニヤ。エレナ、アンドレエウナ登場、少し經つてマリヤ、ワシリエウナ書物を持ちて登場。彼女は腰を掛けて直に書物を開き、注がれた茶を見もしずに飲む。）

ソーニヤ（慌しく乳母に）乳母や、彼方に今農夫が來たから、早く行つて何だか聞いて御覽。お茶は私自分で注ぐわ……（茶を注ぐ）（乳母退場、エレナ、アンドレエウナ茶椀を取つてブランコに腰を掛る）

アストロフ（エレナ・アンドレエウナに）いや僕は御主人の所へ實は出たのでした。貴君の御手紙で僂麻質斯とやら承つて、早速出ましたのですが、只今お見掛け申したところ、大ぶもうお好ろしいやうで？

エレナ、アンドレエウナ。いゝえね、昨日は大變に足が傷むと申したものですから、それでお出を願ひましたが、今日はもうあの通り宜しいので御座います……

アストロフ。さうでしたか。私は又さうとは知らず、いや十里（三十露里）の餘も、これはたゞ首を振られ損をした譯ですな（田舍の道は惡いので車がひどく搖れるから）まあ仕樣がない、よくあるのですよ、さう云ふことが。
然し其換り今晩は是非御厄介になりたいものですな。少なくとも眠る丈は quantum satis

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ソーニヤ。どうぞ是非。本統にお珍しいことですわ、貴方がお泊り下さるなんて、さうしてお中食は？
アストロフ。いやまだ濟りませんでした。
ソーニヤ。それぢやお序にお中食も召上れ、私共ぢやね、此の頃はお中食が六時過ぎなのですから、
（間）おゝ冷いお茶ね！
テレエギン。サモワルの温度が頗る降りましたからな。
エレナ、アンドレエウナ。可うございますよイワン●イワノヰチ様、冷いので頂きませうよ。
テレエギン。いや失敬ですが、私はイワン●イワノヰチでは御座いません。イリヤ●イリヰチ、テレエギンと申しまして。或人等は又、私の痘痕面のところから、名づけてその、ワップルとも申しますが、私はもうずつと前、御令嬢の洗禮の時に代父になりましたのが御懇意の初めで、こちらの檀那様はよく御存じで御座ります……　只今ぢやもう恁うして此方の別莊に御厄介になつて居りますので、或はお氣が着いてお出でかも知りませんが、中食も始終こゝで御一所に頂いて居りますので。はい。
ソーニヤ。私達の本統に片腕のイリヤ、イリヰチ様、さあ、まあもう一杯お茶を、ねえ代父様、お茶をお注ぎ申しませうね。
マリヤ●ワシリエウナ。あつ！
ソーニヤ。何です？　お祖母様。
マリヤ、ワシリエウナ。あゝ忘れた、私はアレクサンドル教授に云ふことを……　すつかり忘れてゐた　今日私はハリコフのパワェル、アレクセエヰチ様から、手紙を貰たつのさ、而して彼の人

が書いた小冊子と……
アストロフ。面白いものですか？
マリヤ•ワシエウナ。面白いのですよ、だけれど何ですか少し可笑しいんですよ。七年前に自分で辯護(べんご)してゐたことを、今は排斥してゐるのですもの變ぢやありませんか？
ヲイニツキイ。些(ちつと)も變なことはありやしません。お母樣、まあお茶でもお上りなすつちや如何です。
マリヤ•ワシリエウナ。だつて私は話をする方が面白いやね。
ヲイニツキイ。もう可加減にしてお置きなさいね。何もさ、五十年の間も引返し、押返し、那樣(そんな)ことばかりを話したり、讀んだり、もう澤山ぢやありませんか、お終にしても。
マリヤ•ワシリエウナ。おや、お前も變な人だよ、何う云ふ譯なのです。私が話をするとお前には氣に入らない。惡るかつたらどうぞ御免なさい。それにしても、ジャン、お前どうしたのだか、此の節(せつ)は餘程變だね、人間が全で別になつて了つたよ。私にや、さつぱり譯が分らない。前には見識の定まつた、はつきりとした明るい人間であつたのだけれども……
ヲイニツキイ。ふん、我輩が明るい人間だつたつて……然しそれによつて誰にも明るくは無かつたのだ……(間)明るい人間だつたか！　まあ是より酷な諷しやうはないだらう！　今已に我輩は四十七歳になる。所で去年まで我輩も貴方々と同じやうに、實生活を見ない爲に、君達の煩瑣哲學で、自分の眼を故と暗まさうとつとめてゐた。さうしてそれで滿足もしてゐたのでした、然し今君達に告げるが、いや、知つて貰(もら)はなければならんのは是だ。今、我輩の老年が己に我輩より奪ひ去つた所の總てを、先には有つことが出來たのであつたのに、殘念にも其時代を、實に空しく、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

實に恐に過して了つたと云ふ、この事をだ。これを思ふと心外でならん、心外て、心外で夜も眠が合はされやせん！

ソーニヤ。よう、ワァニャの叔父樣、那樣に話らないの？

マリヤ・ワシリエウナ。（息に對つて）お前は丁度それは自分の先の意見を責めてゐると云ふものです……　然しね其意見が惡いのぢやないよ。お前自身が惡いのさ、ね、お前は意見と云ふものは死んだ文字であると云ふことを忘れてゐたからさ。たゞ成すべきことを爲さへすれば其れでよかつたのさ。

ヲイニツキイ。なすべきこと？　誰も皆あの教授のやうな寫字機（字を書く Perpetuum Mobile）になることが出來るもんですか。

マリヤ・ワシリエウナ。お前は何んだつてね？

ソーニヤ。（哀願するもののやうに）ようお祖母樣！　ねえ叔父樣！　もう後生ですから……

ヲイニツキイ。あゝ、もうぢあ降參しませう降參しませう。

エレナ・アンドレエウナ。あゝ今日は好いお天氣ですねえ……　酷く暑くもなし……

ヲイニツキイ。恁云ふ天氣には首絞りをするのに丁度可いです……

三

（テレエギンはギタの調子を合せる。マリナは家の側を歩いて鷄を呼んでゐる。）

マリナ。トゝゝゝゝゝ、トゝゝゝゝ。

ソーニヤ。乳母、百姓は何に來たの？

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

マリナ。矢張り同しことで、あの林の側の野のことでね。ト、、、、、。
ソーニヤ。鶏が奈何かしたの？
マリナ。ペトルシカが雛をつれて行つて了つたですよ、鳥でも攫はなけれいゝが……（退場）
（テレエギンはポリカを弾いてゐる。皆默して聞く。勞動人登場。）
勞動人。ドクトル先生は此所ですか。（アストロフに向つて）。何卒お出でを願ひたいんです、ミハイル・リウオーヰチ先生。貴方樣をお迎に參つたのですが。
アストロフ。一體何處から來たんだ？
勞動人。製造場から參りました。
アストロフ。（殘念さうに）有難い譯だ！　それぢや行かなけれやなるまい……（眼で帽子を探しながら）えゝ厄介な！
ソーニヤ。まあ生憎ですねえ……　ぢやあ製造場からお中食にお出でなさい。
アストロフ。いや、もう晩くなるでせう。……
厄介な……（勞動人に向つて）おいお前僕にウォトカの一杯も持つて來んか（勞動人退場）いやになつちまう……（帽子を見出した）アストロフスキイの或る脚本に、髭の馬鹿に大きい、智慧の馬鹿に少ない人間があつた。ありや丁度僕さ。それでは御免を蒙ります諸君……（エレナ、アンドレエウナに向つて）奥樣、若し何日か、ソヒヤ、アレクサンドロウナと御一所に私の所へお出で下さいましらば、僕は非常によろこびますが、僕も少し計り所有地と云つたやうなものを有つてゐまして、左樣さ、皆で三十四五町（三十デシヤチン）ばかり。若し其の方に趣味をお有ちでしたらどうぞお出下さい、其のかはり此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の邊三百里(サウエルスタ)以内には見られん模範的な庭園と、栽培所があります。さうして僕の隣に山林管理所があるのです……然し所長は老人で、始終病氣してゐるので、まあ實際には僕が始終事務を取つてゐるのです。

エレナ●アンドレエウナ。さうですか。貴方が大層山林事業を好んでお出のことは、もうとうに私に話したものが御座いますよ。そりや利益はなか〳〵おありでせうが、然し其れは貴方の現在のお職務にさまたげを致しませんか、貴方の御本職はお醫者様でゐらつしやるのですもの。

アストロフ。何が我々の眞實に現在の職務ですか、是はなか〳〵知るに難いことでせう。

エレナ●アンドレエウナ。然し山林事業は貴方に那様(そんな)に面白いのですか？

アストロフ。非常に興味がありますよ。

ヲイニツキイ。(冷笑的に)大にありさ！

エレナ●アンドレエウナ。(アストロフに向ひて)でもお見受け申すところ、貴方はまだお若(わか)くお出でのやうですが……　さうですね、三十六か七……　ですから私貴方の有仰るやうに、その事業がそれ程に貴方に面白いとは思はれませんねえ。始終山林！　山林！　とそのことばかり、何ですか少し退屈のやうに思はれますよ。

ソーニヤ。いゝえ、そりや面白いのですよ。ミハイル●リウォーヰチ様は毎年新しい林を植つけて、古い林を濫伐しないやうに盡力してゐなさるの、さうしてそれでもう、銅のメタルと免狀を送られましたのですわ。そりや此の方の有仰るのをお聞きになると、全く成程とお思召すわ。此の方の話てはね、林は土地の飾になつて、人間に美を解することを敎へてゐますつて、さうして人に偉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大の心を與へますし、荒い氣候も林を和らげますつて、又ね、柔い氣候の國では、天然と戰つてそれに力を費すことが少いでせう、ですから人間が比較的柔和で優美ですわ、又人間が美しくて、感じが鈍くないんです、言は優美で、擧動もしとやかです。恁云ふ國の人々は、學問も美術も盛になつて、其人達の哲學は悲觀的でないんです。女に對しての關係も優美で、何となく恁う高雅なところがありますわ。

ヲイニツキイ。（笑ひながら）ひや〳〵……其の說は結構さ、その通りだ、だが、我輩にはまだ全く感心は出來んね。それだから（アストロフに向つて）ねえ君！　暖爐を焚くにも薪で焚くし、小屋を建てるにも木で造ることをどうぞ我輩に君許し給へ。

アストロフ。君は暖爐を焚くには、泥炭でも出來るぢやないか。小屋を建てるなら石でも可からう。而して僕が假に此所で一歩を讓つて、必用の爲なら林を伐るのも敢て拒まんとしてだ、然し何の爲にそれを濫伐するのか、露西亞の深林は斧の響のもとに伐り割かれてゐる。濫りに巨萬の樹木は伐り倒されてゐる。獸類や、鳥類の居所は荒されて、川は淺くなつて水は涸れる、美しい景色は去つて又歸らんのだ。之れは皆人間が怠者で、身を屈めて地中から燃料を取上げると云ふだけの精神がないからだ。（エレナ・アンドレエウナに向つて）奧樣本統ぢやありませんか、我々自ら造ることの出來ない、そのものを破壞して、この自然の美を暖爐の中で燒いて了ふなんぞは、餘程無智な野蠻人とならなければならない譯でせう。人間は自分に與へられた所のものを、益殖やして行く爲に、智慧と、創作力とを固有してゐます。然し今日に至るまで、何にも創作力を用ひないのみならず、强いて破壞を敢てしてゐるのです。であるから、深林は益少さくなるばかり、川は益水

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が涸れる、野鳥は何所かへ行つて了ふ、空氣は惡くなる、土地は一日毎にます／＼衰へて、ますます寂びれて了ふことになる。（ツイニツキイに向つて。）それ、君は僕をもう冷笑の眼を以て見てゐる。さうして僕の云ふことなんぞは、君には何んでも眞面目には取られんのだ。さうして……又實際、或は眞に馬鹿げてゐることかも知れない。然し僕が濫伐から救つた百姓の林の側を通る時や、或は僕の手で植つけた若い林の風に鳴つてゐるのを聞く時は、僕は思ふね、たしかに自覺して思ふね、空氣や氣候も少しは僕の權力內に關してゐると、さうして又、もし千年の後、人間が幸福なものとなるとすれば、これに於て、少しは僕も原由となつてゐるのだと。僕が一本の樺の木を植付けて、後にこれが青葉を繁らして風に動かされるのを見る時は、僕の心は何とも云へん程愉快になる。さうして僕は……（ウォトカの杯を盆に載せて持つて來た勞働人を見て）そりやさうと……（飲みながら）どれ僕は行かう。恁麼ことは皆馬鹿々々しい狂人じみたことだらう。まあ詰るところはだ。ぢやお暇を致します！（家に向つて行く）

ソーニヤ。（彼を自分の手に取つて一所に行く。）此度は何時貴方は私共へお出てになりますの？

アストロフ。解りませんなあ……

ソーニヤ。また一ケ月經つてですか？

（アストロフとソーニヤとは家に去る。マリヤ、ワシリエウナとテレエギンはテーブルの側に殘る。エレナ、アンドレエウナとツイニツキイとはエランダの方に向ひて行く。）

エレナ●アンドレエウナ。イワン●ペトロヰチ樣貴方の拗戾にも困つたものですねえ、貴方はマリヤ●ワシリエウナを怒らして Perpetmm mobile のことを云はなければならなかつたのですか、今朝も貴方朝餐の時、アレクサンドル（夫の名）に突掛りましたし、本統に餘りそれは淺はかぢやありませ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んか？

ヲイニッキイ。然し我輩が彼を憎らしいなら奈何ですか！

エレナ●アンドレエウ゛ナ。だつてアレクサンドルを憎む譯は無いでせう。彼の人は皆と同じ人間ですわ、貴方より悪いつて云ふこともないでせう。

ヲイニッキイ。いや貴方、もし貴方が自分の顔や、自分の擧動を見ることが出來たら奈何でせうな……貴方と云つたら、生きてゐるのが如何にも如何にも厭さうですよ。如何にも何んだか詰らんやうですよ。

エレナ●アンドレエウ゛ナ。あゝ本統に厭になつて了ひます！　皆様がさうして夫を惡くお仰つて、私を可哀さうに見てお出てです。不幸なものだ。夫が那麼に年を老つてゐて、つて！これわ私に對しての同情です、私よく解つてゐますわ！　そら貴方今アストロフ様が何と云ひました。皆貴方々は無智に林を亡してゐる、而して土地には忽に林がなくなつて了ふつて。さうです、丁度其様に貴方は無智に人間を亡してゐますわ、で、貴方のやうな人達の爲に、世界には貞操も、潔白も、自分を犠牲にする力もなくなつて了ひます。ねえ貴方、もし貴方に屬するものでないんなら、貴方は女を平氣な心で見てお出でになれば宜しいぢやありませんか。本統に何ですわ、あの醫學士の有仰る通り皆貴方々の中には破壞の惡魔が住んでゐるのです、貴方々には林も、鳥も、女も、情誼も容赦はないのです……

ヲイニッキイ。我輩は那樣哲學は大嫌ひさ！

エレナ●アンドレエウ゛ナ。あの醫學士の顔は疲れたやうな、神經的の顔ですねえ、意味のある顔です

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わ。ソーニャは恐しく彼の人を好いて了つてゐるのですよ。すつかり好いて了つて。でも私それはソーニャが無理もないと思ひますよ。彼の方は私が此所へ來てからもう三度お出でしたが、私はつひぞ例のはにかみやでして、まだ碌に話も致しませんし、お愛想も致しませんでした。乾度意地が悪いと思つてるでせうねえ。乾度さうですわ。したがイソン●ペトロキチ様、私と貴方と這麽に不思議に親しいのは、お互に不滿足同士だからでせうねえ！　飽足らない同士！　あれ、厭ですねえ、何を那樣に貴方顔を御覧なさるの、私大嫌いで御座いますよ。

ヲイニツキイ。もし我輩が貴方を愛してゐるなら、それは據ないぢやありませんか、貴方は我輩の幸福であり、生命であり、若さであるです、然るにこれに對して貴方からの挨拶は無きにも等しい、成功の望は殆ど覺束ないのですが、いや我輩には何も入らんのです、たゞ貴方を見て、貴方の聲を聞くのを許して頂きたい……

エレナ●アンドレエウナ。お静に貴方。貴方のお聲が人に聞えますわ。（家に向つて行く。）

ヲイニツキイ。（彼女の後に尼いて行きながら）我輩の衷情を訴へるのを咎めないで下さい。どうか我輩を追ひ拂はんで下さい、これ一つが我輩には最も大切な幸福なのですから……

エレナ●アンドレエウナ。それは私に苦痛です……（兩人家に入る。）

（テレエヤンはギタウの絲を彈いてポリカを奏いてゐる。マリヤ、ワシリエウナは何やら小冊子の餘白に書きつけてゐる。）

幕

——未完——

チエホフ

母の死

岩田山美

堂島の叔父さんを依賴つて家を飛び出してからもう十年になりました、其の頃はお桂も若くつて、白い薔薇の花簪や摘細具を悦こんで居た頃でした。前後の考へと云ふものは丸つきり無く、只もう這麼辛い家からは一刻も逃れたいと云ふ考へを、多少は母への當付もありました。別れてからは、折節の時候も葉書で濟しましたし、暮とお盆には大阪の昆布のお菓子を送る許りで、遠々しくなつて居ましたが、それでも身內の者と云つては只一人しか無い母が危篤との報告を受けて、お桂は直ぐに家を出ました。會社へ行つて夫に逢つてから、其の足で叔父の家へ寄りますと、親の家へ行くと云つても、義理ある人許しの中へ行くんだからと云つて、苦勞人の叔父は默つて紙入れを渡して吳れました。お桂は只濟みませんを繰り返して、叔父に送られて停車場へ着きました。

久しい間、別段に思出すと云ふ事もなく、懷しいとも思はなかつたんですが、斯うして汽車に乘つた儘で居ると、明日はもう家へ着いて居るんだと思ふと、何だか忘れて居た昔の事も悉皆新らしい姿で目に浮んで來ます。母の貌も眼先にチラつきます、家の事を思ふと何日も一番先に胸に浮ぶのは、倉前の薄暗い坐敷で、其處には古い絨緞が裏返しに敷いてありました。足許りが馬鹿に冷たくなつて、坐つて居ると膝頭から冷え込むやうですし、殊に冬なんぞは足袋が奈何も切れて困ると母は零し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てゐましたが、それでも疊が助かると云つて父は大切にして居ました。
大きな水牛の老眼鏡を額の上にずり上ては、算盤玉許り彈いて、年中疊を見詰め乍ら下唇を嚙んで考へ込んでゐました、前齒が一枚拔けてゐたのも氣になりました、而して獨言を云つて笑つたり、首肯いたりしてる、鐵色木綿の道行が大好きで、體はまだ頑丈なんですが顏は大變な皺で、笑ふと眼も何も苦茶々々になつて了ひます、お桂は奈何しても始はお父さんとは云へませんでした、後添に入つた母のお桂は連れ娘でしたから。
若い時白粉を塗たり、眉を引いたり、俳優のやうに餘り顏をいぢめたせいだと母は云ひますが、女の思だと蔭では人が云つてました。近所の物持の後家さんが迷つて、お金は取れる、世間からは恐く云はれると云ふので、到頭首を括つて死んだ、其の女の思が殘つてるのだとも云ひます。兎に角大變な皺だつたと記憶てゐます、お桂が父の顏を見ると兎角逃げたがるのを母は苦勞して、傍へ〳〵とやるやうにしてました。
男の癖にそれは約しくつて、何日も臺所の七輪の前に立膝をして、煙草をスパ〳〵やり乍らお總菜の世話から、八百や魚屋の事に迄口を出して、一々安い高いと値切り散らしてゐましたのを東京者の母は何より極惡がつてました。而して誰が惱らうと何と云はふと父は惱ると云ふ事をしない、人には惱ると損をすると口癖のやうに云つて、甚麽時でも只金齒を出してニヤ〳〵笑つてゐる許りでした。
親類の質屋から質流れを安く廻して貰つてお桂は何日もそれ許り着せられてました、家内中の者が新らしく衿肩をあけた着物を着た事がない、七子の黑紋付の羽織でさへ切付紋だつたと云つて母は驚ろいてをりました。一人息子の兄が又父の性質酷似受繼いだのですから、界隈切つての金滿家ですけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れど近所の評判は頗る悪るくつて、氏神様のお祭の時などはお御輿を持込まれて、酔つた紛れと云つて若衆達に門を打こはされたと云ふ話もあります、兄の考案で高利貸にお金も廻してゐたやうでした、併し萬事家の中の事は秘密にしてゐて、母やお桂の耳へは入れないやうに、ヒソ／＼と何日も倉前の暗い處で額を集めて談合つてゐる許りでした。

斯う云つた家庭でしたから飛入りのお桂は邪魔者扱ひて、遠慮深い母はお世辭にお桂を叱るやうな事もありました。兄が大病ひした時などは、鹽斷をして、祈つたのを、聞いた人は其の心掛に感心しましたが、お桂にはそれが奈何にも只父や兄に取り入るためのお世辭としか取れませんでした。

母はお桂と二人で家に居た頃は、ついぞ缺した事のなかつたお酒も、此家へ來てからはお盃を手にする事なんぞは只の一度もありません。好きなのと呑み習はした母は、遂ゝ我慢が仕切れなくつて、晩のお膳に屹度一合宛父と兄とへつくお銚子の上前をお盃に一杯宛剝ねる事に極めました、而して灯火に透して見ては掌て口の邊りを拭いて置く、それを何日か兄に嗅付られて、蟲の居所でも悪い時なんかは、洋燈の光りに故意と透かして振り乍ら、「お母さん、三河屋は此の頃量が悪くなりましたね、奈何です之で一合の酒なんだ」と云ひます、母は厭な顔をして生返辭をしてましたが、それからは少し宛水をさす事にしました。

丈夫な時でさへ母は斯うして人の機嫌許り取つて居たんです、好きなお酒も嫌ひにして止めますし一々人の顔色許し見てゐたのが、此度のやうに大病になつたら、義理一遍の看護にもまア何れ丈氣兼ねをしたでせう。冷たい堅い蒲團に包まつて、母の事だから心にもなく手を合せて拜んだり、泪も零した事でせう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十九の秋お桂が家を出やうと云ふ晩、母は四辻迄送つて來て、大阪へ行つたら出世をしてお呉れ、離れてゐてもおつ母さんはお前の事許り思つて居るんだから、斯うやつてお前に苦勞をさせるよりも却て身の爲だと思つて別れる辛さは我慢するから、何も親孝行は親の傍に居る許りぢやないんだよ、と云つて平常も懷中から離した事の無い、大黒樣の鬱金木綿の財布を內懷から出して、肌の暖みで生溫くなつたのをお桂の懷へ押し込んで呉れました。別れる辛さよりも、之で重荷が降りたと云ふやうな悅ばしさが顏の何處かに見えました。嘸ぞ、眞實の娘でさへ親の病氣なのに歸つても事ない、親不孝な者です、と云つてゐるのでせう。一生人の顏色許り苦にして送つて了つたん、だとお桂は母の面窶れた姿を相像して憐れまない譯には行きませんでした。

お桂が家へ着いた時はもう遲かつたんです。母は息を引取つた後で死目には遂々逢へずに了ひました、母の枕元に坐つてますと兄が嫂を連れて來ました、嫂は母の顏へ掛けてあつた白い巾を外けると、「おつ母さん、待つて被在つたお桂さんが被入いましたよ」と云つて眼を頻打(しよぼ〳〵)きました。見違へる程窶れてもう以前の面影もありません。お桂は無言つて母の眼を撫ぜました、其れは身に染みるやうな冷たさでした。

「甚麽にまあお逢ひになりたかつたでせうねえ、もう少し早いとなんでしたけれど、お目が覺める度びにお桂はまだかまだかつて仰在り續けでしたが、不意いと、あ、お桂が、と仰在つた限り、もう何にも仰在らなくなつて了ひましたんですよ而してね少しお笑いになりましてね」

お桂はもう物が云へませんでした、而して只嫂の顏を見て心許り首肯いてゐました。其處へ今年五つになる健一と云ふ甥がバタ〳〵と椽側から馳けて來まして、突然母の膝に腰掛けて、お桂の顏を物

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

珍らしさうにヂロ〳〵みてゐます、胸の汚れた西洋前掛が目に立ちました。嫂は子供の兩手と頭を押へて、

「健ちやん、叔母樣にお低頭をなさい、あの昆布を頂くでせう、大阪の叔母樣ですよ」

「まア温和ねえ、急いだものだから遂ひお土產を持つて來なかつたから何か買つて上げませうね、健ちやんは何がお好き?」

「僕昆布大嫌ひ」

「あら其樣事を云ふもんぢやありませんよ、何日だつて頂くぢやありませんか」と嫂は氣の毒さうに顏を紅くしました。

兄は忙しそうに部屋を出たり入つたりしてゐます。背の小さくキチンと定つた處から、口許を少し曲げて、可笑しくもないのにお世辭笑ひをする處迄、十年の間に兄は父を若くしたやうになつてしまひました。細かい處に氣がついて、嫂の手落りを一々注意してます。兩手を膝の上に置いて、他の話を聞く時は什麼にも熱心さうに俯向いてハイ〳〵と云ふ處も父に生寫しです。がもう以前のやうな若い威勢は失くなつて、世の中を只巧者に渡つて行くとしか見えません。お桂に向つても他人と少しも變らず、至極丁寧で、以前はお桂〳〵と呼捨にしたものが、面と向ふと云憎さうにお桂さん貴女はと云ふ調子です。婢には大阪の奧樣がと話してゐます。お桂は兄の落付いて坐つたのを見て改めて母が世話になつた禮を云ひました。

「もう少し生して置き度かつたのですよ、まだ死くなる年ぢやありませんからね、私も斯う急にとは思はなかつたものだから、嘸ぞお桂さんも殘念に思つてゐられるだらうと、實にお氣の毒でね」

「否もう充分お手をお盡し下すつた事はよく分つてをりますから心殘りは御座いません、眞實に何とお禮を申上げていゝか」

「それはもうお力落しでせうけれど、手に手を盡した丈は私の力の及ぶ限りやつた積りなんです、其處だけはまアお母さんも大變に悦んでゐなすつたやうでした」

「無ぞねえ、母も悦んでをりましたでせうよ、眞實に種々御親切になりましてね」

「まア自分でも遺憾のない積りなんですが、醫師なんかも近所の掛りつけのでいゝと仰在てたんですが私が承知が出來なくつてね、神田の先生に御診察を願つたり、まア我々にしちやあ分に過た位だと思つて、それで駄目だつたのだからと斷念はつけてゐるんですが、殊にお世話になつたお母さんの事ではあるし、お桂さんの代りにとも思つてね」

「まア夫れ程なすつて下さつたんですか、眞個に恐れ入りますね、母も甚麽にか難有がつたでせう」

母の枕元で斯うお互に心にもない事を云ひ合ひました、母も死ぬ迄は心にも無い事ばかり云ひ通したでせう。

お桂は這麽事を云ふ兄の心が見え透てゐるので、嫂が立つた後に、

「兄様餘り立ち入つて失禮ですけれど」と聲をひそめますと、兄も膝を進めて、首をつき出しました

「此度の費用は萬望私に持して頂き度いんですが」

「何有に費用なんて飛んでもない、私にだつてお母さんなんだから」

お桂は云ひ過たやうな氣がして少し紅くなりました。

「でも兄様には散々御迷惑を掛けて其の上に又願つては私の氣が濟ませんから何卒ね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兄は少時首を傾げて考へてゐましたが、
「ぢやあまア切角のお心だから一應考へた上で何とかまた」
「萬望ね、然うさせて下さいましよ、てなくつちやア私の氣が濟ないんですから、それからね此の帛紗包を兄様に預つて頂きたいんですよ私はそゝつかしやですから」とお桂は叔父から貰つた紙入をそつくり兄へ預けました。

父を失つた時は母と二人して幾度も泣いた事を記憶してゐます。それが此度は只た一人限りの親身な母に死に別れて、左程悲しいとも思へない自分の心が、染々淺間しいやうに思へました。親に死なれると云ふ事は、身も世もあられず悲しい事のやうに思つてゐたのに、左程にもないのが情無くなりました。

軈て、若い威勢のいゝ、剃りたての青々した頭の坊さんが來ました、這麽若い身空で何故坊主になつたのだらうなどゝ餘計な事迄心配をしてゐました。少しするとお經が初まりました、お線香を立てゝ坊さんにお經を讀んで貰はなければ人が死んだやうには思へないのでせう、嫂は部屋の隅で泣いてました。

兄はお通夜に來て呉れた人に一々お桂を紹介せしました。調子が旨くつて好く蝶舌るもんで、坊さんを中心に種々な話題が持出されました、高利貸の足を洗つて洋食屋になつた親類の人が、坊さんは儲りませうなんて不躾な間にも厭な顔一つせず、頭を掻いてはつ〳〵と笑ひ乍ら、「お金が儲るのは相場に限りますよ」と堂島と聞いた丈で相場師と當りをつけて、お桂の方を見ました。茶の間では手傳に來た人達にお酒が出たらしく、奈うせ納つといたつて惡くなるからお皿ごと此方へ出してお了ひ、と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兄が指圖をする聲も交つてゐます。お桂は唐紙に倚り掛つてうと〳〵しました。
「お桂さん、風を引くわ」と嫂に肩を叩かれて吃驚りした時は、體を二つに折つてゝ、腰が伸びない程痛くなつてました。
　汽車に疲れてるんだから、と無理にお桂は離座敷に連れて行かれました、年增の東京者らしい婢が床を敷いて、まだ何だかもじ〳〵してゐますから、
「お前さんにも種々とお世話になつた事でせうねえ」と紙に包んだものをやりますと、婢は幾度もお低頭をした後で帶の間へさし込み乍ら、
「眞實に奧樣は皆樣に、氣兼やもうお遠慮許りして被入りましてお氣の毒で堪りませんでした、傍の者でさへ、ねえ貴女」と意味ありさうに云はふとするのを、お桂は被せるやうに、
「だつて壽命だから仕方がありませんわ、幾等何と云つたつてもう追付く事ぢやありませんからね」と云つた儘何にも故意ときゝませんでした。
　蒲團に包つてみましたが眼が冴えて眠られません、一時も二時も聞いてゐました、それに小枕が堅くつて首筋が痛くなつて了つたんです。斯うやつて床の中にゐる位なら寧そ起きた方がいゝと思つて、寢衣の上に羽織を引かけて廊下へ出ますとお線香の匂ひが此處迄します、母の枕元を通りすがつた時建付の隙から何の氣も無く一寸室の中を覗いてみると、お通夜の人達は大方懷手をしたまゝ茫然り、もう喋舌る丈の氣もないやうに見られました。兄は三疊の薄暗い灯の傍で何かしきりと數へてゐましたが足音を聞いてツイと顏を上げて、持てるものを慌てゝ懷中へ秘しました、紫の巾がちらと見えましたと同時に自分の紙入れだと分ると、何だか來てはならない處へ來て了つたやうで、後にも先にも行か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れないやうな氣持て其處に立止りました。
「お桂さんぢやないか」と兄は障子を啓けて顏を出しました。
「兄さんまだ起きて被入つたの」とお桂も慌てた妙な云ひ方になりました。
「遂に假寢をしちやつた」と兄は欠伸をして目をこすつてます。
「お疲れてせう、お休みなさいましな」とお桂も眼をショボ／＼させ乍ら笑顏をして引返しました。
坊さんが又お經を讀み出しました。
野邊の送りを濟して仕舞ふと、最う之で此家との緣も切れたと云ふやうな氣がしました。二タ言目には嫂も淋しい／＼と云ひ乍ら、何處か氣が伸び／＼して、もう自分のものだといふやうな樣子が、何彼につけてあり／＼と見えて來ます、今迄扣へ目勝に、云ひたい事も云へなかつたのが、一時に出ると云ふやうな。
「棺がある內はまだよござんすけれども」とお茶を注ぎ乍ら云ひました。
「隨分長い間氣苦勞をなすつたのね、お父樣がお死りなさると引續きなんですから」
嫂は荒れた手で、ガサ／＼顏を撫てゝ、而して後れ毛を耳の後へ挾みました、小造りな、毛の薄い色は白いんですが、其の代り雀斑が鼻筋に一ぱいありました。
「お父樣が被入つた時は離室に被在つたの」
「えゝあの四疊半に二人てゐたんですよ」と目許り笑つて、
「おつ母さんは眞實にお優しい方なんですけれどね、でもお父樣は却々しつかりして被入いましたから良人も寄して許りゐたんですよ、親父のやうにあゝ頑固ぢや堪りやしない、お桂さんが逃げ出した

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のも無理ぢやないつて、何日でも貴女の事はお氣の毒がつてね」

お桂は何だか擽られるやうな、妙な氣がして、只無言つて、それでも仕方なく笑つてゐました。

「芝居に行くぢやァなし、寄席にだつて行かず、眞實に樂しみなんてものはありやしないんですもの隅に夫婦で出かけますとねそれでも歸りには息つぎだつて云つては何處かへ寄るんですけれど、それだつてつひ好きから呑むお酒を酔ひ過して顔が這麼に赤くなつてちやバツが悪いつて心配するんですよ、それなら始つから呑まなきやァ好いのにねえ、お酒の顔を見ると奈河しても我慢が出來なくなるんですよ、始は氣が大きくなつて親父なんかに慍られてへイ〳〵する俺ぢやァないイザとなれば此方からお去らばだの何のつて云つて置き乍ら、サァ歸るとなると急に顔を冷すやら大騒ぎなんですよ、それが可笑しくつてねえ」と獨りで思ひ出しちやァ可笑しがつて、

「若い時分は何でも一度家を飛び出した事があるんですつてねえ、酔ふと直きに其の話なんですよ、彼の時家へ歸りさへしなければ今頃はもう立派な立女形か何かになつてゐたらうにつてね貴女眞實に惜しい事をした、顔さへ好ければいゝんだから河合や喜多村なんかに負けるものかつて」

嫂はお桂の顔を見ては、手を口に當てゝ媚るやうに笑ひます、お桂も其の頃の事を記憶してゐますから一緒になつて笑ひました。

學校も中途で退學させられて、毎日暇な身體を持ち扱つて居た兄は、一時は投網に夢中になつては、裏の空地に脚達を持ち出して、一稽古をしてゐました、旨く網が廣がらなくつて、一緒に轉げ落ちて膝頭を擦りむいた事もあります、夫れも何日か飽きて了つて、此度は新俳優になりたいと云つて騒ぎました。何事も直ぐに飽きる兄が是許りは餘程なりたかつたものと見えて、夜中に密そり起きて踊の稽

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

古なんかしてゐました、お桂が薄茫乎した障子に映る影法師に驚いて、ソッと覗いて見たら踊獨稽古と云ふ本を見乍ら種々妙な體つきをしてゐる處だつたので、思はず吹き出して了つた事があります、それから十日許り過ぎて、兄は家のお金を持ち出して姿を隱して仕舞いましたが、後で聞いたら惡い友達があつて、後ろで糸を操つてゐたんだそうです。父は兄が居なくなつたのよりもお金を持ち出した事を酷く悪し樣に言つて、母が捜索願でも出して見ませうと云ふのを、平氣なもので、奈うせ彼麽奴に何が出來るものか、打捨つとけば今に困つて又歸る事になるからと云つてましたが、其の言葉が當つて一週間も經ない内にお金も使い果して悄然と臺所から入つて來ました、散々父には小言を云はれるし、寒いのに素袷一枚で顏も窶れて、無暗と其の友達の惡口を云つて居ましたがそれも何日か忘れてしまひました。夫れからは父も決して兄には氣を許さなくなりました、自分の思ふ通りの鋳型に入れる迄はと云つて、貸家の見廻りに迄一緒に連れて歩き／＼しました。

「獨り稽古なんかもしたんですね」と兄が何れ丈熱心だつたかを思ふやうな言葉付でした。其處へ兄が入つて來ましたので、嫂は首をすくめて笑ひました。

「何だ、何を笑つてんだ」と兄もつい笑ひ乍らきいて、

「家の中ががらんとして淋しいなァ」

「眞個に何だか斯う物足りないやうでね」と嫂も同意しました。二人は此の時何にも云はないでお桂の顏を、同時に左右から見ました、淋しい譯なのに、人が一人死んだと云ふ事は心淋しくつて、堪らない筈だのに、と斯う無理にも其の感情を强めるやうに勉め乍らお桂の樣子をまじ／＼みてをりました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

翌る日、お桂は一人でお墓へ詣りました。此度の入費をお桂が出すと云ふ事は、兄に取りては思はぬ收入でもあつたやうな悦でした。それ以來待遇もがらりと變つて、お桂の顏さへ見ると母の話を持出すのもお桂には厭で堪りませんでした、で、もう奈何しても今日中に立たうと極めて了ひました。

嫂が花英蓙を敷いて呉れた上へ着物を脫捨てゝ、平常着に着替へますと、次の間で嫂が何か頻りと彔聲で兄にねだつてるやうなんです。

「だつて貴方の代になつたら何でも好きな物を拵らへてやるつてお云ひなすつたじやありませんか、金時計でも指輪でも、金盡しにしてやるつて云ひ乍ら噓吐きねえ」

「だから買はないつてやしない、買つてやるよ、買つてやるよ」

「あら何日?」

「今にさ、まア待つてお居で」

「お桂さんだつて彼樣立派な物許し持つてるのに私は恁麽」と悄然して吐息でもした樣です。軈て兄は笑ひ出しました。

「買つてやるつてば、さアお桂さんにお召替が濟だら此方へ彼入いつて云つて來い」

「乾度よ、忘れちや厭ですよ」

と念を押してから唐紙を開けましたが、お桂の顏を見ると一寸淑くなり乍ら、

「お濟みになつたらお茶を入れましたから」

お桂は羽織を引掛け乍ら嫂の後に從いて茶の間へ入りますと、兄が敷いてた布團を裏返して呉れました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「私ね、餘り急ですけれども今夜の急行で歸らうかと思ひますが」
二人は久潤くの間無言つてゐました。
「まアそう何も急がないだつてもう少し御悠然なすつて下るのかと思つてましたのにねえ、貴方」と兄の方へ加勢をすると云ふ調子で、
「まだ悠然りお話もしないぢやありませんか、せめてもう二三日は奈何です、又今度何日逢はれるか分らないんだしするから」
「私だつて夫れやア歸りたかありませんけれどね」
「なら好いでせう、お桂さん、何處かへお伴しますわ」
「えゝ、でも家を放つて來ちやつたんですからね、斯う見えても少しは家の方も氣になりますから又出直してお邪魔に來る事にしませうよ」
お桂が荷造りをしてゐる廻りを、五月蠅くつきまとつてゐる子供を叱り乍ら、嫂は本意なささうな顔をして見てゐました。何か仕打ちに氣に入らない事でもあつたのぢやあるまいかと云ふやうな、神經的な樣子をして、不安らしい顔付で斯く兄に囁いてゐました。
費用の事を細かく認めて後から送らうかの、あれ丈貰つちや濟ないのと、管々しく云ふのを聞き流して、玄關へ出ると、兄が荷物を車に積んで吳れました。
「お桂さん、お母さんは死なれても矢張り兄妹は兄妹なんだからね、忘れないで又出て來て下さい」
と兄は笑ひ乍ら云ひます。
「私もね、お桂さん、這麼な馬鹿な姉で御氣の毒ですけれども萬望又出て來て下さいよ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「里だからね」兄は笑談のやうに這麼事も云つて居ました。

何だかもう離れ〳〵になりかゝつて居る感情を、強いて結び合せやうとして焦つてゐるやうに、お桂の目には見えて、それが詰らないやうな、その癖情無いとも、悲しいとも譬へられない、それでゐて自分も何日か目が曇つて了ひました。

腕車は遠慮なく段々遠く〳〵へ引いて行きます、もう之で悉皆りお了ひになつちまつた、と云ふやうな氣がしました。

――完――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エロスとチャーミオンの對話

ボオ

われ汝に火を持來すべし。——ユウリピデース——

エロス、あなたは何故私をエロスと呼ぶか

チャーミオン、これから始終さう呼ばう。御前もわしの娑婆の名を忘れて、チャーミオンと呼んでくれ。

エロス、こりや全く夢ぢやあない。

チャーミオン、さうさ、わしらにはもう夢はないが。又してもこの不可思議は——わしは今悦んでゐるんだよ、理性を失はない、生前のまゝのお前に逢つて。影の薄膜はもう御前の眼を過ぎ去つた。雄々しくあれ、何物も恐れるな。お前が出遇つた昏迷の日はもう終つたんだ。明日わしはこの喜ばしい、不可思議なお前の新存在について教へてやらう。

エロス、まつたく——もう昏迷を覺えない——ちつとも。物狂ほしい疾病も怕るべき暗黒も私を離れた。百河の奔流するやうな凄しい物音も、もう聞えない。けれどチャーミオンよ、私の意識はあまり鋭敏に新世を認識する爲か混亂しさうだ。

チャーミオン、近い中にそんな思は皆取去られるだらうよ。——だがお前の苦しみをよく理解してゐるわしは同情に堪へん。お前と同じ苦惱を味つたのは十年の昔だつたなあ——併しその記憶は

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

今もなほ眼の前に見えるやうだ。だがお前はもう aidenn で受くべき苦痛は皆受けて仕舞つた。

エロス、aidenn で？

チャーミオン、さうよ、aidenn で

エロス、オオ神よ――われを憐み給へ、チャーミオンよ――私は萬物の莊嚴――今知り初めた未知の世界の――宏大、確實な現在の中に潜める未來の莊嚴に威壓されてゐる。

チャーミオン、今、そんな思想に捉はれてはいけないよ。この事は明日よく話す筈だから。お前の心は今動搖してゐる、その激動を救ふには只記憶を繰返して見るが一番だ。あたりを見廻すな、前途を望むな。たゞ後をかへり見よ。わしはお前がわしらの中に身を投じたこの慮外千萬な出來事を委細洩さず聽きたくてならないんだ。さあ話してくれ。この恐ろしい滅亡した世界のなじみの言葉で、よく知つてる事柄を話し合はうぢやないか。

エロス、ああ恐ろしい、恐ろしい――こりや全く夢ぢやあない。

チャーミオン、さうさ、もう夢ぢやない。時に、エロス、わしは死後餘程悲しまれたかい。

エロス、悲しまれた？――オオ、ひどく。世界絶滅の最期まであなたの家族は憂愁と悲哀の雲に閉されてゐた。

チャーミオン、その絶滅の最期――それこそ聽きたいところだ。大激變それ自身の赤裸々な事實の外わしは何も之れに就ては知らんのだからね。人類から遠く離れ墓を經て夜の中を歩んでゐた時――もしわしの記憶に間違ひがないとすればその時、お前を壓倒した不幸は全く思ひも寄らんことだつた。いや、實はわしは當時の推究すべき哲理を少しもわきまいて居らんのだよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

エロス、あなたの言はれる通り各自の不幸は全く思ひもよらぬことだつた。けれどこれと類似の災禍に就ては久しく星學者間の議論の題目となつてゐたところで、今更話す必要もないが、あなたが死なれた當時すら人々は地球上の萬物が火焔に燒き盡されるといふ聖書の中の話によつて其經過を理解してゐた。併し其破壞の直接の行動に關する推究は已に其時から彗星は決して火焔の恐れはないものだといふ星學上の知識に於て誤謬があつた。これらの星の密度はよく中庸を得たもので、且第二遊星の實質にも軌道にも少しの變化を與へずに Jupiter の陪星の間を通過するものと認められてゐた。我々はこれらの漂泊者を思量しがたいほど、稀薄な蒸發氣の創造物だとし、たとへ接觸することがあらうとも、この物質的地球には何等の害も及ぼすことの出來ないものと久しく信じてゐた。こんな工合にあらゆる彗星の成分は精密に知られてゐたので接觸に關しては全く恐れを抱いて居なかつた。多年考へられてゐた恐ろしい火炎の破壞をかうした彗星に期待することは許容し難い思想と思つて居たのだ。ところが又近頃不可思議な想像が人類の間に傳播するやうになつた。新彗星の出現に關する星學者の報導が最初は無知な少數者の間に杞憂の念を懷かしめた迄であつたが遂に一般の人々の激動と不審の種となつた。この不可思議な星の成分に就いて直にいろ／＼の想像がめぐらされたが、觀察者が皆承認した點はその道路が近日點に於て最も地球に接近するといふ事で、第二流に屬する二三の星學者間には接觸は免れないと斷言するものさへあつた。この報知がいかに人々に影響したか、この間の消息を私は何と言ひ現はしたらよからう。數日間は人々が少しも信じなかつた。世界的の思考にのみ慣れた人々の知力は到底こんな獨斷を固守することは出來なかつたので、併し致命的に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

重大な事實の眞理は最も魯鈍な人々にも理解の道を開くものと見えて、遂に星學上の智識の僞でない事を認めて彗星の出現を待設けるやうになつた。その接近も最初は急激なものでなく、外觀も亦さして性質の異つたものではなかつた。星は暗紅色で殆ど認められぬ程の尾光を有つて居た。七八日間は直徑に於ては増加したとも思はなかつたが、色に於て一部の變化を現したその中、人々は日常の仕事を放棄して哲學者が主張する彗星に關する議論に餘念もなかつた。愚者でさへ漸々とかう言ふ商量に堪へるやうになつた。學者はこの機に乘じて人々の恐怖を鎭る目的ではなく、各自の愛する學説の支持の爲めに彼等の知力と精神とを傾けた。彼等は追求した—正しい見解を切望した。完全な知識を得やうと藻掻いた。眞理はその純一な力と卓越せる威嚴とを現し、賢者は尊崇して其前に跪いた。けれど期待する接觸が地球とその住民に損害を及ぼすと云ふことは賢者の間には根據のない說として排斥された、今や彼等は衆民の理性と想像を自由に支配することが出來るやうになつた。彼等は彗星核の密度は我々が知つてゐる最も稀薄な瓦斯よりもまだ稀薄だといふことを證明して今回の彗星は Jupiter の陪星の間を無事に通過すると極力主張したが、それは衆人の恐怖を鎭めるに與つて力があつた。ただ神學者は恐怖に燃える熱心をもつて聖書の豫定を詳細に論じ、いつになく卒直に且單純に人々に解釋を與へたと云ふのは。地球の破滅が火焔の働きによつて起るべきとを確信を强ふる程の熱心をもつて到る處に說いたのだ。しかも彗星は已に知られてる通り火の性質あるものでないと云ふ、眞理によつて期待した災難の恐怖は跡方もなく取去られた。悪疫や戰爭に關する偏見—彗星の出現毎にきまつて起る謬想は今や丁度激烈な力で理性が其膝下から迷信を投げ出したやうに全く

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あとを絶つた。最も微弱な智力も過度な興味から力を導き出した。

さて、殘るところの難問題は接觸によつて多少の害を被るや否やの點にあつた。學者は僅かの地理的變化、氣候の變化、從つて植物に及ぶ變化と磁氣、電氣の影響について語つた。多數の人々はさして著しい影響はないものと信じてゐた。こんな論議が世上に喧しい間に、その主題とするものは日に日に接近し、直徑も大きく、光彩の度も强くなつて來た。人類はそれについてまだ顏色を失ひ、遂にはこの世の營を放棄して仕舞つた。人々か激動してゐる間に彗星は從來のものよりも餘程の大きさに達した。今や人々は星學者の與へた誤られた希望をすてゝ災難の確實な事を思ふやうになつた。幻想は去つて眞の恐怖がヒシ／＼とせまつて來た。最も强い人ですら其胸は烈しく波立つた。とは云へ數日間は更に堪へがたい心でこの苦痛を忍んだ。我々はもうこの奇妙な星に從來の思想を適用することが出來なくなつて來た。その歷史的の表號は消え失せ、彗星は只忌はしい新奇な感動をもつて我々を壓迫した。我々はこれを天界に於ける星學上の現象と認めずに、自分達の心の夢魔かさもなくば頭腦の影とした。是は非常な速力で地平線から地平線に巨大な焔の笠のやうに廣がつた。

併し一日、我々は心安い思ひをした。もう彗星の影響を受けて居ることは明かなのに、なほ我々は生存してゐるばかりか肉體の並外れた彈力と精神の活力とを覺えた。恐怖の種となつて居たものが極めて稀薄なものだと云ふことはそれを透して天體の諸星が皆はつきり見えるのでよく知れた。其中に、植物はめつきり變化した。人々はこの豫言された情況から察して賢者の先見に信を置いた。あらゆる植物は曾て見たことのないほど非常な勢で繁茂したので。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

併し次の日、災難はまだ終らないことを知つた。彗星核が始めて地球に達する日、全人類は大激變に襲はれた。最初の苦痛の感覺は人々の悲哀と恐怖の目標で、それは胸部と肺臓の激烈な緊縮と皮膚の堪へがたい乾燥とであつた。大氣が影響を受けたことはもう拒むことの出來ぬ事實であるが、この大氣の組成とそのあり得べき變化とが今や餘すところの討議の題目となつた。其研究の結果萬人の心はいたましい恐怖に震ひ慄いた。

我々を取圍む空氣は酸素と窒素の混合物で、空氣100に對する酸素21、窒素79の割合であることはずつと以前から知られた說であつた。燃燒の主要物、熱の運搬器なる酸素は動物的生活の維持に絕對に必要な上に元來最も有力な働原であつた。是に反して窒素は動物的生活も火焰も維持することが出來ない。酸素の過剩は我々が先頃經驗したやうに精神力の增進を來すものだそこでこの考の追求、擴張が甚しい畏怖を產んだ。窒素を全然取去る時果してどんな結果を生ずるだらう。忽ち萬物を呑滅し盡す不可抗の燃燒——聖書に記された火焰の恐ろしい豫言の到らざるなき履行。

あゝチヤーミオンよ、何故私は今又人類の狂亂を語らねばならぬのだらう。以前、希望をもつて我々を興奮させた彗星の密度の稀薄なことは今や苦々しい絕望の源となつた。この微細な瓦斯の性質に最期の悲運が明に認められた。この間にまたも一日は最後の希望の影を共にして過ぎた急激な空氣の變化に人々は呼吸困難となり血液は目口から迸り出た。やがて一人殘らず猛烈な人事不省に陷り、恐ろしい天に腕を張り擴げ、戰慄しながら絕叫した。けれど破壞者の核は丁度我々の頭上にあつた。今こゝ Aidenn で語るさへ身震ひするほどだ。簡單に、破滅の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やうに簡單に話すことにしやう。暫くの間、たゞ青白い强烈な光線が萬物を射拔くやうに照して居たが、折しもチャーミオンよ――あなかしこしとも畏し、神のウロから出たやうな透徹した叫び聲が聞えた、と同時に我々がその中に生存する精氣（エーダア）の全容積は忽ち破裂して一種の凄じい火焔と變じた。その眩い光輝と烈しい熱とは完全な知識を有つ上天の御使ひさへその名を知らぬほどであつた。かくて一切は終りを告げた。

――完――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

この胸に

三ヶ島よし

なほ君を知らぬ少女にひとしけれありし恨も言はで經ぬれば

みづからの心を盗むいたはしきわざと思ふになほも問はるる

わが前に一言親をののしりしその心よりあはれなるなし

三年前否逢ひし日のありけるかあらざりけるか忘れはてつも

朱の海にいざよふ月か少女子のはぢらひゆゑにもどかしき戀

ゆゆしくも君によりては生死すおのれを拒む心なれども

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが向ふ心によりて無とならんかくしも思ふ禍に泣く

幸あれとただ君ゆゑに思へるが悲しき我の命なるかな

この胸にうす雪ほどの色浮けば白き雲かと思ひあがりぬ

打默し我をきはめてあぢきなきものとし知れば愁だに無し

みづからを貶さんとしてあらはれしこれも危きおのれなるらむ

朝風に花の散るごと心地よしあくがれの火のまれに消ゆるは

おのれにはおもひやり無しはなやかに心ばかりも保てよと責む

とこしへに若き血しほの通ふらむ夢をかてなる少女の命

人の世にわが住む限り氷とも火ともおのれを言ふ日無からむ

降神（短篇）

らいてう

古風な柱時計が途切れ〳〵に鳴つた。丁度獨り生き殘された身體ばかり徒らに强壯な老人が心の退屈の遣瀨なさに太い腹の底から洩す眠られぬ夜長の吐息のやうに物憂く鳴つた。

と、人々は蠢き出した。燃え澁る石油ランプの臭氣と、ポツ〳〵と青紫に立ち昇る炭火の毒氣とを立て籠めた薄暗い茶の間で、先刻から口々に天滿宮の御利益のあらたかなことや、御神夢のピシ〳〵的中ることなどを、いろ〳〵な壓迫の下に生活する日頃の習慣で何か氣兼ねでもするやうに、絕えず何ものかに脅されてゞもゐるやうに囁き合つてゐた影の薄い人々は煙の描いた像のやうに神殿にあてた表玄關の方へと暗い室を幾つも通つてしどろもどろに流れてゆく。

祈禱は毎夜八時に始まる例である。

閾を跨ぐと、人々の足どりは忽ち變つた。一人々々神前の新薦の上に跪座して拍手を打つた。中央の神鏡は御燈明の弱い光に千古不磨の潜光を放つて幽界を照覽してゐる。彼等の多くは自分の顏を其奧に見るのをこれと云ふ理由もなしに只恐れた。何かしら疚しい思を胸に秘めてゐる時の樣な氣が俄にした。けれど是非とも一度は皆自分の顏をこゝへはいつたもの丶掟として否應なしに見なければな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らなかつた。見ると同時に彼等は晝間の顚倒にいつか歪めた日や、引釣つた眼や、顰めた眉を延し、動搖する心を靜止した。

やがて人々は座に着いた。

堂内は地下室のやうに薄暗い。否、地下何丈を穿つて走る隧道の中のやうな微光が隅にまで流れてゐた。周圍に引渡されたメ繩はだらりと垂れたまゝ動きさうもない。神前にともる一對の御燈明の黄ろい焔にぢつと瞳を釘付けた一座の面々は日光の屆かぬ六伽藍の奥に居並ぶ。とうの昔、この世から忘られた煤だらけのみ佛のやうにも見えた。

今、彼等はこゝに、この焔の燃え具合に各自の信仰の深さによつて今宵の神意を占はうとしてゐるのだ。數々の慾に食み食まれた心、心配事で一杯になつた燃えいぶりの石炭のやうな頭、捉へがたい千萬の醜い怪物が縱横に往行濶歩してゐた意識面はいつか幻のやうな一穗の焔に明け渡されてゆく。人々は只こゝに全世界を、我れみづからを、神の御意を覺らうと一心に見詰めてゐるのだ。

突如として、眞直に燃えてゐた寸餘の焔は水でもは入つたやうにパチ〳〵と音を立てゝ二度、三度瞬いた。或者は神の御怒りを思つて身内が慄然とした。

いつか瞳を焔の蒸發氣に絕えず見えぬ程に搖ぐ御榊の葉に轉じて、そこに不可思議を讀まうとしてゐたものもある。

冬の夜の戶外は冴え返つてゐる。偶々通りがゝりの人が櫺子の外で打つ力强い拍手の音が、どんなさゝやかな胸の響も聞き洩さぬほど靜かな古洞の奥のやうな神殿の空氣にガーンと響ひて心界の果々まで達する。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其時、羽織をぬいで厳かにはいつて來た靈媒(ミーヂアム)なる當家の主人は恭々しく神前に徐歩し、新蓆の上に端座した。人々の瞳はなほ動かない。

主人は一切を我が大神のみまへに投げ出した心にぢつと合掌、瞑目するうち、胸を流れるあやしい思が祝詞の一くだりとなり、我ともなく堅く結んだ唇を解いて油のやうに滑に流れ出て來た。

「かけまくもかしこきあまみつおほかみのひろまへにまをさくうやうやしくおもんみるにみことをたすけまつりよものくにのりとしくにいへをまもり……

人々は皆合掌して小聲に唱和せずには居られない。

おほみたからをやしないましてまめやかなることひつきとならびうつくみのみめぐみはあめつちとひとしくましまたふみのみちのおやからうたやまとうたのもとぬしにましてたかきいきほひありはらのなかつくによりうみへだつるあやしきくに／＼までとりのあとひさしくとゞまり……

……………………………………………………

……………………………………………………

けさのあさひのとよさかのぼるにゆきのみきみけうつのみてぐらをささげいのりまをすことのよしをたいらけくやすらけくきこしめして……

……………………………………………………

……………………………………………………

よるのまもりひるのまもりとまもりさきはへたまへとかしこみかしこみまをす。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一回、二回、三回と繰返すに從つて、祝詞の聲は大陸の平野を流れる大河のやうに血管を開張し、悠々として頭の先から爪先まで廻り廻る。はては億萬の毛孔が皆口を開いて聲高に祝詞を唱へた。萬物は祝詞の中に溺れて仕舞つた。

一對の御燈明はパッパッと吐息して、又靜かに燃えだした。其焔の穗先からへしあひ、押しあひ、轉びながらに幽鬼の群は絡繹として遠い國へと逃げてゆく。

御榊の葉は絶えず見えぬ程に搖ぐ。

今や、神秘は湖面を蔽ふ夕靄のやうに歩一歩と近寄りつゝあるのだ。黑いカーテンはしづしづと卷きあげられてゆく。

祝詞の聲は何ものにか追ひ立てられるやうに、急斜をかける奔流か、又は大吹雪の日、灰色の中空を薄黑い雪片がどうとも人間の力の仕方なさを思はせる程、後から〳〵と息もつかずに落ちてくるやうに急ぎ込んで、仕舞には止め度なく震へ出した。幾度が途切れさうになつては又震へながら進る。

主人は一種微妙な感動に全身痺痺したやうであつたが、此時、胸のあたりに固く組んでゐた手が強い電流でも假に通じたやうにビリ〳〵と震へて來た。かと思ふと其儘頭の高さに上げては法外な力を籠めてシユッ〳〵と物凄い音に風を切り下す。何かしら見えぬ亂暴な大手に首筋を引つ摑まれ、髮の根を釣り上げられるかと彼は不可抗の力を身に覺えて、座つたまゝ二尺あまりも宙に飛び上つた。怪獸が夜陰に吐き出す火焔のやうに荒々しく吐息しながら床を叩いて續けざまに飛び上る。

廣い額は忽ち汗にぬれた。

手のつけられないやうな烈しい狂暴がしばらく續く

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はたと祝祠の聲は途絶えた。

未生以前、一物一音もあらぬ寂滅大死の中に人々は呼吸を休めた。彼等の肺臟は空氣を滿したなり吐くことを忘れて仕舞つたのである。

其刹那、四壁にあやしい響がしたかと思ふと、柱の罅割れる音がした。その音は眞夜中により聞くよりももつと強く、鋭く、否、萬人に通ずる唯一の音として感受性の外何ものもなくなつた。彼等の心耳を烈しく叩いたのだ。

「ああ、神樣がお降りになつた。」と、

皆一齋に心に叫んで眼を見張つた。

彼等の視線の集るところ、そこに眼尻も張り裂けるばかりな二つの大きな眼が御燈明を背にした薄暗の中で火のやうに瞬もなく燃えてゐた。我れ知らず向き直つて、木像のやうに踏跏扶座した主人は一座の人々を見据えてゐたのだ。眉毛は釣り上つたまゝ下りやうともしない。着物の襞は深い暗を疊んで、再び崩れないかのやうに見えた。

今、總ての瞳は彼の瞳の中に相會した。人と人とを限るあらゆる障壁は悉く撤去された。彼等の顏には自分の存在を自分の人格にのみ限ることの甚しい迷に過ぎないのを朧氣ながらも悟つたやうな輝きが見えた。

突然、「お口開き」があつた。

「いゝか、心の行ちや。行は心一つぢや。」

主人が平生のォヅ〳〵したとは丸て違つて、一句、一句氣勢を籠めた、何かしら高壓の下に久しく

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あつたやうな彈力性に富んだ濃密な力强い聲に打たれて人々は皆首を垂れた。そして先刻から主人の眞後、頭の上あたりに朦朧と白く立ち迷つてゐた靄が見る見る凝集して、巨大な人間の隱形を現したのを誰れ一人として仰ぎ見るものもなかつた。

「いかに精進をし、寒垢離をし、毎夜わしの前に來て、祈禱したからとてそれが何になる。何も己れの心一つ。ウム、いゝか行と云ふは心の行。身の行ではないぞ。心さへ淸淨に、誠であれば寐て居てもそれて信心ぢやぞ。」

銅鐵のやうに堂内に鳴り渡つた。

或者は感に堪へぬらしく「おほきに、おほきに」と小聲に繰返しながら獨り頷いた。

又寂滅の領土にかへる——隱形は主人の頭の上にぢつと止つたまゝ動かぬ。彼も亦端然として、眞一文字に口を結んだ。全身發汗してゐるのだ。人々は息氣を詰め、新に來らむとする或ものを期待するかのやうな、緊張した、恐ろしい程の敏感と、敬畏の念に心の眞底が震へてゐる。

御燈明は又バチバチと呟いた。御榊の葉は絕えず搖ぐ。櫺子の外に聞える拍手の音は人々の心の髓を貫いてゆく。

「おうかゞひを……」

やゝ暫くして人々の中から聲がした。一同はホッと息氣をついた。

主人の堅い唇が動いたかと思ふと、

「つね」と一聲柔かに呼び上げられた。

「はい。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「つね、其方の病は醫者も言ふ通り胸の病ぢや。」

「…………」

「餘程進んで居る樣に本復はむづかしい。」

五番目の座に居る總髮の女の頭が痙攣的に左右に動いた。おうかゝひを立てゝゐる間にもしや、何處から來たとも知れぬ一種の快い動搖が身體を過ぎれば其人は屹度全快するのだと兼ねて云はれてゐたおつねはどうせ死病と覺悟しながらも、もしやと空しい最後の希望に實は先刻から今か今かとその動搖を期待してゐたところだつたに。

「本復はむづかしい。が、信心することによつて息子滿期まで命は延してやる……信心を怠るな。」

「おほきにありがとう。」

でも口の中でかう言つてやつと頭を上げた。五十近い細面の女の顏は斜にさす御燈明の火影にぽつと照された。眼の上が落ち込んで暗い。おつねは心に昨年の春、徵兵にとられた只一人の息子を深く思つた。けれどすぐ來年。さ來年……四十六年と指折つて自分の壽命を數へるやうな、そんな餘裕はこの時有たなかつた。

「おうかゝひを……」又誰れかゞ申出た。

「松太……」と管公はいきなり落雷のやうに、彼を睨付けて怒鳴つた。

「懺悔せい、松太。懺悔せい。神の國は見透しだぞ。其方の息子病重うなつたは神を疑つたからぢや、早う白狀せい。神の國に戶が立てられると思つとるか。」

主人の毛髮は忽ち逆立つた。神の憤りに燃える其面、輝く眼、一座の人々は只呆然として恐れ戦く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

より外なかつた。
彼の背後の隱形はいつの間にか濃さをまして、とりとめもなく擴がつたほの白い巨大な人線の中にはつきり、黑いゆつたりした御衣に全身を包み、兩足を揃へてきつと突立つた神の御姿を認めた。
「松太、隱し事は出來んぞ、早う懺悔せい。」
又しても熱鐵のやうに響いた。
「へえ。」
小ざつぱりした商人體の男は黑羅沙の前掛に兩手を支へて、蔽ひかぶさるやうな重たいものゝ下からやつと言つたが、厚い唇が妙に震へて、それつきり言葉が續かぬ。思ひ當るあれや、これやが頭の中を亂れ矢のやうに掠めて全身ががた／＼と震へ出した。いくらギユツと腰に力を入れても、入れても意氣地なく震ふ。
「まだ懺悔せんか。」
「へえ、死んだ家内の實家の親から抱への醫者をよこしましたので……親達も心配いたしますもんでごやいまつさかい。」
咽喉に何か大きな塊でも詰つたのか、唇が急に剛張つたのか思ふやうにならぬ。松太はこわ／＼先方を上目づかいに盜み見て、そつと息氣をつかずには居られなかつた。
先刻から合掌してゐた當家のお主婦さんのはどうしたことか遂に震ひ出したが、ふと自動發音機のやうに誰れか言ふともなく、自然にこの邊で誰れ知らぬものもない俗諺がその日からこぼれ出た。
「どこぞそこらに山吹ないか、嫁入するよな子はないか、嫁入りするよな子の顏見たや。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其聲は疑もなくともすれば現はれるお主婦さんが自分で波江はんと呼んでゐる第二人格に相違なかつた。

人々は皆この子娘のどこか鄙びてあどけない霞に包まれたやうに抑へところのない、齒に底震ひする聲を夢の國の遠の音律かと不思議の思に耳傾けた。とすぐ波江はんはうたのかへしを續けた。

「どこぞそこらに南無妙法蓮華經ないか、死んで行くよな子はないか、死んで行くよな子の顏見たや」

松太の横顏は見る見る蒼ざめた。四邊はシンとして誰れ一人として吐息も洩さず彼の全身に渡る烈しい戰慄を見守つた。

「不思議やな、どなたぞこの中に法華を信心してやはる方ゐやはりまつしやろ。」

しばらくしてお主婦さんは自信ある聲で言つた。はてな、どなたぞおまつしやろ。」

「へえ……實は……」と、

松太は無い力を下腹に集めて、

「實は……まだ申上げる暇がおまへなんださかい、無言つてましたが、家內の實家は法華でこやいますので、今日お醫者はん連れて來ました者の話に先方では一心に御題目唱へてます言ふてました。」

早口に吐き出すやうに言ひ下したが、其言葉の中に多少の嘘の交つてゐるのを自覺しつゝ獨り心に恐れた。

「お立腹でもごやいまつしやろけど、息子は本復の見込がこやいまひやうか。」

小聲に斯う言つて、不動王のやうに構へて此場の光景を見据えてゐた主人の方をちらと見たが、又すぐ目を下に落した。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、今度は何の一お口開き」もなく、主人の體はいきなり倒れて、床の上に投げ出された。死骸のやうに强直して横はつたまゝみりつともせぬ。

松太は腦天を大槌でいやと打碎かれたやうな思ひがした。と同時に自分にも分らぬ何かしら心のずつと奧底の絕望のあなたで深く決する處があつたのだらう、全身の筋が忽ちしまるのを感じた。

「神様やて助けたいのは山々だつしやろけどな、心をあれやこれに分けてることにはどないも仕様がおまへん。信心は心一筋だつさかいな、何でも一心になりなはらんとあきまへん。そやけど今迄の信心に依つてな、息子はんは乾度そないにえらう苦しみやはらいで、よい往生が出來まつしやろ。」

御主婦さんは氣の毒になつてか、横合から慰め顏にかう言つたとき、松太の引き結んでキッと下にむろした口尻の筋がピリつと動いた丈だつた。先刻の痙攣と戰慄は跡方もなく過ぎて、固く座つたまゝ動かぬ看護と心勞とに窶れた彼の顏は物凄いやうな一種の威嚴さへ見せてゐた。

祈禱が全く終つて皆、茶の間に戻ると、長火鉢の大土瓶は丁度煮立ちかけて、柱時計は十時近くを指してゐた。

お榊の葉とお饌米とを煎じた薄葛湯のやうなどろんとした香のある液が人々の前に配られた。彼等は萬病を癒す靈藥としてそれをありがたく飮みほした。この一月ばかり缺かさず通ふ半面痘の男は例のやうに煮しめた手拭に液をひたした。

完

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

或日と或日

田原祐

十二月十三日、珍らしく山から登る朝日を見る事が出來た。

朝、髮結つた後、是から又仕事かなあ、と縫ひさしの名仙の綿入の事を思つたら、縫ひ惡し、縫ひ明かしゝて居るのが、今日は特別に厭になつたから、當もなく裏の野菜畑に行つた。そしたら孫三が蜜柑の根に鋤を入れて居たから「孫三來た」と云つて其の側に馳けて行つた。廣々とした家敷跡の畑には、種々の野菜が整然と植え別けてあるが、皆々朝の露にうなだれてゐる、間々の蜜柑には、木守りにと殘してある黄色い實が淋しくなりついて居る。

「十三日振りのお日和」だと云ひ乍ら孫三が鋤を置いて立つて來たので、一緒にくすぶつてる焚火を圍んだ。

焦茶色や、鼠色の土が層をなしてゐる、山の崖をくりぬいた蔭は、風をよけて焚火の格好の場所である。崖の上からは、ぼうけた穗薄や、枯葉をつけた楢などが生ひ懸つて居る。作自慢の孫三は「ふうん」、「さうかなあ」位に時々挾む私の簡單な應答にさへ、待ち受けたお客様と、おもしろく話すると云ふ風に野菜作りの人知れぬ苦心や、樂しさを話して聞かせる。

「孫三、今日は煙管の掃除はしないの」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私がだしぬけに斯う尋ねると「お嬢樣の云はつしやる」と水鼻をチンとはねて笑つて居たが、それでも革帶にさし込んで居る煙草入を取り出して掃除を始めた。直側の脆い崖には、平生から一尺許りの針金が突立てある。それを五六度通して、火皿を火の中に突込んで居たが、暫くして取り出し、フッと吹いたら、ヂーッと云つて脂が出た、又吹いたら今度は氣持がいゝ程ボン／＼と通つた。「ソラ出來上りましたがな」と云つて、草をむしり取つて火皿を拭き、更めて粉煙草を詰めて甘さうに深く吸ひ込んだ。

「お嬢樣、あれが今度新しく建つ小學校の地ならしで御座います。」

と孫三が指した方を見ると、なるほど、此の家敷畑を境する高い石垣の下から、田圃一つ置いて、其の先の一寸した丘は開き始められて居る。大勢の男の中には新しい手拭を冠つた女も交つて居て、何か唱ひ乍ら、赤土を盛つた「フゴ」をかついで働いてゐる。一方の山の蔭からは、緩いスロープをなしたレールの上を「トロッコ」が二三臺出て來た。ゴー／＼いふ響きは威勢のいゝものだ。

孫三はまた鋤を取り上げる、其のキラ／＼光る先きで見るから樂々と、器容に、石ころ交りの地の中を、サク／＼と別け始めた。

不圖後の方でガヤ／＼と人聲がしたので振り返つて見ると、兄上と、今一人見馴れぬ爺がお尻端折つて、其の後から從いて來るのであつた、がそれは直に水城の接木屋だと解つた。

「こつちが大ぬかりをしたといふよりや、向ふの方が悧巧すぎたと云ふもんだよ」兄上のお聲だ。やがて二人は火の側に來て加はつた、孫三は新たに、木片や竹片を拾つて來て盛に燃した。

「さうでは御座いましつらうが、一應私に云つて下さりや、いくら向ふが悧巧だつて、斯うまでムザ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

〳〵と乘せられるこたあ、御座いまつぜんのに。」

接木屋は何處迄も殘念さうに云つて居る。これは何時だや筑後の久留米在の者で、先代の時からお邪魔になつてる接木職だと云つて來た者があつたが、兄上は開業當座だつたので、永い修業中の事は御存じないので、執事に聞いたが是も知らないといふ、其處で一たんは斷つたが「澁の後の柿は十三年前に私が接いだもの」だとか、「伺ひます度には此の眼を診ちもらひまして、お藥を頂いて歸りよりました、」などゝ、何處にか筑後訛りのある詞で話したので、「さうかなあ」といふ氣になつて、深く尋ねもせずに、若い者許り集まつて、思ひのまゝに、蜜柑、梨、柿、其の外水蜜桃の樣なもの迄接がせた。何でも四圓いくらかの穗代だつた。所が後になつて、それが詐欺師だつたと云ふ事が解つたので、今更口惜しがつても何の役にも立たないその失敗を大笑ひした事があつた。其の當座はよく、「アリイ、ジウイン」といふ蜜柑の名を、年とつたばあやに無理に敎へて、是を覺えなければ食べさせないなど云つて、明日にでも黄金色の實が房なりする樣に樂しみにしたものである。私はよく、

「此の「コーシンマル」と云ふ梨は來年の五月になれば長が五尺位になつて新芽を出します、そして花もつきますが、夫れは先づ取つた方がお爲めです、三年の後にはもう盛になりまして三間四方位には擴がります、實の重量が一個につき四百目」

などゝ、お客がわからうがわかるまいが、テンデお構ひなしに、一氣に述べ立てる、名所案内者の說明の樣な口調を眞似て、皆を笑はせたものだつた。夫れがどうしてか水城に知れたので直に飛んで來たのだと云ふのである。

「ホーラ見さつしやい、これもボク〳〵ぢや」と云つては、一々奇麗に包んだ藁をひきあけて、中々か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ら腐つた穗をつまみ出した。其の度に得意の色が動いた。

「矢張り旅の者は當てにはならんなあ」焚火て顏が眞赤になつてる兄上は、羽織の裾をまくつて笑つてらつしやる。

「さうとも〳〵、甘い事云ふもの程用心せにやいかん、其の筑後の奴は旦那國賊でございますぞ。」

此の國賊には孫三も一緒になつて笑つた。

「それぢやお前が、天に代つて誅戮すると云ふ役廻りだね」と兄上に混つ返されても、益々大眞面目で、

「誅戮でも、リウリクでもやります、幸、上から下した許りの柿と梨の穗を持つて來とりますけに、臺木があつたら接ぎまつせう、「フーユー柿」に、「獨逸」といふ梨だ」と大意氣込だ。そして腰から引き拔いた一尺五寸位の棒の包みを解いたら、ヒヤリとする程とぎすました山刀の様なものが出て來た。夫れを片手に控へて、穗を擇り別けてる接木屋の顏を見て居ると、木綿絲で耳に引懸けて居る、鼈甲緣の圖拔けて大きな目鏡が、蜻蛉の眼の様でおかしかつた。しかし其の日あり氣の刀で、木の皮とシンとの間を薄く切つて、二三本の穗を入れては、麻絲でクル〳〵と卷きつけ、其上に土を被せて藁の敝ひをする、敏捷な物馴れた手際には、皆目をみはつて居た。そして是れて漸く安神したといふ風に、トン〳〵と草鞋で土を踏みならして置いて、二人は一緒にサッサと行つてしまつた。

私達はまた燃えすたつて、水色の煙の出て居る火を吹きおこした。

「此の梨や柿が皆枯れてしまつて、今の接木屋が國賊になるとおもしろいがなあ」と私が云つたら、

「そんときは私が天に代つて……何でございます」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と孫三が云つたので又大笑ひした。さうかうしてる内に炭坑の汽笛が十一時半を鳴らしたので、私は腰を伸した。肥前境の山の頂には、日光を受けた雪が、ギラ〳〵光つて見えた。「トロッコ」の音はまだゴー〳〵と山から山に響いて居た。

十二月二十四日

夕御飯が濟んだ、暫く話した後、部屋に引込んで恒さんに手紙を書きかけた。

「惜しいとには候はねど、めくり暦の餘生、いよ〳〵心細くなり申し候、やがて切つて落さるべき四十五年の幕、それが吉か凶かは、わからぬ處が御恒樣にお慰さみに御座候」

とまでは書いたが、何だか餘り上ずつて居る樣で破つてしまつた。そして馬鹿に冷々する手を懷に入れてボンヤリしてると、頭の中には書くべき手紙の事よりタッタ今迄話した事が再び描き出される。

「何だ敎師? 僕は女の敎師ほどすかんものはない、ステーションの札賣りの方がまだしもだ。それにお前だつてそんなに進まないと云ふんぢやないか、廢した〳〵〳〵。」

一杯がいゝ加減に廻つて居る兄上は、平生の無口にも似ず、馬鹿々々しいと云ふ風の口吻で斯うおつしやつた。

「私も敎師はいやだと云ひました、ですが兄さん、斯うして只並べて許り居る樣な無爲な生活よりは、いゝと思つて居るんですよ」

私は何時もの口調が出はしないかと危ぶみながらかう云つた、

「一體あなたは、餘り根堀り葉堀り考がへすぎて自分と苦しんで居る樣なもんですよ。それにあれのこれのと云つたつて、外聞もございますしね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

これは姉上だつた。

「僕なんか遊んでろつて云つて呉れる人がありや、穢いやつの眼なんぞ診やしないんだがね。もちつと緩りした考へ方になれないものかなあ」

此の時お内佛のお取越て、がや／＼云ひながらお祖母様のお部やの方に行つてる三四人の人が、挨拶に上つて來たので、話はそれきりにして私は立つて來た。

「どうかした時には男の様な處がある」と私はよく内の人にも言はれるが、其の實どうしてそんなに見えるかしら、と不思議に思ふほど弱いのだといふ事を私は自覺してる。常に意識して、逃れ様々々々、とあせつて居り「家柄」とか「死んだ父母への義理」などゝ云ふものには脆くも縛られる。夫れはまだいゝ、が時とすると、何時の間にか私自分其の「家柄」とか、煙の様になつた人々に對する、極狭い「義理」などゝ云ふ、虚ろな觀念に絡まれて、其の目ですべてを觀様として居る事に氣附く時がある。其の時は思はず握つたものが、青い冷たい蛇であつた事に驚いて、腕も何も切つて捨てたい様に思ふ、それに似た感がして、泣き度くも聲も涙も出ない様な場合がある。が如何に拵へても、私の考へを解つてもらう事は出來ないものかしら。

同情！　私は今更それを求め様ともしないが、理解だけはほしい。

何時の間にか突伏してこんな事を考へて居たら、後のドアーのハンドルが、ガチヤツと音がした。姉上が入らしつたのだつた。

「もう大分集まつた様だからお佛間に行きませう」

と着替へた羽織の紐を結んでおつしやる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私もですか？何だか場所に似つかない樣で變ぢやないでせうか、それでも矢張り行かなきやならないと云ふんなら何ですけれど――ならないつて事もないかも知らんが、內の者が誰も行かないぢや、お祖母樣だつて變でせうよ……一寸でいゝから。」

遂にランプの心を小さく引込めて、上の物を着替へ乍ら、姉上の後について離れの方に行つた。狹い土間には下駄がゴテ／＼に脫いであつた。其の上を飛んで上つて行くと、お佛間の障子には多勢の影が映つて居た。お唱名の聲もしてる。廻り椽の方に行つてソット明けて入ると、六疊一杯の人のいきれと、火鉢の火氣でムッとする樣だつた。低聲でこちらにノと云ふ人を制して、後の方に小さくなつて座つた。

お正信偈の半頃で、松を眞にして、梅モドキと水仙とを添へた花瓶や、桐の花を打ち出した、靑や赤のお菓子のお飾りなんかゞチラ／＼する蠟燭と鶴の押へのあるお燈とで、あたりの金箔に映つて、お佛壇は光り輝やいて見える。一番先きには黑の衣の上に、紫の輪袈裟をかけた厚圓さんが座り、其の後にお祖母樣と藥切りの正作とが扣へて、小さい聲で厚圓さんについてお經を唱へて居る。あとの十人計りの御同行は心持頭を下げて、御念佛を云つてる。やがて御和讃迄濟んで厚圓さんが御文章を擴げて、恭々しく讀み始めると同時に、皆の頭は疊にひれ伏した。私もそれに倣つて頭を低げて居ると、讀みあげられて居るのは、聞き覺えのある白骨の御文章だつた。有難さうな文句が出て來ると、皆申し合せた樣に南無阿彌陀佛といふ。可成り長い事突伏してる間に、私の身內にも此の室內の敬虔な空氣がチク／＼と沁み込む樣で、次に起つて來るいろ／＼の考へはしばしの間抑へて置いて、せめ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て今宵一夜を、此の仄いみ光の下に集まつて來て居る人々と、同じ心に更かしたいものだと思ふ樣になつた。

御文章は濟んだ。厚圓さんは皆の方に向きなほつて叮嚀に頭を下げられた、法話が始まつた。今此處に集まつて居る人が、世の中の一番幸福な人てあるといふ事を說いて、共に悅びに堪へないといふ風に、感謝の念佛を唱へた。此處に入つては、身巾の合はない樣な着物に、いやに高い處に紐のついた羽織をひつかけて、上坐にかしこまつて居る藥切りの正作は、最も光つて見える。やがて女中が運んで來た、小豆御飯と黑豆とのお茶を頂いた後は、此の座は一層打ちとけて溫いものとなつた。

「其處らのお若い方に一つお願ひしますかな」

斯う云つて厚圓さんは風呂敷の中から敎佛唱歌の本を出して、私達の居る方に投げて呉れた。

「それはまた結構で御座いまつせう」と皆も私達の方に膝を向けた。少々變ではあつたが、仕方がないから、側に居た隣の十四になる子もよんで、姉上と三人で歌ひ始めた。

「つら〳〵諸法を觀ずるに」といふ因果應報の歌を始めに、どうかすると吹き出し度くなる程平易に、おもしろい比喩を入れて書き流してある、他力本願の主意や、蓮如上人の御一代記などを歌つて行つたら、妙に聲が冴へて來た、後には望まれぬに歌つて見たい樣な氣がして來た。

「たつた一言親樣と、いふて安神させて呉れ」

と云つた時には、思はず淚がこぼれた。

斯うして永い夜も更けた、一時を聞いた時、皆はビックリして、始めて歸る事に氣がついたと云ふ風にあたりを見まはした。厚圓さんも隣村まで歸らねばならない人だから、こちらから促して切り上

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

げた。お土産のお菓子を包む、下駄が見つからないといふ。マッチを借して呉れといふ。一時大混雑をして、ヤットかたづけた時は、もう二時に近かつた。

「お前達が來て呉れたので、大層都合がよくて、しあはせしました。」とお祖母様はわざ〳〵寐支度をして居る私の部屋を覗つてからおつしやつた。

いやといふ程澤山夜具を重ねて寢たが、それでも何處からか風がスー〳〵と入る様でどうしても寢つかれない。

と云つて起きてなほすのも億劫な様で、足を縮めてヂッと身動きもしないで居ると、今夜の事が頭に浮ぶ。そしていくら思ひ出さうとしても、もうあの柔い涙を誘ひ出した氣分にはなれない。何故歌なんぞ歌つたらう、誰かソット障子の外から隙見した者があつたとすれば、キット私の様子は狂人じみて見えたに相違ない。くだらない事をしたもんだ。と思つて居ると、微かに鐘の音が聞えた、で、よく氣を鎭めて聞いて居ると、確かに三ばんを打つて居るのだ。此のザワ〳〵と木枯の吹く闇をついて裂く様な、訴へる様な響はだん〳〵と近づいて來る様だ。其の内に孫三が目覺めたらしく玄關の大戸が明いた。其處此處に人聲がして來た、誰か二階にかけ上つて雨戸を繰つたと思つて居ると、「ヤー詰らん、遠い遠い」とどなりながら降りて來た。書生の須藤らしい。私は村の出端れの山のテッペンに立つて居る「火見」に登つて、鐵の梯をつかんで、霜のおりて居る鐘を打つてる人の事を、思つただけでも、水を浴せかけられた様なので、顏まで夜具の中に埋めて小さくなつて居た。其の内に鐘も鳴り止むし、皆も寒い〳〵と云ひながら寢鎭まつてしまつたらしい。

窓の外には八つ手のガサ〳〵云ふ音や、南天の微かな葉摺れの音が聞える、枕の下に入れた時計の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

音が妙に耳について、遂にまんじりともされなかつた。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『最終の靈の梵鐘に』

尾竹紅吉

勝ちやんが眞白な衣を卷いて素足で町を悲しそうに歩むでゐた夢を見た朝、勝ちやんからこんな手紙が來た。

室は薄暗い――白い蠟燭がうら悲しい赤い焰を吐いて……室の眞中だけボーウとしてゐます。

黑い寢臺の上には黑い衣に白いカブリ物をカブッタ女が寢てゐます。……ねてゐるんぢやない……死むでゐるのです――今時計が八時を打つた。

悲しみの夜……さん、私の音樂の先生はこんな悲しい暗い室で死んでしまつた、私は、どう思つても『死んだ』のと思へない……もし此の世に奇蹟と云ふものが有るならば……キット此の生を終つた人の口から「WAYDAWNUPON」と故里の故里の歌を歌ふのでせう、

私は年越の夜(二月四日)を、こんな悲哀に囚はれてゐます。……白いハンカチが目に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つく……

『死んだ人』は英國の人で、四年たつたら――佛蘭西にゐる父様の所へ行くつて銀紙を――あのチヨコレイトを包む銀紙を――ためて……そして買つて海こへて行きたいといつて………

ローレライだつてサスライの歌だつて、みんな、此の先生から敎はつた――私は――どうしても『死』んだとは思へない、地獄の曲が好きでよく彈きましたつけ!!!

可愛いゝでしよう!?

銀紙は箱からどつさり出ました。

けれど――けれど、最う終りです、なにもかも。……さん察して下さい

私達よりも可愛想なのは、受け持たれた彼の三十人です、明日から母のない子も同然……今朝(二月五日)……赤や青や紫や黄の硝子窓から日がさした時分――先生、逝かれた先生は柩の中にねむりました――天へ行つて。海を越へてキリシタンの國へ……明日はお葬式です。

『死』の一週間前に敎はつた『死の歌』は……噫――よもや、先生を吊ふ歌にならうとは!!!

悲しそうに歩むてゐた勝ちやんの夢は本當に『悲し味』を勝ちやんに與へてゐた。……私は限りなく、銀の色の紙を、溜めて、郷土に、父に、聖マリヤ、に會をふとした――先生が

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

戀しくなつた、
私は、限りない、よみ路を銀の小箱かかへて歩む『先生』音樂の先生に此の字の集りを棒げたい。
私は『戀』を離れた、『愛』を捨てて――逝く音樂の先生の死を、限りなく悲しむ。

銀と死の色（最終の靈の梵鐘）

たゆらたゆらに嘆く白臘の涙
盲まれて顫え行く
祈りの鐘に涙の光る
尊くも厳くも――音もなく。

白き浄衣に汚れなき肉塊を包み
汚れたる世の光りを
黑きつばにて擁ふ尊さ。

青き夜のしめやかさ
死の影を顫はす。

海行くに
父を抱くに
鄕土を香ふに
聖マリヤを見奉るに
――銀の色を――銀の光りを。

南蠻の香ふ金の箱
鄕士を彫す箱の衣
殘り沈める銀の色
父を抱くに、海を行くに――吁!
主なき『色』の青ざめて行く。

青ざめし『香』の香高く
聖マリヤの像を顫はし
白衣の群の涙を光らす。

あわれ、汚れなき人のむくろ
祈りの鐘に和ぎ行く人の死

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

響き行く最終の靈の梵鐘
堀り逝く十字架の銀のはたゝき。

肉の戰慄を甘き强き慾の疲を
知らず、消え逝く人の
尊さ、淨かさ。

哀れみな惱み入る『通夜』の夜の青き光りのうちに
はた絕へぬ悲しみの光り、青白き震慄

とき置きて、繰り返へす靜淨の祈禱
悲しみの音樂しきる音の吐息
たゆらたゆらと嘆く——白き光りの涙。

はや今は、むかし見し夢なり幻なり
何時の世か——又
識らむ——ああ或し世のありし瞳の光。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

銀の箱、抱き
見もなれぬ――よみの國に
獨り漂浪ふ尊さ、氣高さ
……………………。

精舍にわたる、
最終の靈の梵鐘のひとしきり。

消え逝く光り
よみ逝く精靈
あわれ祈禱の幽けき夢路
最終の靈の梵鐘の韻へ行く
……………………。

四五、二、八

海を越へたナブシーの歌勝ちやんに欲へて逝つた先生の訃を聞きて＝紅吉

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

習作

岡田八千代

人物。

大瀬由郎。　彫刻家。
池田富夫。　畫家。
吉濱三郎。　同
お花。　モデル。
お種。　女房。
お粂。　下女。
場所。ある郊外のアテリエ。
時。今。

郊外の庭地。向うに紆(うね)曲りたる道、雜木林などを見る。上手を斜めに板塀にて見切り（この塀に潜戸(くゞりど)あり）、やゝ下手へ寄せて心ばかりのアトリエ建つ。上手板張の好き處に出入の引戸あり。（出入口の中何れも三尺ばかり土間の心）天井光取りの硝子の心。向う北向の大きなる窓。その外野原の心、好みの通り

窓掛を掛く。續いて下手板張の前に粗末なる大なる本棚。和洋の本を詰め。棚には面白き各地の玩具。寫眞などを並ぶ。その脇より折れ曲りて下手同しく板張。羽目に寄せて毛布を丸めて戴せたる寢椅子を据ゆ。その四邊の板羽目には版畫。錦畫。エッチング、種々なる畫を幾枚もピンにて止めてあり、寢椅子を少し外れたる左に小さき出入口あり、その側に小さき窓。窓の下に鏡、手紙、帽子、衣服など掛り居る。室のやゝ下手へ寄せて火の炎きあるストオヴ。その側に石炭、薪、などを入れし石油箱、その前に土瓶茶碗などを戴せし小机。ちぐはぐの椅子五六脚。ストオヴの上手少し前へ寄せて大いなるカンヷスを置きたる大なる畫架。カンヷスの上には綠色の絹が掛けてあり。その側に古き絨毯を敷きたるモデル臺。上手の戸口に近き處に据えたる机の上には美しき古雅なる女の衣裳、種々なる切、絵の具の箱、筆立、パレットごた〳〵と置きある。その下に油土を盛りて切をかけたる甕、彫鑿。石膏の袋など入れあり。其他額像。枠など畫家に必要なる小道具雜然と置かる。

その日の午後。煙るが如く雨降りをる。幕開く。

　下手の寢椅子にモデル娘お花。物思はしげに傾向(うつむ)き居る。（二十二三歲位。無造作なる束髮上品なる淋しき顏立。）

　直ぐに上手の扉の潜戸を開けてお種。（町女房。意氣な丸髷。襟付の着物絆纏に前垂がけ、奴蛇の目を差して素足に吾妻下駄を突掛けてゐる。）そつと後を見返りながらアトリエの引戸を叩く

お種、（微笑みて忍びやかに）ちよいと吉濱(よしはま)さん、吉濱さん。

　お花心づかずに居る。

お種。（戸を推すやうにして、ホト〳〵と戸を叩き）ちよいと、吉濱さん。亦假寢(うたゝね)かい？おい、おい。

お花。（始めて心づき驚ろきたるやうに顏を上げて）ハイ。何方(どなた)

　不意に立上りて呼吸を切る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お種。ちよいと、居るんなら早く開けて下さいなね、濡れちまうぢやないか。

お花。ハイ、只今。

お花急いで引戸の掛金を外す。

お種。（戸を開けて）おや花ちやん。お前さん一人？

お花。え丶！

お種。（中へ這入りながら）お前さん今日はいつもより早いんだね。

お花。（紙を落着けるやうに靜かに）今日は、學校の方が少し早く濟んだものですから。

お種。おやさう。（投るやうにお花を見て）店の前はお通りだつたの？

お花。え丶、御挨拶をしようと思ひましたら。今日はお女房（かみ）さんも何方（どなた）もお見えなさいません――、夫に餘り雨が酷かつたので、急いで…………

お種。あ丶さう。（ストオヴの側へ寄り繻子の帶の間から煙草入を出す。）そして今日は吉濱さんはお留守なの。

お花。さうらしうございますよ。最う先からお待ち申して居るんですけれども。

お種。でもお前さんこの雨によく來たのね。モデルにしちやあ珍らしい勉強家だつて吉濱さんも賞めて居なさるよ。

此中二人とも好き所へ掛ける。お種は稚を見て煙草を吸ひ、お花は折々ストオヴに炭をつぐ

お花。そんな事はございませんわ。

お種。しかしね。商買となりやア隨分嫌な事もあらうねえ。夫でも之で亦、好きな人の前と厭な人の前とぢや氣持が違ふだらうねえ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お花。(厭はしげに)そんな事は…………

お種。(微笑みて)吉濱さんが言つてたよ　お花も己丈ぢやァあゝは勉強しながらうが池田が來るので幸福だつて、お前さん池田さんに首つたけだつてねえ(花やかに笑ふ)

お花。(傾向きて)そんな事が…………

お種。無い事があるもんかね。池田さんが來ないとお前さんの意氣込が全て違ふと言つてたよ。どんなに違ふか私も見たい位だわホヽ、

お花。あゝ厭。(兩手にて顔を被ふ)

お種。大丈夫！私だつて之で元からの素人ぢやなし、極りの悪い思ひをして裸體になつてるものを、女同志が見てゐられるものかね。けどね。吉濱さんもさう言つてたよ。池田つて奴はなんて朴念人だらうつてさ。なんでも先にもお菊とか言ふモデルが大變だつたのだつてね。そしてそのお菊と言ふのは心臟とかの悪い女だつたつて言ふけれ共、半分は池田さんが餘りそつけなくしたんで失戀とかゞ元で死んだんだつて言ふぢやないか。その女にや吉濱さんも惚れてたんだつてさ。(やゝ淋しげに)どんな女か見てやりたかつたよ。其處に描きかけのがあの女の顔だつてね體をやり始めると間もなく死んだんださうだけれ共、池田さんもほんとに罪つくりだね。それてお前さんが亦その身代りだつていふぢやないか。考へると厭な商賈だねえ。お前さんはそのお菊つて子を知つてるの？

お花。(秘かに涙を拭ひて)否。私はまだ此頃出たんで能くは存じません。

お種。聞けばお前さんも身體が餘り強くはないんだつてね。私も病人の亭主を持つて知つてるけれ共

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣をお付けよ病ほど恐いものはありやァしない。

お花。ほんとに因果でございますわ。

お種。けれ共ねえ、その菊ちやんとかとは違つてお前の胸は私がきつと池田さんへ言傳けて上げるよ。

（お花ぢつと考へてゐる。）

お種。その代りと言つては變だけれどもねえ。お前さんお願ひだからねえ。例へ池田さんが來ない日があつても、どうぞ身を入れて吉濱さんのお手本になつて上げて下さいねえ。かうしてまあ此家は家の旦那が如何いふ風の吹き廻しか吉濱さんの氣性に惚れて、どうかして吉濱さんを世に出したいつて言ふので、こんなまア堀立小屋のやうなんでも建てゝ貸して上げてるといふ譯なんでね。私もまア何の樂しみもない中に。かうして吉濱さんが寒いのも構はず勉强してゝ下さるとね、夫が嬉しくて、何もかも忘れてしまつて、まア旦那がとろッと寢たと思ふたァ一寸脫けて來ちや吉濱さんが勉强してるか如何か樣子も見にくるし、亦暇な時にや、難かしい事や優しい種々な事を話して下さるんでね。つく〴〵世の中が厭になる事があつても、まア〳〵氣を長くして居たらと思つちやァ斷念らめてる事もあるんだから。お前さんも氣に向かない事があつてもどうぞね切角緣があつて來た吉濱さんの爲だと思つて身を入れて上げて下さいねえ、商買とは言つても雇はれる者と雇ふ者となりやァ其處に義理も人情もあるんだから（いたく沈みて）私なんぞもまア雇はれてる女房さ……　……ホヽヽ何だかお前さんの事だか私の事だか分らなくなつてしまつた。（調子を替へて）なんだか樣子を聞くと、吉濱さんは此頃畫が出來ないとかて大層機嫌が惡いとか言ふぢやないか。そしてちよい〳〵お酒なんかも吞むとかいふ話だけれども、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何も心配する程の事はありやしないんだらうねえ。いつ來ても此頃は居ないし、たまに話の出來さうな時には寢て居るし、ちつとも樣子が知れないもんだから……………お前さんも何にもみよりが無いつてぢやないか。私もさ、厭な時や悲しい時は一人ぽつちの方が世話はないけれ共たまに嬉しい時でもありや一緒に喜んで呉れる人が欲しいやねえ。あゝまア一人で多辯つちやつた。さア行きませう。（お花。もつと居て欲しさうにお種を見る）

（上手の潜戶より下女お兼。忙だしく、飛びだし、アトリエの戶を叩いて忍びやかに）

お兼。お女房さんは居ますか。

と呼ぶ。

お種。（ハツとせし樣にて立上り）あゝ居るよ、お兼かい？

お兼。へイ。旦那が起きたから早く來ておくんなさい。

お種。（强いて落つきたる樣にて）アイよ、今直ぐ行くよ、お前先へお出て。（お花の方を見返て詫しげに）病人だもんだから………ぢや私は行くからね、今の事は賴んだよ。

お種煙草入を椅子の上へ置きたる儘外へ出づ。

お花。どうぞ心配なさらないで。私きつと勉めますから。

お種。勉めるなんて言はれると困るけれどもね。あの方も今勉强盛りなんだからね。

お花。えゝ、私きつと菊ちやんの跡嗣をしますわ。

お種。あら厭な事を………

お兼。（再び潜戶より覗きて）お女房さん早く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お種。アイよ大丈夫だよ。

お兼。でも亦………

お種。私の身體だ自分で我慢するよ。ホヽヽ

お花。お女房さんあなた……（胸を押えてお種の顏を見る）

お種。花ちやん。お互ひに一人ぼつち同志だ。もし何事かあつたら私をかばつて下さいよ。私もお前さんの事は引受けたからね。

お種何だか覺悟せるやうに後をも見返らず塀の中へ入る。

お花。（呼吸を切つて）お女房さん、（兩の手を夢中に潜戸へかけ押せども開かず）お女房さん、何かあるんですかお女房さん。

この時、下手の出入口の外にて人の呼ぶ聲す。

男の聲。オイ〳〵、開けて呉れ。

お花心づかずに塀の中の様子に耳を澄してゐる

同じ聲。オイ〳〵お花さん。

お花聞付けて

お花。あゝ池田さんだ。！（お花の顏始めて活々とす）

男の聲。オイ〳〵。誰か居ないのか。

お花。ハイ。只今開けます。（聲のみ晴やかに、動作は矢張り物憂く）

同じ聲。やつと開いた。あゝ寒々。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一に池田。（美術學校の服。頭を延して頰瘦す。色白く、丈高し。）次に大瀨（和服、單物の重ね、長髮。白袴大男）第三に主人吉濱。（和服。頭を短かく刈り込む。色淺黑く立派なる體格。）　何れも黑の長き廻しを羽織りてのそ〳〵と入り來る。

大瀨。おゝ寒か。生返つた。（廻しを脫きて椅子の背にかけ）僕の廻しは三代も勉めるから雨が肌までしみて何にもなりやせん。

池田。（同じく廻しを脫ぎて椅子にかけ）　着物まで通してかい？

大瀨。うむ。

池田。そんな薄い着物を着てるのかい？

大瀨。まだ冬の支度が出來ないから單物をありつ丈着たのだ。五枚。そら、縞もあれば絣もあり、一番上に紋付を着た處は我ながら智惠があるよ。

池田。袴も夏のか？

大瀨。袴は四季共通だ。（物を言ひつゝ茶の支度をせるお花を見ぬやうにして見る）

お花。（茶の罐に茶の無きを見て）お茶がございませんが。

吉濱。（廻しを鋲の脇の釘へかけて口重く。）　茶が無ければ、酒でも上げてくれ。池田は湯で我慢しろ。失敬。

直ぐ椅子へ倒る。

大瀨。オイ如何したんだ。わざ〳〵己を呼びに來て寢て終ふのか。そして貴樣此頃酒を呑むのか、

吉濱。（無言にてうなづく）

大瀨。なんだつて酒なんぞ呑み始めたんだ。餘り呑むなよ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吉濱。（毛布を疊りしまい）ありがたう。

池田。吉濱は畫が進まないのでぢれてるのさ。

大瀨。ぢれたつて畫は出來やしないよ。

お花。（室の一隅より貧乏徳利を持ち出し）私が慣れないもんですから。

大瀨。畫なんかてものは時が來なきや出來んよ。誰も惡いもんはありやせん。君がお花さんて言ふんですか。今日は吉濱が君を紹介するからつて呼びに來たんです、その癖自分は寢てしまふなんて失敬ぢやありませんか。ねえ。

池田。ぢや僕が改めて紹介しやうか。

大瀨。夫にや及ばない。君は午前は學校へ出てるんかい？　新らしい人だね。

お花。（立ちたるまゝ傾向く）

池田。（お花を見る毎に、何か苦しげなる樣子にて）さうだ、極く近頃さ。一番長く雇つてるんで僕等だらう。午前は學校の僕等の級（クラス）さ。（言ひながら畫架の後よりカンワスを持ち來り、解つて見る）

お花。お辱しうございますわ。

大瀨。お辱しい事を知つてモデルが出來るものか。ちつと僕等の方へも來て呉れ給へ。

池田。（パレツトを調べながら）此人はね彫刻家の中でも有名の惡口家だからね。めつたに行かない方が好いよ。君のやうな新米は、此處の先生のやうな人でなけりや勉まらないよ。

大瀨。（茶碗に湯をつぎて呑みつゝ）嘘言へ。モデルなんてものは。たまには惡口も言つて貰ひたいのさ。ねお花さん。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お花。（無言にて大瀬の顔を見る）
大瀬。何も睨まなくとも好いぢやないか。
お花。否。睨みなんかいたしません。
大瀬。さうかな。然し戯言（じやうだん）は置いて、僕も仲間に入れて呉れたまへよ。な、池田、好いだらう。吉濱も寝てしまつた。君もまあ今日は暗いから休めよ。そして僕は早速始めやう。吉濱が覺めて始めるやうだつたら止すよ。
池田。あゝ好いとも。お花さん。此人は大瀬と言つてね。かう見えても口ばかしぢやないんだ彫刻ぢや腕も立派な人なんだから。
お花。（判然（はつきり）と）大瀬さん？（思はずのやうに）あの菊ちやんを用つて入らした……　……
池田。さうだ。知つてるのかい？
お花。（元の如く沈みて）否（いゝえ）、一寸御名前だけ。
池田。おいお名前は知つてるさうだ。（半ば眞面目の如く半ば戯の如く）羨ましいよ。
大瀬。（夫等に頓着せず）澤山羨め。たしか何處かに僕の預けといた油土がある筈だね。
池田。うむ、あの机の下にある。お花さん。
お花。ハイ。（机の下より油土其他を持ち出づ）
大瀬。どの邊が好いかな。（光線を見て歩く）
池田。（椅子を片寄せながら、フト（お種の煙草入を見つけて）おや之はお女房さんのだ。（お花に）來たのかい。
お花。えゝ。あゝ、夫は私がお預りしますわ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

池田。さうかい。（何氣なく渡す）何か用だつたのかい？

寢床椅子の吉濱僅かに動く。

お花。否。……………あの、雨でも洩りはしないかつて…………（煙草入を懷中へ入れ、）

大瀬。（書架の前の方にモデル臺を引出して）よし、此邊（こちら）でやつて見やう。

お花。（池田に）着衣（ちやくい）てせうか、夫（それ）とも……

池田。おい、裸體か。

大瀬。（なほ考へる如く）うむ、肌丈脫いて呉れ。

池田。肌丈脫げば好いのださうだ。待ち給へ、今もつと石炭を入れるから。

お花。（一寸會釋し、以前の煙草入を挾へ入れ藤色紋の帶を物憂げに解きはじむ。）

下手の戶を叩く音す。お花、手を止む。

池田。誰だ

小僧の聲。あたしてす。

池田。待つてくれ。今開ける。（池田石炭扱ひを持ちたるまゝ、戶を開ける）長どんかい。なんだ。

小僧の聲。今家のお女房さんが煙草入を忘れてつたてせう。

池田。あゝ。

小僧の聲。夫を下さい。

池田。（振り返りて）お花さん。今のだらう。

お花。（やゝためらひて）あの…………

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

池田。お女房さんの煙草入さ。

お花。（もぢ〳〵しつゝ渡し）あの……　……

池田。（心づかず）今あげるよ。

小僧の聲。そら、あつたでせう。お女房さんは來てたんでせう。旦那の方が當つてら。

お花。あゝ。一寸夫を（池田より取り返さんとす）

池田。（直に小僧に渡して）さ、ぢや締めるよ。

お花。（苦しげに胸を押えて）あの、今のは渡しちや惡うございましたわ。

池田。（お花の顔色を見つゝ）どうして。

お花。でも私が預りましたのに。

池田。取りに來たんだから渡したつて好いさ、氣の小さい女だな。（再び取り合ずストオヴの前へ行く）

吉濱再び動く。

大瀬。（油土を練りながら）吉濱。オイ。なんだ、又寢たのか。如何したんだか此頃あの男は、馬鹿に無口になつたな。

池田。全くだよ。

大瀬。そして貴様が妙にこそ〳〵するといふぢやないか。

池田。そんな事はありはしないさ。

大瀬。專ら二人共、戀ゆゑぢやと言ふ噂がある。

池田。止せよ詰らない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お花。ちらと池田を見る。

大瀬。菊ちやんも幸福者さ。然しせめて夫があの子の死ぬ前だつたらな…………

お花。(ちつと立ちたりしが、支へざるやうに。) 何處へ座るのでございます。

大瀬。此處だ(モデル臺を指し)其處へ掛けて呉れたまへ。(再び池田に)然しね。あの女はな……

お花。(再びさえぎるやうに)あの、形は、如何なんでございませう。

大瀬。サア……矢張り、かう胸を張つて兩手を組み合すやうにして少し斜めに空を見て呉れ給へ。

お花。ハイ。(靜かに肌を脫ぐ、美しき白き花の咲く如き肌表はる。大瀬の言ふが如き形をなしつゝ)かうでございますか?

大瀬。うむ、もう少し左りに…………

池田。また、その形か、その形にやァケチが付いてるから、駄目だよ。

大瀬。好いよ、僕の此形と追分とは、反對に僕が死ぬ迄は止められないのさ。

池田。お花さん、その形にや死靈が取りついてるから氣をつけ給へ。

お花。えゝ?

大瀬。知らないものは驚くよ、止し給へ。

お花。死靈つて何でございますの?。

大瀬。なァに、なんでもありやァしない、僕のモデルがその形をやつて出來上らない中に死んだものだからあんな事をいふのだ。

お花。(判然と)では、今度は私の番でございますわ。

池田。馬鹿な事を言ふもんぢやない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お花。でも私も病持ですから。
池田。何處が悪いのだ。
お花。胸でございますわ。
大瀨。お菊も胸の病氣だつたよ。
お花。でも私は貴方のがお出來にならなければ死にませんわ、
大瀨。（何の氣もなしに箆の手を動かしつゝ）夫は有難い。
お花。（誓ふがごとく）えゝ屹度！
池田。（お花が大瀨の手本になりし時より側面よりお花を不審かしげに見つめ）君は、姉妹もなんにも無いと言つたね。
お花。（身體は動かさず）えゝ！
池田。さうか。

何れも無言となる暫時段々と靜寂になる、思ひ出したる如く雨の音靜に聞ゆ。其間を縫ひて何方よりともなく艶ほしき追分節の唄聞えはじむ。次第に明らかに大瀨の口より出づる事分る。

唄。鳥も通はぬ八丈が島に………　…………

お花の身體幽かに震ふ。

唄。やらるゝ此身は厭はねど………………
池田。（お花の樣子を見つゝ語たりしが、つと立上りてなやましげに頭をふりつゝ靜かに室を歩みはじむ。）
大瀨。（熱心に動かせし箆を突然に止めて）こりや不思議だ。オイ池田。君にはこの女がお菊に似て居ると思は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れるか。あの女があゝやつて、僕がかうして、君が其處に居ると言ふ丈であの女がお菊に見える譯があるかい。オイ。

池田。（立ち止りて）僕にも分らない事があるのだ。僕にもね。君があの女に例の姿勢をさせてから、不思議にお菊に見えて來たから。これは何かの心の迷ひだと思つて、今も思ひ返して見て居たのだ。

大瀬。そんな事ぢや、あの女がお菊に似て居ないといふ證據にはならない。

池田。然しね。お菊には姉妹も何にもないと言つた。この女もその通りだといふぢやないか。

大瀬。駄目だ。そんな事では僕の幻を破る事が出來ない。いや幻ぢやない。見給へ。（造りかけの油土の胸像を出して）この髪のうねり、この顴骨。この顴骨。この顴骨。お菊のと少しの違ひも無い。之丈のものならば僕はこの女を殊更にモデルにする必要はない、僕は空でも之丈のものは出來るのだ。僕の退分と一所に目を閉つても出來て終ふのだ。

お花。（激しく動悸を高めつゝ）けれ共。お菊は其處まで、死んで居るぢやありませんか。私にはまだその先があります。

大瀬。然し、己れは、今新しくお前といふものを寫さうとしてゐるのに、己れの目にこんな幻がついてゐるやうでは仕様がないのだ。只お菊に似てゐるものを造るといふのが僕の趣意では無いのだ。

お花。（殆んど夢中の如く）けれ共。菊ちやんの其處で消えた生命を私はまだ持つて居ます。

大瀬。然し、只命があるといふ丈で夫れ以上の響きがない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

池田。僕等を打つものがない。

大瀬。やつぱりお粥が生きて來なければ駄目だ。

お花。（其儘の形にて横様に倒る）

池田。大瀬同時に走けよる。

大瀬。オイ水だ。

池田。土瓶を振る、總利にも一水なし。

大瀬。奥へ行つて…………

池田。（直ぐに上手戸により走り出て、潜戸へ行かんとす。同時に潜戸の中よりお種髪もふり亂しゝたゝ走け出づ。）やお女房さん水を下さい。（夢中に持ちたる茶碗を出す）

お種。えッ。

池田。お花が氣絶して。

お種、（茶碗をうばひ。樋の下に宛て、雨水を汲み、中に入る）

大瀬、お花の肌をカンワスにかけし背き切にて被ふ。カンワスには女神の如き裸體を描く。

大瀬。（お種を見て）如何かしたんですかお女房さん。

お種。（微笑みて）否。（お花を抱きて水を含ませ）花ちやん。花ちやん。お前さん。如何したの、ねッ。

大瀬。オイ。お花さん。しつかりし給へ。オイ。

お花幽に目を開く。

お種。氣がついたかい、花ちやん。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お花。今菊ちやんが………

お種。菊ちやんが如何したとえ？

お花。菊ちやんが呼びに…………

大瀬。お前はお菊を知つてゐたのか？

お花。お菊は私の妹てしたの。

お種。菊ちやんはお前さんの妹？夫を如何して隠してたの？

お花。お菊は……あの、池田さんを思つて…………。

お種。それは誰でも知つてゐるよ。それで？

お花。餘り可愛さうだから、如何かして私が變つて…………池田さんに…………せめて氣の毒位に……

………

お種。思つて貰ひたかつたのかい？

お花。（うなづきて）けれ共。池田さんは私達がモデルだから…………モデルだから…………

お種。モデルだから？…………

お花。モデルだから卑しんで…………

お種。夫を知つてたら、なぜモデルになんぞ成つたのだい。そんな事は好いから、さ、静かに寢かして上げるから…………（此中お種始終身内の痛みを堪ゆるこなし）

お花。否。どうぞ言はして………言はして。

お種。困るねえ。池田さんは、決してモデルだから卑しむなんて事はないのだから………

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お花。否。夫はいつてもお菊が言つてたから知つてます。私達はモデルにでもならなくては、とても男の方に近よる事の出來ない女だつたんてす。
大瀨。みんな、夫も運命だからね、今そんな事は思はないて靜かに寢給へ。
お花。否。言はして………

お種、目くばせして大瀨を止む。

お種。私が聞くからね。言ひたい丈の事をみんなお言ひ、ね、
お花。えゝ、ありがたう。(暫く氣息を切りて誰に言ふともなく)けれどもねえ。私はなんにもお菊の爲に盡す事は出來ませんてしたわ。切角大瀨さんの………大瀨さんのモデルになつても、妹以上の事も出來なかつたし、妹の身代りに立つた吉濱さんの畫も、吉濱さんの畫もねえ。
お種。あいよ聞いてゐるよ。
お花。吉濱さんの畫も………吉濱さんの心はもう、菊ちやんよりもお女房さんに………
お種。えゝ?
お花。吉濱さんの心はもうお女房さんにうつつて了つてるから、幾らお菊をうつす氣になつてももう駄目だし………あたしの事業はもうなんにも無いの、

一同無言

お花。(とぎれ〲になほ續ける)切角お女房さんの味方になる積りて頼まれた事も、煙草入を持つて行かれたから。今時分お女房さんは屹度旦那に酷い目に逢つてるてせう……あゝ〲もう私はなんにもする事が無い。母さんにも父さんにも捨てられて、………世の中にする事もなくて…

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

……あゝ……　……大瀨さん。どうぞね、せめてね、お菊の死顏をなりと殘して下さい。…………私達は生きて居る間よりも死ぬる間の方がきつと永いのだから…………さうすれば乾度。乾度あなたの彫刻も出來上りますわ。

お種。　みんな因緣だ。

お花、お種に抱かれしまゝ靜かに、目す。

大瀨忙たゞしく鑿を取りてお花を見詰む。

池田死人の如く入口の戸に倚りしまゝ立つ。

籐椅子の吉濱歔欷す。

何方ともなく消えみ消えずみ。

鳥も通はぬ八丈が島え…………

と哀はしき追分の聲起る。

——幕——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

我が扉

岡本かの子

折々はとざせる我の扉をばゆるめて君の入るにまかする

悉く君に我をば投げたりと思へるあとにまた我のたつ

人妻をとり得る程の強さをば持たる男のあらば掠られむ

東京の街の憂ひの流るゝや隅田の水は灰色に行く

水はみな紺青色に描かれし廣重の畫のかたくなをめづ

橋爪梅子

慰まず終にもだして寢につきぬふしどに人を戀ひ渡らなん

紫の濃き鋭さをめて初めし心をそゞろ淋しく思ふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山茶花は冷たく褪せぬ逝きしわが思ひ出の日のさびしき
に似て

田原祐子

ひとごみのなかに消え行くわが聲を追ひ追ひて生くあは
たゞしさや

音もなくくづるゝ灰をなつかしみ煙草のむ癖やみがたき
かな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

木爪

白雨

首絞り松隣る寺木爪咲いて
縫へば朧我に婚を問ふ人よ
座に攻撃の酒論あり野路朧
隣る部屋廓女が朧眼をやみて
嘆笑に倦めば朧宵闘く火番
造船も日うらゝ浦の高浪や
駄菓子買ふ子日うらゝ縄飛びもす
母屋寄の歸路悪寒あり鳥交る
棺二つ村院より暮れて沈丁花

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お葉

物集和

一體陽氣な、人懐つこい、極く氣さくな質の女でしたが、お葉は此の頃、一日の經つのが如何にも長いやうに思はれて、持て餘す事が多くなりました。それを紛らす爲に强いて用も無い女の髮を結つてみたり、編物や裁縫や、わざ／＼日課迄立てゝしてみましたが、何日も詰らないと云ふやうな氣になつて、我から崩して了つては、茫然考へ込むのが常でした。其の癖何を望んでゐるのか分らない、只無暗と的のない淋しさを追ふやうな氣分になつて、斯う凝乎としてる事さへ堪え難い程イラ／＼するやうな、何とも云へない氣持にせめられるやうでした。母や兄でなく、誰か來て面白い話でもして吳れるといゝ、もう何も彼も失つて了ふやうな、其樣陽氣な事を望み乍ら、心は段々と重りでもつけられたやうに沈んで行くんでした。

先刻素氣なく歸した友達を、もう一度呼び戻したい。殊に人が來て歸つた後程遺瀨ない感じを與へる事はありません。

火鉢の前に懐手をした儘、何日迄も／＼坐つてゐました。思ひ切つて心を捻つた空氣洋燈が、勢一ぱいの明るさを室内に投げて、六疊の間は眩しい程に思はれます。亂雜しもなく取り散した、お茶盆や菓子鉢や、紫メリンスの坐布團が三つ、各自に好きな格好をしてるの迄、何だかそこから淋しさが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

湧いて來るやうにも思はれます。

お葉はくの字なりに身を曲げて、紅勝のメリンスの長襦袢が突つ突き前になつた着物の間から見えるやうになつても凝乎としてました。そつくり形の儘灰になつてゆく櫻炭をみると、急に四邊から寒さが襲つて來たやうに感じられます、無精らしく手を延して、友達が先刻忘れて行つたクリーム色のスカーフを首に捲いてみますと、使ひ馴れた香水の匂ひに交つて、何とも知れぬ其の人らしい匂ひがしました。友達もお葉より二つ程上でしたが、まだ子が無いので琴やお茶を習つてる極く氣樂な身の上でした。兄よりも姉よりもこの友達が好きて、何でも自分の思つた事は云ふやうにしてゐますが、それでゐて今日程感情のそぐなはないやうに思はれた事はありません。友達は先日のお浚の話や、此の頃は誰さんが代稽古をするやうになつたの、椿壽しの三味線で汗をかいたのと云つてましたが、お葉にはその蟠りのないやうな友達の話振りを心憎く思ひ乍ら、眞の上部丈で返辭をして、聲と心とは別々の道を歩いて行くやうでした。

「今日は奈何したの、お話をなさいなね」と俯向いて火に翳してゐた手を握られて上を向くと、強いて笑ひましたが、何だか自分と云ふものが斯う慘めな者のやうな氣がして、譯も無く泪が目に浮びましたが、それを見られまいとそつて袂で笑ふ振をして拭きました。

「いやな、奈何したの」

「奈何もしやしないわ」

「ぢやア何日ものやうにハキ／＼おしなさいなねえ、可厭だわ、サアお菓子でもお食んなさい、羊羹の方にしませうか、鶯餅？」と友達は目の前にお皿を出して、一々箸で押へて聞きました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鶯がいゝわ　と仕方がなしにお客樣のやうにして食べました。
貴女がね何にも話さないから歸るのよ」と笑談らしく云つて友達は歸つて行きました。お葉は友達の家へ行つてもヒョイと歸る氣になつて、行くと直ぐに歸るやうな事もありましたり、行かなきやあよかつたと云ふ氣がした事も幾度かありました。それでもお葉は今夜程友達を妙にして歸した事はありませんでした。

末つ娘と云ふこともありますが、お葉は今年二十四になるのですけれど、見た處はそれよりもずつと若く、自分も又華派な着物を着て、一體もさうでしたが、自分からも勉めて無邪氣に擧動つてました。若い、と人から云はれるのが何より好きでしたから。ですがお葉は自分の年に考へ至ると何とも知れず厭になりました、ですから成丈年なんぞは忘れるやうにしてゐます。性質として、大勢と一緒に笑つて話すなんて事は出來ない、何日も大勢の時には隅の方に無言つてゝ、二三人になると輿に乘つて喋舌ると云ふ風でした。それは自分の縹致が惡いと云ふ退身も若干か加つてゐるのでせう。お葉は自分の貌の決して好くないのも充分知つてゐます、而して毛の濃いゝのと、體が華車なのとが、僅かに女としてのお葉の價値だと云ふ事もよく知つてました。貌が好くない――之はどれだけお葉の身にとつて悲しい事でしたらう。小さい內から一つ蚊帳に寢る姉や兄が、寢たと思つて云つた惡口の幾つかを、寢た振りをして聞いてゐた時、汗は額に出ますし、動悸は高く打ちました、而して大きな失望を抱いた儘、夜具の襟をかんでは聲を立てまいと、黑暗の中でホロ／＼泪を零してゐました。朝起きると突然鏡に向つて、房さりした前髮が眉邊り迄來てゐるのに手を當てて、其樣に自分は厭な、人に嫌はれるやうな貌なのかしらんと新らしく考へて、而して泣きました。よく紅いものが好きだと云つては、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一番上の姉から冷かしい半分に、

「下手に其様紅づくめをつかふと、眞實に乞食芝居に出るお染のやうよ」と云ふやうな憎まれ口も聞きました。それは兄が友達から習ひたての、

「後ろ小町」と云ふやうな文句も知つてゐました。ですから隨分種々と獨りで行けるやうな職業を考へましたが、昔氣質の父は女は他に嫁す者として宥してくれません。一番お終ひに學校の先生にでもなりたいと云つた時、極く昔風な家で、學校も早くから退學させて、三味線と裁縫許りを習はして、髮も結綿にばつかりさせたものを、今更油毛のないバサ〳〵な束髮に結つて、穿き馴れない紫や紺の袴を穿かせるのは、奈何うしても殘酷なやうで忍びない、と之は兄が心からの親切で到頭やめになりました。童貞のやうな清い生涯を送つたらと思つて、近所の某る西洋人の集りにも家へは內密で行つてみましたが、その婦人が何日も〳〵エス樣の艱難なすつた話をしては泪をボロ〳〵零すのが、何だか故意とらしくつて、奈何しても聞いてゐる氣にはなれずに一月程行つちや止して了ひました。さうするともう童貞になるなどは思ひもしないで過して行きます、お葉の性質として、一時は隨分思ひ詰めるんですけれども、月日の過ぎて行くと一緒に、其の考も一緒に薄らいで行くのでした。

　お葉がスカーフを卷きつけた儘、何を考へるとも無く恍惚りしてゐますと、何處からか三毛の奇麗な猫が入て來て、お葉の袂や體へその體をすり付けてゐます、お葉はそれに氣付くと抱き上げて、もう〳〵可愛いくつて堪らないと云ふ風に其の體へ自分の顏を押しつけました、小さい時は何にも嫌ひだつたのが、此の一二年馬鹿に犬や猫を可愛がる樣になりました。草花も又丹精するやうです、が何と云ふ事なしに咲きかけた花を捥つて了つたり、一寸した事にでも猫を酷く打つなんて事も珍らしくない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

んです

貌を洗ふとお菜は鏡の前に坐つて、綾銀杏に結つた髮を撫でつけてゐました。毛許りは母讓りの兄姉中でも一番濃いゝんです。自分でも知つてゐますからさう姉達のやうに白粉を塗つたりしませんが、髮丈は奇麗に何日も掻きつけてました。櫛にかゝつた拔毛を、反古入としてある抽出しから、古い手紙を幾重にも卷いてあるのを順々にほどいて拭いてますと、ふとお菜と云ふ字が目についたので、廣げてみますと肉細な、京都にゐる姉の手蹟なんです。

嘸ぞかし御心配の事とお察しいたし候お菜も最早二十四の事とて私も何家か相當の家もと人々にたのみをり候らへども何分當人はまだ一度も當地へ參り不申候まゝ誰も當人の樣子をしらぬためつひ仲へ入りて世話する人もなく、それに二十四と申しては少し年をとりすぎ申候まゝ誰も一寸二の足をふみをるやう見うけられ候その年になれば奈何しても後妻と云ふ方へ廻り申候それはまた當人が初婚の事とて子などある後妻にはいやなるべくと存じ候へども少し婚期を過しゝもの故いたしかたなくつひ/\帶に短かく襷に長しにてどうも緣遠く相成るやうに存じられ申候

此處で切れてました、もつとこの先どれ丈自分の事がかいてあるか見たいやうな氣がして少し探してみやうと思ひましたが、探すのはよしました。而して貌は眞赤になつてました。自分の心を察して吳れて、何事も同情して吳れるんだと、誰よりも賴みにしてた母さへ、這麼事を自分が彼麼に嫌がつてる一番上の姉に云つたのかしら、と思ふと裏切りされたやうで、恨めしいよりも何だか母が憎くなりました。奈何して自分の心を憐んで吳れないのだらう、儲けに後妻と迄云つて――と思ふと口惜しくつて泣くまいとしても自然に目が熱くなつて來ます。何日の間にか膝の上に廣げられてる手紙の上に、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

壺のやうに雫がにじみました。其處へ自棄に指を突込んで穴を段々大きくしてゐましたが、了ひにはメリ／＼と引裂いて、揉苦茶にすると、噛んで庭へ擲きつけました。それは自分は奈う廿年も取つてます、標致も悪いんです、それに學問だつて、女學校は出てゐやしません、皆んな自分でようく知つてはゐますが、斯う明白(あからさま)に出られると、泣くより外にはありませんでした。もう大抵の處で我慢をしなくつちや困る、之は何日か母が兄に云つたと云ふ言葉なんです、併し今迄それは大方兄の出鱈目で、母は豈夫其樣事は云やしまいと思つてゐたんです。ですけれどももう母だつて然う信用しやしません。ふいと此の時何日か友達に自由劇場へ誘はれて行つた時「寂しき人々」と云ふ狂言で、其の中でケエテと云ふ女に扮した俳優が、三幕目に、母に向つて、

「私だつて自分をそんな棄たれ者だと思ふ事は出來ません」と云つた言葉が、今自分の云はふと思つてる言葉をすつかり云つて呉れたやうな氣がしました。全く自分は姉の云ふやうに、其樣に棄たれ者だとは思ふ事が出來ません。それを姉のやうに、英語や何かは出來ませんが、三味線と裁縫は出來ますとか、温和しくつて然う人に逆らはないとか、折角着物を着てゐる者を捕まへて來て、一々その着物をはいでみせるやうな姉達の仕打が、如何にも口惜しい。

其の癖、去年お葉が外交官に極りかゝつた時には、姉は自分が元外交官を望んでゐた丈に、それはお葉の外交官に不向きな事を數へ立てゝ反對しました、而して自分の方の、矢張り商賣人で、子が無いのを條件に、後妻に是非と云つて來ましたが、お葉は姉が酷く反對をするので、家の者が二の足を踏んでゐるのに、其處へ嫁ぎたいとは云ひ兼ねて、みす／＼漸つと結ばれかゝつた緣が、譯も無くほぐれて行くのを、只無言つてみてました。其の代り姉の云つて來たのは無論返事もしませんでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一時の、それは氣紛れに過ぎなかつたのでしたが、尼寺の事も考へた事がありました、でもそれは淑徳へ行つてる友達から、或る華族の姫樣がお家の事から尼になつて、やつぱり學校へ衣をつけて通學つてらつしやるんですが、新年會で籤を福引で引いた時に、私要りませんから、と笑ひ乍ら返して被入つたと云ふ事を聞いてから、譯もなく味氣ない氣がして、もうそれからは尼なぞとは思ひも及びません。斯うやつて、時々思ひ出したやうに種々な事をしてみたり、何にならふとも考へた時がありましたが、立つては消え、立つては消える泡のやうなもので、之と云つてまとまつた事はありません。之からだつてまア奈何成行くのか、甚麼人の處に落付くか、落付かないか、自分にだつて分りません。まして人に分らふ筈がないんです。

お湯から出ると薄く白粉をつけて、お葉は近所にゐる小母さんの家へ行きました。小母さんは元新内のお師匠さんをしてたんですが、小父さんの處へ嫁てからは、些少も彈きませんでしたけれど、一昨年小父さんが腦充血で死んでからは、今年十三になる貰ひ娘のお米と云ふのを、行々は產婆にさして私が此娘にかゝるんだと云つてます、而して若干の遺產と、强いて賴みに來る人に丈敎へてる極く氣樂な身の上なんです。お葉はよくこのお米を見ると、今に產婆さんになるのかと思つてよく笑ひます、そのくせ自分がなつたらよかつたと思はないでもありません。奈何云ふものか、家では酷く嫌つて、寄せ付けないやうにしてますが、お葉は出來るなら華派にしたいと云つたやうな、何事にも氣の置けないのをいゝ事にして、暇さへあると來ては話して行くんです。其處にはお葉の又從弟位に當る、今年工科を出ると云ふ、謙次つて人がゐるんです。若いにしては珍らしい氣取氣の無い話振りなのをいゝ事にして、お葉は時々お土產なんぞを袂に入れては、茶の間で小母さんと三人して遠慮の無い事

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を云ひ合つてゐました。それでも謙次は恐ろしい勉强家で、よく學校の事を云つたり、氣に懸けたり許りしてるもんですから、彼の人の取柄は學校丈なんだよ、と小母さんと二人で話をする時は、あの學校さんがねえ、なんて云つてました。

小母さんは茶の間で、近所の娘に稽古をつけてゐました、今漸つと灯が入つたらしく、雨戸も閉めてありませんから、一こま丈硝子の入つた障子を通して、小さい庭の枯木が二三本寒さうに見えます。

「オヤよくねえ、一寸待つておくんなさいよ」と云つた儘、蘭蝶を浚つてるやうです。お菜も長唄から入つて、この蘭蝶に手古摺つたものですから、

口惜しゆうて悲しゆうて、泪にはげし白粉の――」

と十二三の娘なんですが、ドスをつかふので、傍から聞いてると二十位にも聞かれるのと、一緒になつて火鉢の胴を叩いてました。可成巧みな節廻しと、小母のよく鳴る三味線の殊に二を多く打つのが絡みあつて、何とも云へない一種の情調を作つてました。此の娘は兩眼とも盲いてゐて、親が師匠にでもするより外はないと諦めてるんですから、此の娘も一生懸命に毎日よく來るんです。自分も寧ろこんな不具だつたら？なんとも思つてみました。

「被入い」と謙次が疲れたらしい目をして入つて來ました。

「御勉强？」

「えゝ、少し見てたらもう目が揕くなつたから出て來たんです、お菜さんは何日頃から來てたんです」

「もう先刻」と苦のない笑方をしました。

「此の頃は薩張りやらないんですか」
「何を」
「新内でさ」
「えゝもう疾つくにやめて了つたの」
「惜しいぢやありませんか、何故」
「何故でも、厭になりましたからさ」とこんな當り觸りの無い話しかしないんです。小母がゐると調子づいて、隨分思ひ切た事も云へたり、冷やかしも出來るんですが、二人になると奈何も世間並の話よりは出來ませんでした。而してともすると、或る恐ろしいものに觸れやしまいかと云ふ、初心な心が手傳つて、成可く下を向くやうについなります。それでゐて、謙次が居ればいい、居ない時は何だか張合拔がしたのも、一度や二度ではありません。お葉が袂から疊へ落した絹半帕の肉色のを、謙次が拾つて、丁度庭へ出たお葉へ向つて、家の中から丸めて投つたのが、肩の邊りへ打つかつて、其の儘手應もなくサラと擴がつて落ちたのを、謙次は笑つてみてゐました。それ丈でも、お葉には何だか貌が熱くなる事のやうに思はれました。
「お葉さんが何日か見せて呉れた、ずつと斯う斜に寫した寫眞、あれを一寸貸して呉れませんか」
「何故?」
「一寸入る事があるんだから」
「何に?」
「何でもいゝから、默つて一日貸して呉れゝばいゝんですよ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「厭よ、馬鹿々々しい。」

「奈何して」

「馬鹿げてるは、厭よ、只厭なの、それでいゝでせう」と云つてる内にお葉は胸がむしやくしやして來ました、斜の寫眞は、髪を半分の餘はみせる心算なんでしたから。其處へお稽古が濟んで小母さんが入つて來ました。

「お勘ちやん、つまづかないやうにね、ほら襖ですよ、下駄の脱いだ處は分つてるかい」

「えゝ、もうちやんと分つてるわ」と其の娘は温和しくお低頭をして、ソロ／＼襖に手を當てゝ立ち上ると、襖から壁、壁から障子と、段段に傳はるやうにしてました。而して一足宛に口の內で數を數へて歩いてきました。自分の家から此家へ來る迄も、矢張り斯うして、六つ七つ、と數へて來て、數へて歸るんです。家は可成いゝと見えて、メリンスの着物と羽織と對にして、可愛い娘なのが、何とも云へずに哀を催させせまた。

「久濶だつたね、奈何かしたかと思つてたよ」

「有難う、奈何もしないけど、只裁縫が少し許り急がしかつたもんで」

「さうかい、ならいゝけれども」鼠入らずをガタガタさせ乍ら、

「お葉ちやん、お馳走をしようか、直ぐ其處にね、お汁粉やが出來たのさ、もう知つてるかもしれないけど、仲々馬鹿に出來ないよ」と云つて、丁度其處へお湯から歸つて來た、お米に何か命令ました。

謙次は其の時ヒヨツクリ立つて窓の障子を啓けましたが、

「オヤ、まだか、可笑しいなア、慥かにもう通る筈なんだけども、それとも時計が狂つたかな」と云

つて猶も障子に捕つてますと、小母は笑い乍ら、
「何もさう極つて通りもしまいぢやないか、お止なねえ、馬鹿〳〵しい、寒いは」
「だつて屹度通るに極つてるんだもの、染井の奴、屹度此の時間を間違へちや不可ねえつてのに何日でも遲く來たり早く來たりしちやまだ見られないんだ」と云つて障子を〆めて又元の處へ戾つて來ました。
「厭だねえ人が通るのを時間を計つて一々窓をあけるなんて、幾等好い女だつて先さんは御存知ないんだもの、知つた處でいやな書生だよ、何日も〳〵覗いて許りなんて、云つてるかもしれない」
「まアいゝさ」と云つてお葉の貌を見乍らがぶ〳〵お茶許り呑んでます。二時間程してお葉は詰らなく歸りました。小母さんは此の頃浪花節に凝つてゝ頻りと誰がいゝの何のつて云つて、その三味線も彈いて聞かして呉れました。而して此度三人して小母さんが贔氣だと云ふのが懸つたら行く約束をしました。お葉はもう謙次なんぞとは行きたくなくなりました、先刻の窓を明けた話と云ひ、寫眞を呉れと云つた言葉も、何日かお葉さんは甚麽商賣が好きです、と眞面目に聞いたのと結び合して、もう思ふのも厭になりました。すると今迄それとなく謙次を褒めてたのからして、如何にも自分が馬鹿らしく思へて腹が立ちます、切角今朝の手紙の氣持の惡さを直さうと思つて來たのに、却て厭な氣許り殘つて了ひました、此の儘家へは歸りたくない、と云つて何處へも行き處はなし、お葉は少し遠廻りした位で家へ歸りつきました。一體自分は奈何したらいゝんだらう、這麽事も朧氣ながら頭に浮んで來ます、もう誰にも口をきゝたくないんです。九時を打つと直ぐに床を敷いて、寢やうとしますと、三毛が入り馴れた床へ又入らうとしたのを、イヤッて程打ちました、而して襟て深く貌をかくしてしまひ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ました。黄と茶の棒縞の銘仙に、紅入友禪の肩當をした夜具は、その黒天鵞絨の襟と、朱塗りの枕とか、薄灯りの元に莫迦に媚めかしく見えました。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

二月の小說を讀む

水野仙

批評をするといふことは、むつかしいものであると聞いて居りました。またさう思つて居ります。如何なる主義のものであれ、如何なる傾向のものであれ、其作者に對して理解と同情がなければ、完全に其作者の作物を批評することが出來なくはなからうかと思ひます。また評者に、確として主義なり主張なりがあつて、初めて他を評することが出來るのであるとも思はれます。或はこの二つを備へたばかりでなく、もつと〳〵の資格が要るのかも知れません。私にはわからない。そしてさういふ資格が要るとすれば、私はそのいづれの資格も備へて居りません。他の作物を、自分の主義からのみ批難したくはない。また好き嫌ひばかりで斷じたくもない。といふと如何しても熱心な批評は出來ないことになつて來ます。私のはそれです。たとひ人は、是でもやはり批評である、或は感想であると、言つてくれると否とに係はらず、私はたゞ、次のものは私の「讀後の感」であるといふことを斷つて置きます。

中央公論

▲眞山靑果氏の「屋敷」は、恐ろしく獨り合點獨りよがりの筆つきだと思ひました。うつかりして讀んで居ようものなら、何のことやら譯がかわらなくなつて了つて、又二三行讀みかへすやうな煩はしさ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が所々にありました。それで何やら氣がゝりな氣持ちで最後まで讀めました。それは作者が、知り過ぎる程見て置いた實際の力だらうと思ひます。作者はあまりに、讀者に分たなければならない作の興味を、自分ひとりで味ひ過した傾きがあります。無理な願ひかは知れませんけれど、作者が曾つての作に揮つたきび／＼した筆にこそ、此哀愁の籠つた「屋敷」を見たいと思ひました。

▲谷崎潤一郎氏の「惡魔」は、頭から言つて了へばちつとも感心が出來ませんでしたので、持つまいとしても持つ期待が、今度のも感心が出來ないといふ失望を起させました。此人の作といふもせまい自分の思想や經驗から割り出して判斷するものですから、主人公の佐伯が、照子の洟紙を舐め出すあたりに行つて、まさかと言つたやうな、滑稽な擠がれたやうな氣分がちよいとしました。それは併し、そのやうな可能性が私にないと言ふことからであるのかも知れません。で靜に考へて見ました。そして此作に對する不滿は、これらの事實を、領かせられることの出來ない、慊らなさであるといふことがわかりました。佐伯が強迫觀念に襲はれて汽車を飛び出すあたりなども、もつとしつかり讀む者の頭を捕へて欲しく思ひました。尤も此作は、作者の意にも充たないやうのべて居られるやうですが、實のところ、書くべく佐伯なるものが、充分作者の頭にこなされて居ないやうに思はれました。筆は鋭いけれども、書き方にではなく、書かうとすることに誇張があるやう見えました。一體此作者のものには、思想ばかりが先に立つて、實際の觀察乃至經驗が、これに伴はないうらみがあるとはいへないでせうか――それだけ此作者の未來の長く、そして大きくあることを意味して居るのですが。

▲田村とし子氏の「魔」は讀み了つて水野葉舟氏の作物を思ひ出させられました。同じく官能の描寫に長じて居るといふことからなのでせう。女といふものをつき放して、それで何處までも女といふものに添へて書いてあるのが、この作を氣持よく讀ませました。その少し、人も認め自分もゆるした長所を、強いたがる傾きはありましたけれど、眼にはなりません。面白く讀みました。

▲中村星湖氏には「坂の下」がありました。ちよいとしたものではあるけれど面白いものでした。一個小隊の兵士達が作つた、三十分間の空氣が鮮かに描かれてありました。

スバル

▲水上瀧太郎氏の「うすごほり」は、癖のない筆ですら〳〵と書き流されたうちに、丁度果物の汁のやうな味はひを喜ぶことが出來ました。あゝかうと情緒を人に強いないだけに、無理もなくほろりとさせるやうなところがありました。此人のでは外に三田文學に「ぼたん」といふのがありましたが、これは綺麗な筆に感心したのみで、「ぼたん」の身の上の事實以外には、作者の持つたほどの興味は湧きませんでした。終りの方なんかは蛇足かと思ひます。

▲五百歌左二郎氏の「松葉巴」といふのは、歌澤の澁い味を説明されたことより外にはなんにも心に殘りませんでした。

▲江馬修氏は「赤い月」といふのを載せて居ます。旨いものです。此人が初めて世に出した作「酒」などには、まだ何處やら整はないふしがあつたやう思はれましたが、今度のあたりになつて來ると、よほど圓熟して來ました。それだけ鋭さを失つたなどゝいはれないやうに、今から氣を付けて頂きます。「赤い月」の一寸氣のついたところは、終りの方の上野のくだりを書きたい爲めに、此作が出來た

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

といふやうな氣持ちのされたことでした。
▲秋庭俊彦氏の「海の鳥」といふのは、眞面目に書いてあるだけで取柄も缺點もないやうなものでした。

ホトトギス

▲加能作次郎氏「丸髷」は、此小説の形式になつて居る、受信者のＨ君と報導者とより外には何の興味もない油ッけのない、味のないものと思ひました。

三田文學

▲松本泰氏の「一週間の夢」氣の利いた題材でありながら、夢にしては秩序があり過ぎるし、小説としては取りたてゝいふほどの何もありません。とかく夢といふものは、人に語る時にはすでにもう興味の大半ば失せて居るものです。此作などもやつぱりかういひたいやうなものでした。
▲久保田萬太郎氏の「淺草田原町」つていふのは、水色の絹をさら／＼と繰るやうな氣がするものでした。どこまで行つても模樣がありません、變化がありません。片つ方には友禪の華かさを欲しながら、無地は無地でいゝといふやうな氣もされます。標題の如く淺草の田原町を、例の垢ぬけのした筆で書いたゞけのものでした。
▲永井荷風氏の「掛取り」は、その行き屆いた筆には感心しましたけれど、それがあんまり、お葉といふ待合ひの女中を捕へて來て、あゝ書かうかう書かうと思つた通りに出來てるやうな氣がしました。觀てから書いたのではなくて、「掛取を」書かう爲めに、曾て觀ておいたこと／＼を器用に上手に書いて行つたと言ひたいやうな氣がします。いつそお葉の談話體であつたなら、惡い方は何處までも惡い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

やうに書いてあるのも、さして目だゝなくて讀めましたらうに。とにかく此作は荷風氏を待たなくてものものでした。

劇　と　詩

▲上司小劍氏のもので「辨天小僧の足」といふものを讀んでみました。あまりに辨天小僧の羽子板をいぢくり廻した嫌ひはありますが、併しそれは、此作としての缺點といふものではありません。この羽子板がなけりや此作もなかつたのですから。此作が一寸面白かつたといふのは、作者の感じたことを、この羽子板によつて說明されたところにあるのでせう。だから一寸その說明が煩いやうな氣もしましたけれど、やつぱり其說明がなければ此作もないのでした。

ザムボア

▲志賀直哉氏の「母の死と新しい母」は、外に白樺にある「思ひ出した事と」二つとも正直な筆を取るばかりのものでした。この前の「祖母の爲めに」の方が、少しの瑕があつた代りに、違つた面白さを認めることが出來ましたのに。

▲後藤末雄氏の「下町」も興味を持つて讀みました。もと／＼氏などの創作の立場は、私どもと違ふのではありますけれど、あまりに下町を自慢げに出されると、つひ何となく惡感が起きて、折角讀者が持たうとした興味を奪はれてしまひます。そして殘るものは、作者が下町に持つ趣味の說明を、初めから終ひまで聞かされるに飽く／＼ことです。話し上手ではあるが、少し感情に誇張が見えます。文章も其通りで、特色があるとはいへ、筆に捕はれて筆は筆を追つて書いて居るやうです。そしてあくどい味のするものでした。尤もこの慊らなく思ふ節々に、此人の特色を認めることが出來ますし、そこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に作者の得意があるならば言葉はないのです。

新小説

▲田山花袋氏の「あの女は」短いだけに――と言つては失禮かも知れないけれど、そつがなくて引き締つた短篇でした。男の心持――中年の男の心持つてものも、成程そんなものかと頷かせられました。最後のインバネスの男が老妓に言つた言葉「男つて甘いもんだらう。けれどなあおい、甘いのが男だぞ。」男の甘いのが本當に女には解るまい」の一句は、内容を再び繰り返した結論のやうな氣がしましたけれど、さてそれがどうだといふことは言はれませんでした。

▲小山内薫氏の「小さと」は、大川端の續篇といふことですが、私は大川端は讀みませんでした。「小さと」も可なり長いものであるのに、すつきりとした筆にひかれて面白く讀みました。そしてこれは何處まで書いてもきりがないやうに思はれました。今までの氏の作に比しては、落付きのある代りに、少し道草を喰ひたがる傾きがみえました。併し缺點といふほどの缺點でもありません。

白樺

▲武者小路實篤氏の「ある兄の返事」も面白いものゝ一つでした。明快な筆で書き分けられた滿足と、この一篇の思想に同情の出來た心とが、好短篇であるといふのに憚りませんでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

幽靈を論ず

メレジコウスキー

「幽靈」はイブセンの作中、最も暗黑な、最も力の籠つた作で、ノラの最後の幕、即ち、自由の爲に母が子供を捨てる事について作者を非難する人達に至極適切な答を示してゐる。

有力な中流社會を象どつた代表的人物は、マンダース牧師で、非常に尊敬すべき、高尙な主義をもつてゐると同時に、一面には、子供のやうな、天眞爛熳な性質も兼ね備へた人である。彼は故陸軍大尉、侍從の未亡人ヘレン、アルビングが、ノラのやうに、久しい以前、自己の自由、道德の神聖を標榜して、夫を捨てた事を責める。ヘレンは、マンダース牧師なる人物によつて云ひ示はされた言を社會の聲として耳を傾けるやうになり、終にもとの家庭に復歸した、其後は何事も道德家が、ノラに求めた要求通りにする。そして餘生を專ら人類及び己が子の爲に献げ、息子には、死んだ父を眞に誠實な君子であつたと思はせて教育する。

ヘレンは、社會から尊敬を贏ち得た家族の虛僞と云ふ立派な建物を飾らんがために亡夫の紀念として、高壯な寄宿舍を建てた。マンダース牧師は、此の建物を神に捧げる爲に、官の證明書を持つて來る。其式の最中、ヘレンの過去の生涯がふと浮んで來て、忍耐、從順、献身と云ふクリスト信者の道德の立場から、お極りの說教をせずにゐられなくなつた。ヘレンは、自分こそ神から、彼女をして義

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

務を盡さしめるやうに、もとの家庭に、夫の許に歸らせる特權を與へられたのだと思ひ起させやうとする。ヘレンは苦し氣な笑を浮べながらいふ「成程、それは仰被る通り皆あなたのお蔭でした。」マンダースは之に續けて「あなたをお歸らせして、義務の重荷をあなたの肩にお負せしましたのは却つて、あなたを心強くし、御幸福にし、其後の御生涯に立派な輝を添へたでは御座いませんか。あの時私が申しました通りに何事も都合よく運んだでは御座いませんか。あなたの御主人は正しい道にお戻りになり、不行跡を止めて、本心におなりになりましたではありませんか。あれからと云ふものは全くあなたと仲よく暮してゐらしつたではありませんか。そして此界隈の慈善家になられて、あなたを御自分のなされる仕事の手助けになさるやうにお教へになつたでは御座いませんか。實際あなたは立派な御手助でした。私はよく承知してゐます。あなたのこの御名譽は當然の事で御座います。ですが、これから、私はあなたの第二の大きな御失錯をお話しなくてはなりません。」

それからも、同じやうな、だるい調子で說敎が引續く。北國の朝の冷やかな光線が照して、次の國の窓から見える陰鬱な景色が幾らかづゝ明るくなつて來ると、向ふの狹い灣が降りしきる雨霧の中にすつかり包まれてしまふ。

この嚴格な道德家は徐々に說き進む「あなたの御生涯を支配してゐたのはたゞ我儘と、不從順とでした。あなたの望んでゐらつしやる事は皆あらゆる束縛を脫がれやう、あらゆる規律を棄てやうと云ふので御座いました。何に依らずあなたの御生活を惱ますものがあると、あなたはそれを自分に用のない重荷か何ぞのやうに、良心に恥ぢず、顧みもせずに擲つておしまひになりました。あなたは、もう人の妻が面白くないとお思ひになると直ぐ、夫をお棄てになる人の母となつて居るのがうるさいと

お思ひになると直ぐ子供を人手におまかせになる」
教會でする說敎の癖で、彼は嚴然とした敎師の態度であつて、ヘレンの方を指し「明ら樣に申せば、奧さん、あなたは隨分罪深い母親で御座いますよ」これはノラを批評する人が必ず出す聲である。
ヘレンはもはや堪へ兼ねて、逝つた侍從アルビングは、凡ての人々から、非常な尊敬を受けて居つたが、實は放蕩なのんだくれもので、却つて家庭にどれ丈、害を及ぼしたかしれぬといふ。
「私は家の中にどんな事が起つてゐるかよく承知してゐながら、我慢してゐたので御座います」
「何んですつて？此處で？」
「ハイ、現在この塀の中で御座います。あちらで（戶を指ざしながら）、私は初めて何もかも解りました。私が何か用があつて食堂へ參らうと存じますと、戶が開きかゝつて居て、丁度其時仲働が花へやる水を持つて這入つて來る音が致しました。
「それから？」
「直ぐそのあとに、アルビングが來る足音が聲えました。そして何か小聲で女に申て居りますの。すると　（苦笑する）。あゝ、今でもあれを思ひ出すと、堪らなくおかしう御座います。仲働が小聲てかう申て居るでは御座いませんか「アレ、お放しなすつて下さいまし、旦那樣、どうぞ御許し遊ばして」
マンダースは猶半信半疑に迷つて、どうとも決し兼ねてゐる。がやつと、自分の道德上の信仰から割り出して、アルビングの行は、觀過し難い人間の墮落だといふ。けれども、ヘレンは何もかも彼れに反對する。二人の話は自然仲働との關係に戾つて來る。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「エ、では、この家の中での出來事ですか、こゝで」とマンダースは呆れ果てゝ叫ぶ。

「實に私は、この家でどれ丈苦しんだか分りません。毎晩主人が外に出るのを留めやうと思ひまして、お酒のお相手をしたり、醉どれのたわごとを聞かされました、差向ひで盃を打ち合せて、お酒を飲んだり、わけの分らないお饒舌りを聞いたりした揚句、大骨折でやつと寢かしつけたので御座いました」

こゝに至つて、讀者は、理想家で、白髮の子供で、しかも、どこからどこ迄、義務とか、献身とかの思想で押しかたまつたマンダースの、飾りけのない、呆れ果てた、滑稽な顔を見るやうに思はれるに違いない。そして實際生活を少しも解しないで、驚の餘り叫び出す。

「私の頭腦は茫としてしまひました。それでは、御結婚後のあの長い御生活は、御主人とあなたの間の酷いひびわれを他人の眼から隱さうとしてゐらつしやいました丈で御座いましたね」

「全くさうに違ひありません。御承知の通り　　」

「ですが、それは……あゝ、何が何だか分らなくなりました。實際そんな事がありませうか」

ヘレン、アルビングの家には、レジナと云つて、侍從と仲働の間に出來た娘と、此の間伊太利から歸つた許りのオスワルドと云ふヘレンの息子が居る。オスワルドは、太陽に離れてから、倦み、疲れ果てゝゐる。小止みもない雨に氣を腐らして、滅入つてしまつた。故郷の寒い灰色の空には親しむ事さへ出來ない。母親は慰めるのでなくつて却つて增長させる計りあまつさへ父の惡癖をオスワルドが受け繼いだのを見るといよ／＼心を痛める。オスワルドは酒も飲む、悶へたり、疳癪を起し出す樣になり、自制力も失ひ、偶發的な自然の性情の發作をおし留める事が出來なくなる。第一幕の終に表はれてゐるのは、到底人の免かれ難い遺傳力、「家族的生活の破綻」を蔽ひ隱さうとする虚僞、父の犯した罪の報

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の怖ろしい力などて、これらが、この劇の人物を皆惱殺して居る。雨のしと／＼降る薄暗い朝、ヘレンとマンダースに交される陰氣な對話にこの道筋が織り込まれて居る。

（ヘレンは力めて自分を勵ましながら「明後日からは、あの亡くなつた人がこの家に住んでゐたといふ事は跡形もない噓て、この家には、悴と母の私とより外にはゐないものだと思ふ積りでございます」

食堂の內に椅子の倒れた音がする。同時に小聲で話するのが聞える。

レジナの低いが、明晰した聲て「あら、どうかしてゐらつしやるわ、放して下さいまし」

ヘレン（吃驚して、）「おや」

（物狂はしく半ば開いた戶を見つめる。オスワルドは咳をして鼻歌を歌ふ。と又、瓶の栓を拔く音がする）

マンダース（興奮した樣子）どうしたのでせう。どうしたのでせう、奥さん」

ヘレン、「幽靈です。溫室の二人の靈が又現はれたので御座いますよ」

マンダース「何ですつて、レジナを、決してそんな事はありますまい、そんな事がありますものか」

（ヘレンはマンダース牧師の手にすがつて、よろめきながら食堂へ這いる）

第二幕では、アルビング夫人が、斯の如な二人の罪惡をこの花のある室て目擊したのは今が初めての經驗てはないとマンダースに打ち明ける。

「私が斯んなに物を恐ろしがつてびく／＼してゐますのは、幽靈のやうな事柄が身にも心にも始終つき廻つてゐるやうに思はれるからで御座いますの。一體よく考へて見ますと、私共は皆墓から出て來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る幽靈のやうなものでは御座いますまいか。兩親から遺傳したもの丈けではなく、舊い、もう死んでしまつたやうな理屈だの色々な迷信が私共の體につき纒ふてゐるので御座いますね。私が一寸新聞を取り上げて讀んで見やうと致しますと、もう直ぐ印刷してある文字の間に幽靈のうろついてるのが見えるやうで御座います。何處にも此處にもお墓から出て來た幽靈がゐるので御座いますね。丁度海岸に數しれぬ砂があるやうに。」

人生に現はれて居るものは皆幽靈である。時代々々が造つて行く社會の建物の土臺は、外見上如何に堅固に見へても、實はグラ〳〵して居る幽靈である。同じやうにマンダースの說いて居る義務とか犧牲とかの考もやはり幽靈の現はれに過ぎない。

「あなたは、私が厭てたまらないと思つてゐる事柄を正しいものだといつてお聞かせになりました。其時私は、あなたのお敎へがどんなものだらうと思つて、一寸絲に觸つて持ち上げやうとするかしないにはやその織物の全體がばら〳〵になつてしまひました、それから私はこの織物はみな、みしん縫てあつたといふ事が分かつたので御座います。」

ヘレンは、今迄自分の生涯を迷はせて居つた、みしんのやうな僞を、バラ〳〵にほぐして見やうとする。それで、マンダースが說く人が苦しんだり服從したりする事は人間が永久に神から與へられた運命だと云ふのに反對する。息子のオスワルドが、パリの名高い醫者に診てもらつた時、父の不品行の爲に、遺傳した病毒か、そうでなければ、幾等か神經質の傾向を受け繼いてゐるといはれた事を話した時も、オスワルドが異母妹と戀愛に陷つて、不義の愛を遂したならば、其の狂者じみた失望的な境涯から救はれるのだと覺つても少しも驚かずに、却つて、レジナを手づからオスワルドへやらうと

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

迄する。この時マンダースの如何にも輕蔑したやうな言葉を聞いても、冷靜に答へる。「あなたはお出來になりますまいが、私にはそれが出來ますのです。私はさう致したいのです。」

窓から眞赤に燒けた空が見える。此の間やう〳〵建て終つて侍從アルビングの記念に獻げた計りの寄宿舍に火が燃へ上つてゐる。其の光を浴びて、オスワルドとレジナが、ヘレンの左右に並び、その傍に悲しそうにマンダース牧師がションボリと立つてゐる。火は過去のあらゆるもの、マンダースの力によつて、成り立つて居た過去のあらゆるものを、悉く灰燼に歸してしまつた。焰はあり來りの習慣と勞働で出來上つた、僞の藏めてある建物を舐め盡した。

雨の降る潮の、ぼうと霞んだ霧の中にをつた二人の戀人の幽靈が、今はもえ上がる火事の光に照らされて居るのを見ると、人生の奧深く潛んでゐる、何か怖ろしい、避け得られぬ運命を目前に扣へたやうな心持を感ずる。ヘレンがこれまで虛僞から脫しやうともがいても〳〵終に益にたゝなかつたのは皆この幽靈が邪魔をして復讐して居たのだつた。

オスワルドは、以前から人の頭腦で作りだした義務といふ北國の思想を棄てゝしまつてゐる。遂に失望して叫びだす「斯う降り續くから堪らない。何週間續くか、何ヶ月續くか知れはしない。丸て太陽の光線かさすといふ事がないのだらう。この土地で日の照つたのは一度もないやうです。」といつて母に諾威の事を話し出す「此の土地では樂みと云ふ事がない。仕事しても滿足な氣が起らない。こゝでは仕事といふものは、咀はれたものゝやうに思はされて、なるべくまた片づけたくなります。こゝて生活するのは苦痛の谷間とほか思ふ事が出來ませんね。」それからクリスト敎の北國と邪信敎の南國との者の相違を擧げて比較する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「あちらでは、人生といふものは喜ばしい、幸福な賜物を齎らすものだと思つてゐます。おつ母さんは氣がおつきになりませんでしたか。私の書いた畫なども皆生活の樂みに關係したものばかりでした。あちらには永しへに輝く太陽もあれば、賑やかな休日の樂みがあります。だから僕はこゝに居るのが恐はいのです。」

「恐はいとは、どうしてなの」

「この僕の體の中に、潜へ立つてゐる力が、外へ出ると汚はしい行になりはしないかと思つて恐はくなります」

彼の云ふ「汚はしい行」へ狂者じみた行とつけ加へたら尙適當かもしれない。この幕の終りの場の震するやうな事實が寫し出されてゐるのを見ると、誰れでも、人間は、智的にも道德的にも遺傳といふ力に壓せられて終に挫折しなければならないと云ふ感が起つて來る。科學的の敎育を受け、あらゆる迷信の羈絆を脫してゐる今日の人々の良心でさへ、この盲目的な、活動的な力と戰ひ、終に亡ぼされねばならぬ宿命をもつてゐる。斯んな生氣のある力だから、如何に眞理の光に照らされても、現今の人生觀の土臺柱まで倒さねばやまない。それて、母親は息子に、其の放蕩な、狂者じみた性質は父親の過度な飮酒の害が遺傳したのだと說明する。そして、父親の罪を許して吳れるやうにと云ひかけやうとする時ふと、自分のやふな慈善事業に携はつてゐるものや、道德にすがつてゐるマンダースなどは、斯んな陰氣な北國に居ても考へ及ぼさなかつたが、夫の不品行は、詰り生活から生ずる衝動に過ぎないものだと思つて來る。オスワルドは母親のこの言葉に餘り身を入れて聞いてゐない。彼は、父親を愛してゐもしないし、又今迄實際愛した事もなかつた。だから、父親がどんな種類の人で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

あつても別に差し支へはないと云ひ、更に母親が現在失望しながら、無理に離れまいと努めてゐる神聖な虛僞を冷かに見下して、非難しても誰が之を怒つて反對するものがあらふかと詰る。
「あなたはそんなに古い迷信なんぞにつかまつてゐらつしやらなくともいゝじやありませんか」
「それをお前は迷信だとお思ひかえー
「まあそうですね。これも世間の人の考へ方ばかりなものですから。なに、世間の人がどうだつてやつぱりそれは………」
「幽靈だね」非常に感動して、彼の言葉につけ加へる。
「まあ、さうです、『妖怪』とか『幽靈』とか云つてもいゝでせう。」
まだ此の外に幽靈が一つある。それは、オスワルドがヘレンに對する母と子の愛である。彼は母親には何でも云つてしまふ、それて、パリに居た時幾度も病氣の發作があつたと打ち明ける。
「どうも氣味が惡くてなりません、あゝ、ほんとにいやになります、赤子のやうになつて、人に養つてもらはなければならないと思ふと………」
「赤子には養ふおつ母さんがついてるから大丈夫だよ」
「いゝえ、僕はそんな事はいやです、僕は何年も何年もこゝに居て、白髮になつて、グズ〳〵してゐるのは考へても堪りません。おつ母さんだつて先になくなつておしまひなさるかもしれません。」
母親の居るそばの椅子に坐る。
「醫者がそう云ひましたが、この病氣では不意に死ぬとは限らないそうです。何んでも腦軟化症とか、そんな種類の病氣だらうつて。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ヘレンは、オスワルドの疲れた笑ひ顔を見て吃驚する。彼は尚續けて
「腦軟化症とは、い丶病名じやありませんか。この病氣の事を考へると、櫻坊の熟した色の絹の窓掛がありませう、あれを思ひ出すのです、手觸りの柔らかい、奇麗な。」
「オスワルド、オスワルド」とヘレンが呼びたてるけれども、もう間に合はない。彼は踊り上つて急ぎ足に、室内をあちらこちら歩き廻る。今にも發作が來るだらうそうすると、もはや希望もなくなつてしまふのだと思ひながら。ヘレンは彼が自分を制する事が出來なくなつてゐるのを知る。終に、オスワルドは瓶入のモルヒネを出して、此度發作が來たらこれを飲ませて呉れと賴む。
「そうです、おつ母さん、これもあなたにして戴かなければなりません」
「私が？お前のおつ母さんが？現在自分の生んだ子の命を取るのかい。」
「僕は生んで下さいとは賴みませんでした。それに、あなたが生み付けて下すつた僕の生命は、どんな生命です。僕はこんなものはいりません。取り返して下さい。」
　人の存在の根原を現はして今又消え失せて行く幽靈は母の愛の聖靈である。
　ヘレンはもはやこの場合、其の意に從ふより他に仕方がないと觀念して、此度發作が起つたら殺さうと約して堅く誓をたてる。一時オスワルドは落付いて來る。と、ヘレンはどうかして慰めやうとする。心の底を割つて見れば、確かに、彼と話すのを恐れてゐるのだが、自分ではこれを悟らないで、たゞねかし付けてしまへばい丶と思つて、赤坊をあやなす樣にする。
「それ御覽、もう發作は濟んでしまつたよ。大分よくなつたらう。きつとさうだよ。ほら、外はあんなに明るくなつて、オスワルドや、見て御覽、日が眩しい程照つてゐるじやあないか。まあ何でも變

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて見えることと、さつぱり新らしくなつたやうだよ。」

立つて、テーブルの火を消すと、次の園の窓から、其の背後に峙つ山の頂が太陽の光線に輝いてゐるのが見渡される。

と、俄に、今迄椅子にかゝつてゐたオスワルドが叫び出す「おつ母さん、太陽を下さい」彼は引きつけてしまつてゐる。筋肉は痙攣を起し、頭は茫として表情を失ひ、目はつり上つてゐる。ヘレンは走りよつて、其前に跪づき手を握りしめる。

けれどもはや息子は母親を認める事が出來なくなつてゐて、かすれ聲でいひ續ける。「太陽を、太陽を」

手に毒を持つて恐怖に震へながら、現在自分の血を分けた子を、この無意味な、咀はしい苦悶から脫がれさせる爲に、どうしても死を與へなければならぬかと思ひ悩んでゐる。じつとして動きもしないオスワルドは、聲もなく、感もなく、唯だ「太陽を、太陽を」とさゝやく。

この劇は、家族の成立を神聖なものだと熱心に辯護して、ノラが子供を棄てたことに就て烈しく非難する人々に最もよい答である。ヘレンアルビングは、ノラと違つて、再び家族や子供の團欒へ歸つて來る。オスワルドは、今日の社會の稱讃が伴ふて居る虛僞、慈善事業とか、卑怯な人生觀といふやうなものを美しく飾つてゐる虛僞、其中に隱れて居る邪惡の子である。この滅びる運命を持つて居る世界の最初の犧牲として消えて行くのだ。

イプセンは此の劇で、他の著作にもよく見える神秘的な、自然主義的な方面を表はしてをる。墮落といふ事には激しく反對して居るから殊更に其の道筋を說明して居る。けれ共餘り科學的な分解計り

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にかまけてはゐない。人生に反抗する力、即ち天才の力が何の創造もなし得ないで、どれ丈社會の罪惡や虛僞に挫かれてゐるか、又遺傳といふものか、みしん縫の織物や、マンダースのやうな道德家、慈善家の虛僞に復讎するかといふ事を示すのは、イブセンに取つては何でもない事である。實際、マンダースがオスワルドを亡ぼすやうになるのは、自分丈には無意識な、自然の成行に過ぎない。この點から云へば誰をも罪するに當らない。詩人イブセンは、永久に存在する人生の制限を私共に省させ、生きることの悲しむべき眞相を開いて見せたのだ。ヘレン、アルビングが恐ろしさの餘り「私はよくそう思ふのですが、私共は皆お墓から出て來た幽靈ではないでせうか」と云つたのは無理もない。オスワルドを苦めた、此世の生を受けた不幸の感は誰れしも死ぬ爲に生れて來たもの丶經驗する以上のものではない。クラシック派の詩人が、こんな悲劇を、運命とか宿命とかいつて居るが「戀愛の喜劇」では之れにフォークとスバンジンダとが味はつて居る。二人が、この悲しみを感じると、生を棄て丶永久にこの悲しみから離れてしまふ。ノラは、決して實際的な目的を追うたのではなく、現實の生活以上に高尙なものを求めて、夫をも子供をも置去りにするのである。イブセンの描出する斯んな種類の悲劇は、最高な美に接觸してゐる。其の表はれる處は、人生の賴りない心持と、熱情とで、たれに依つて私共は亡び、その爲に亡びる價値も出來るのである。

此の世に生きる條件は、唯だこの土の上に限られたものではない、人間は最高な理想の唯だ一つ外ない美しい瞬間を得んが爲に生きもし、苦しみもしてゐるのだ。假へそれが絕望的な奮鬪で絕望的な盡力を得る結果に陷つても構はないといふ考をこの詩人は何處にも表はしてゐる。これに就いてプラトーの考を辿つて行くとやはり同じ色に消え込んでしまふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

イプセンは、美學上の形式に拘泥せぬ藝術家の一人である。その作の組み立てから云へばイプセンはクラシック派であり、詩的な感情の底を見ればローマン派でもあり、現代を其まゝ暴露する大膽さから考へればナチユラリストでもある。然し、尙奥深くたちいつて、此の詩人の人格に眼を注ぎ、力めて眞に此人の新らたな處を見定めると、イプセンは、プロテアスと同樣一面には好んで種々な形式を採りながら、根本の性質は、ナチユラリストでもなければ、クラシック派でも、ローマン派でもない。イプセンの詩に表はれて居る社會と、哲學的唯心論に反對した思想は、十七世紀頭初の詩人、例へばゲーテの處女作やバイロンを感動した自由の靈感や當時の理想主義に、論理的と遺傳との思想を結び付けたものである。

永久に相爭ひながら、相互に缺く可からざる密接な關係をもつ、智識と信仰といふ二つの力が、一步毎に互に融和しながら、其の勢力をどこ迄も擴げてゐる。この二つの中に詩の命もあれば力も封じ込められて居る。どちらも絕體に勝利を得る事も出來ねば敗北する事も出來ない。一時寫實主義の勝利かと思へば、寫實主義は早や理想主義へ道を開いてゐる。かうして、一方へその潮が高く上れば上る程次の干潮が遠く引き去るやうになる。恰も破壞の後に自然建設を待ち望むやうに、智識は信仰に夥しい要求を起さす。矢張り寫實主義も常に理想主義を渴望してゐる。ヘンドリック、イプセンはどこ迄も舊い神には反對し之を拒絕してゐるに拘らず、破壞性を帶びた論說から、現に私共が經驗して居る建設的哲學的藝術作品に至る迄の偉大な智的復古をはかつた熱心な主動者の一人である。

——武 市 綾 譯——

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ゴースト」を讀む

林千歳

私共が「ノラ」の後に、「ゴースト」を研究して見るといふことは或意味に於て、非常に興味あることゝ思ふ。

ノラが舞臺の上に公にされた時には、すでに誰れもが知つて居るごとく、其頃の社會に非常な問題を引起して劇場を出て去る人々の間には議論紛々として皆其突飛なるを論じた。こういふ事からして或劇場で演つた時には其結果を家庭に止まるといふことに變へたさうだ。之れはイブセン自身も然ういつて居ると云ふが作としての思想を弱めて了つたものであるが、當時の一般世俗はさうでもせねばおさまらなかつたといふことが知れる。要するにノラは普通の社會の眼から見ては至極、圓滿な家庭であり、夫のヘルマーも社會的に一個の紳士としてはまづ缺點のない人物であり、しかもノラはヘルマーとは愛の上に築かれた結婚であつて三人の可愛いゝ子まである、恁んな境遇にあつて、一つの出來事に撞肩つて、それが自覺の導火線となり遂に從來の婦人より一歩を破つて、自分の周圍のすべてを犧牲にして己れは家を去つた。このノラの、因襲によりて盛り上げられた思想と行爲とを打破した事實は、悉く社會の驚愕と罵倒とを買つた。こういふ風にイブセンが社會の攻擊の矢表に立つて次の作「ゴースト」を書いたといふことは、ノラの作が如何に「ゴースト」に切りはなして考へることが出

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來ぬ繋がりがあるかといふことがわかる。これ丈でも「ドルス、ハウス」と「ゴースト」とを見比べることの如何に興味の深いかゞ思はれる。

「ノラ」は夫や子供を棄てゝ家を去つた、そして社會は、それを有るまじき事實、無法な女として問題を起したが、されぱと云つて其儘家庭の犠牲として止まつたなら何うであらうか、といふのがこの「ゴースト」に於ては作の出發點だろうと思はれる。

主人公オスワルドの父侍從陸軍大尉アルヸングは社會的に尊敬されたる一般の立流な紳士であるが此紳士の半面は殆ど節制なき多淫家であつて是れが爲遂に病を獲て死し、下婢はハンナの私生兒レギーナと呼ぶ娘を遺した。之より先オスワルドの母、アルヸング夫人は結婚後一年許にして夫の生活の半面を知り牧師マンデルスの許に家を去つて來るが、牧師マンデルスは宗教上法律上神聖な緒に由りて結び付けられたアルヸング夫人に因襲的に妻としての道を說いて再び義務の緣に復らしめた、そこて夫人は一家の秘密を保たんことを己が務として、敢て夫の惡聲を隱さん爲に一方には社會的に尊敬せらるべき事業の共力者となり夫の生前は勿論死後までも一紳士として尊敬される丈に只一人夫人が悉く其家庭の事から事業の上の事まで背負つて立つた、然し子息オスワルドは敎育上此樣なダークサイドを有つて居る家庭に於て敎育することの不可能なるを知り他國にやり、夫の私生兒レギーナを我手許にて下婢として養ひ育てゝ居る、之等の家庭の半面をよく識らぬ牧師は夫人を責めて夫人の思想行爲は悉く無節制不合理だといふ、始終我儘といふものに支配されて居つて決して如何なる束縛制肘をも受けやうとは爲ぬのみならず、己が左右の全くの物事を、不注意の無分別に悉く放擲して毫も顧る處がないのだといふそして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

マンデルス「…………………………………人の妻たるを以て不快として貴方は夫といふものを振棄てられた、人の母たるを以て煩ひとして――貴方は我が子を他國に出して了はれた――」といつて居る、が此の牧師の云ふごとく再び家に歸つて何事にも堪へたオスワルドの母が我子を他國に立たせなかつたらどうであろう。オスワルドは出して畫家として巴里に居る、而して美術家の生活の中に暮して自由の思想を有つて居るのを牧師マンデルスなどは偏に母の罪とし家庭をはなした母の處置を不當な處置だといふ、で夫人が亡夫の償罪旁一の孤兒院を建設しやうとの企も其相談相手の牧師はオスワルドに對する償罪の爲だとまでいふ、又牧師はオスワルドに對しても、家庭を離れた結果は、

マンデルス「………………………………………もう二十六七歳に成られるのに、猶ほ秩序ある家庭といふものを識られる機會が無い…………」といふ、オスワルドの美術家社會にのみ交際せしをきいて「………此の種の人達の大多數は家庭を造るほどの生活力を持つて居らん…………」云々オスワルドはそれは金が足りないで結婚が出來ないものが澤山あるといふ、然しそれでも家庭は造られる又實際に二三のものは而も秩序ある愉快な家庭を造つて居る、といつて社會上立派な形式を經ない結婚でも秩序もあり慰安をも得られるそんな家庭もあるといふ、牧師は開き直つてそれは野合(やがふ)だといふ不德不義だといふ恁んな事を政府が默認するとは奇怪千萬だといふ、オスワルドは猶、夫れ等の家庭に於て不德とか墮落とか云ひ得べき事は見もきゝもせぬといふ、そして却て他國へ出張して居る人達の紳士の儀表として仰がれて居る有妻者乃至家長に接した時に世の中に初めてかゝる我々の夢にも想像しなかつた事柄乃至場所あるといふことを知つた、云々のオスワルドの言はマンデルスの如く因

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

襲に囚はれた結婚觀、即ち兎も角も形式が立派でなくてはならぬ其立派な形式を通して築かれた結婚でなくてはいづれも野合である不德である不義であるとしかも內面に秩序あり幸福があつてさへも…………。

マンデルス牧師はオスワルドを見て、其病的な容貌が父アルビング酷似(そつくり)だと云つて驚くそれから牧師と夫人との間に十回忌紀念碑の除幕式の話から牧師に、結婚後から死ぬまでの夫と自分との間にどういふ生活があつたかと悉く物語る、遂に下婢にしてレギーナの母たるヨハンナと夫との不倫をも話してオスワルドを他國へ出したのも小兒に毒を飮ませるやうな家庭におくのは實に忍びないからであつたといふ、此度孤兒院を建てるのも、夫の惡い評判を消したいからだといふ暫くして散步に出たオスワルドは食事にかへり食堂にある時に夫人は不幸にも丁度亡夫アルビングと、下婢ヨハンナと同じ影オスワルドと若きヨハンナの娘レギーナとの聲と姿とを見て、

夫人「……………あゝ幽靈! 溫室の二人が――廻り回つて復た――

オスワルドはフイジカルにも父の子であつたのだ、恐怖(おそろ)しい迄に酷似せる彼れが影はます〳〵其色が濃くなるばかりである。

夫人はレギーナを出さねばならぬといふて結局其母ヨハンナのやうに他へ結婚(かたづけ)させて了ふ方がいゝといふヨハンナも三百タアレルの金をつけて次の夫エングスランドに嫁せしめたといふと牧師は呆れて

マンデルス「……………三百タアレル許の目腐金に眼が眩んで、墮落した女と結婚するとは!」

夫人「それでは墮落した男と結婚した私を貴方は何んと有仰る?」といふ猶夫人は牧師に聖壇の前に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

立つた時のアルビングがエングストランドと式を擧げたヨハンナより純潔だと思ふかと。

牧師マンデルスはエングストランドの來るを幸、レギーナと彼れとの關係は、全くの父親かどうかをたづねる、エングストランドは事の始終を話すと牧師は墮落した女であつた事を隱して居た事は不都合だといふエングストランドは不憫な女を捕へて慘めに責めるものではなかろうと云ひ

エングストランド「男が墮落した女を救ふのは良い事ぢやありませんかね？」といふ、之れ等の事實に撞着つて牧師は

マンデルス「…………過つて居つたといふ事を發見するのも大にうれしいもので有るが云々………………」

夫人「私は貴方は大きな赤兒でいつまでも其儘で居る云々。」

牧師は所謂世俗からは最も物の解つた人物であろうが大きく自由な思想を保つたものからは沒曉漢の一人であるに過ぎない。

オスワルドは巴里に居て土地の名譽に自己がはからず病的發作によつて危期の來る由を告げられ遺傳もない筈であるのに己は何故に斯る不幸に陷るのかと煩悶し母に質す、そしてレギーナは只一人のオスワルドの救ひ手である、と母に迫つて婚せんことを求む、オスワルドはレギーナの異腹の妹であることは知らないのである、母は事實を告げる事が出來ず逡巡する、而し遂に今こそ話す時だと、父の遺傳を悟つてオスワルドとレギーナとを前において事の全くを物語ろうとする時孤兒院は火を失して燒失して了ふ、オスワルドは殆ど自暴自棄に陷る、其後父の生涯の事實を二人に語つてレギーナとオスワルドが近親であることと其結婚は不可能なることとを説くレギーナは之を聞きオスワルドの病的あ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るを知つて「…………貧乏娘は若い内を利用しなくつちやならない…………自分でそれと氣のつく頃にやもう情ない事に成つて了ふのだから…………」云々と夫人とオスワルドには心ものこさず去る、生れながらにして悲惨なモーチブを生みつけられたオスワルドは遺された父の影に彼れの精神も肉體も奪ひ去られて絶望の極、物狂はしき迄に悶えくるひて、衣兜に秘してあるモルネヒを出し遂に、自分は産んて呉れとは頼まないに、こんな身體は、貴方にかへすから今は自分に死を與へよと母に迫る憤悶やまずして翌曉日出づる頃太陽太陽と呼び乍ら昏睡、喪心する悲劇の曲は玆にオスワルドの死と共に終つて居る。

イブセンは此の「ゴースト」に就いて

「此曲は法式、即ち構造の技巧其ものが既に著者が臺詞の中に現はれるのを全く禁じて居る、余が目的とする所は讀者の心に宛もある現實の事物を目撃する如き感あらしめむとするにある」と語つたさうであるが、此作を讀み終つた後には實に藝術の制限を超へたりと思はるゝ迄に實感的である現實的である、作中マンデルスの夫人に云へるごとく「…………少くともあなたの結婚は一切立派に法律上の順序を踏んで行はれたことは確實です」と又夫人は「…………法律順序、此の世に起る不幸の源はその法律順序の爲だと幾度私は思はうとしたか云々」社會の所謂立派な結婚は夫人のいふごとく不幸の源であつたのだ。又オスワルドは亡夫の所行をのこらず聞き終つた時「お父さん、お父さんだ僕は實際お父さんを毫も識らない、唯いつか酷い事を僕に爲た事より、お父さんを思出す種なんぞ何も無いんだ」といふ母が子といふものは父を愛する心を持つべきものぢや無いか…………といふとオスワルドは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「子が毫も父を瀆らなくともまた何等の謝すべきものが父に對してない場合にも……………」社會の所謂父母を尊敬せよといふ教訓を實行すれば遺傳の血液は我ら自らに何の刑罰の因由もないに酬にはたゞ生の壞敗をまつ苦悶を與へられて居る、所謂圓滿な良家の家庭は子女を家庭の內にて教育するを得ざる程の腐敗の裏面も有つて居る。法律も宗教も所謂法と掟の後に隱れて居る。作者は眞を追求して法律に宗教に、道德に義務に之等のものに悉く事實といふ鋤を入れて悉く虛僞の招牌を崩壞して居る讀者が心に有の儘の現實をまのあたり見るごとく銳利なメスを以て種々樣々に解剖して居る。

而して此の作には遺傳といふ科學上の論理が藝術上に如何にも浮き上つて織り出されて居る。此の人の晩年の作に比べては其云はんとする處に直往邁進して其の論理が殆ど完全に運び出されて居る點が此作の特色である。私は必ずしも此作を以てイブセン作中の一番よき作だとは思はないが兎に角深沈な力強い感じを讀者に深く彫りつけられる作だと思ふ、アーサーシモンズも「ドルス・ハウス」「ワイルド、ダック」とそれに此の「ゴースト」を以てイブセン三大傑作だといつて居る。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

◎青鞜も皆様方の少なからぬ御盡力に依つて、少し宛でも發展の歩を進めて行くのは私共の誠に嬉しく存じる處でございます。如何も奈何かして變化に富むやうに致したいと存じながらも、何分經驗の少ない爲思一本調子に流れ易くて困つております、何分經驗の少ない爲思つたのと出來たのとは隨分な違いになつて許りおります、何卒御氣附きになりました個所は、御遠慮なく御注意下さいまし、猶研究會の事も語學をしたらばと仰在つて下さる方もございますので私共も考へてをります、兎に角三月からは始めます、お願ひいたす方も略極つてをりますのですが、此の稿〆切迄にはまだ日がよく極つてなりませんから、慥かな處を發表いたす事が出來ないのは殘念でございます。

◎毎土曜日を面會日といたしてをりますからお話に少し御出て下さいまし。

◎國民新聞に掲載された學校評判記中の女子大學に關する記事は青鞜社々員の筆になつたものではありません、御尋ねの方もあつたやうですから念の爲申上げて置きます。

◎社員は毎月十五日迄に會費三十錢をお納め下さいまし。

◎社員の方は何卒原稿を隨時本社あてに御投稿下さいまし、用紙は十行二十字詰。

◎研究會は社員以外の方でも、お希望の方はお出下さる事を希望いたしてをりますから詳しい事は本社へ迄御問ひ合せ下さいまし。

◎新たに、三ケ島よし子、樋爪梅子、安田皐月、山田秀子の方々が御入社下さいました。

本號責任者　中野初　物集和

新刊書

青海波（歌集）　與謝野晶子著　有朋館發行

新譯源氏物語（上卷）　與謝野晶子著　金尾文淵堂發行

創造　木下尚江著　金尾文淵堂發行

何分〆切に間近う御座いましたものですから殘念ながら批評は次號に讓る事にいたしました

寄贈雜誌

ホトヽギス、歌舞伎、シバキ、ザムボア、藝文、早稲田文學、三田文學、劇と詩、スバル、紅塔、道案内、新婦人、女子文壇、東洋時論、北斗、十番寶窟、みづゑ、婦女界、印象、曙興、アラヽギ、日光と臥床

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

小說號（次號豫告）

四月一日發行の青鞜は全部小說でみたす事に致しました、木村贊助員及社員は此擧を熱心に贊成され目下一生懸命に執筆中で御座います。

執筆者（順序不同）

森しげ子　岡田八千代
田村とし子　長谷川時雨
國木田治子　尾島菊子
上田君子　木內錠子
荒木郁子　杉本正生
神崎恒
其他

雜誌規定

○毎月一回一日發行

○定價一冊金貳拾五錢──郵稅壹錢五厘──

○原稿〆切期日は毎月十日限とす。

○前金購讀料(四ヶ月分)壹圓(六ヶ月分)壹圓五拾錢(八ヶ月分)貳圓(十ヶ月分)貳圓五拾錢(一ヶ年分)參圓

○廣告料 (一頁)拾五圓 (半頁)八圓

○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。

○振替貯金(東京口座一一六〇)に拂込まれたし

○郵券代用は一錢切手に限る(但し一割増のこと)

明治四十五年二月二十七日印刷納本
明治四十五年三月 一 日發 行

東京市本郷區駒込林町九番地 青鞜社内
編輯兼發行人 中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人 島連太郎

禁轉載

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三秀舍

發行所 東京本郷區駒込林町九番地 青鞜社
(電話下谷三七七六八)
振替東京口座一一六〇番

發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂
電話本局(一一二四 三二八)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代文藝叢書 第八編

東京市日本橋
振替一六一七
春陽堂

最近の小說家

文學士
生田長江氏著

目次

漱石と鷗外　泉鏡花論
田山花袋論　德田秋聲論
島崎藤村論　眞山青果論

長江氏得意の長論にして現代文壇の代表的作家を縱橫に品評す

各卷每册二百頁

實價各 廿五錢

各送料四錢宛

■既刊目次■ 白鳥 泥人形八版、秋聲 我子の家六版、三重吉 赤い鳥五版
藥內 山上より四版、宙外 草あやめ三版、白川 巣鴨の女二版、鏡花 歌行燈三版

森田草平氏著
小說 自叙傳 全壹册
實價金一圓十錢
送料八錢

故尾崎紅葉氏原作
鏑木清方氏畫
金色夜叉繪卷 再版
實價金一圓三十錢
送料金十二錢

春陽堂發行（東京市日本橋 振替一六一七）

眺望佳絶

即席そば料理

菊そば

其他御好みに應ず

春は花見に
夏は朝顔
大瀧ありて納涼によし

四季の草花を陳列し御高覧に供す

秋は菊見に
冬は雪見に
四季共によろし

梅壽樓
團子坂中腹

菊そば本店
電下三八五七番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

利は元に有ばこそ　現金出して安く仕入れて

紋羽二重　平羽二重
朱子羽二重　梨地羽二重
御裏地用羽二重　造花用羽二重
刺繍用羽二重　書絹

羽二重

弊店は羽二重の生産地たる越前福井に製織工場を有し直接の卸直段なれば他の小賣店よりは慥に二三割安價に有之候
御染物は熟練なる染屋と特別廉價の契約有れば無手數にて御便宜に調進可仕候

東京市神田區西小川町一丁目十三番地
島田織物會社出張所
羽二重屋商店
電話本局三七八三番
（電話帳には い部羽二重屋を御引用被下度候）

京御召
縮緬

お召は京都西陣製品縮緬は近江國長濱製品の精撰したる品を取扱居候
御用命の節は電話又ははがきにて仰聽候へば直に持參御覽に入れ可申候

貸して小言を云ふよりも　いくらも笑て入れる現金

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

九段

（中坂上角）

長谷川寫眞館

館主 長谷川武七

（電話番町一二四五番）

村井弦齋著 增補註釋 食道樂 全一冊 春の卷 夏の卷 秋の卷 冬の卷（合本） 定價金二圓 郵稅金八十錢

村井弦齋著 增補註釋 食道樂 縮刷 春の卷 夏の卷 秋の卷 冬の卷 全四冊 各卷定價八十錢 郵稅十二錢

村井弦齋著 增補訂正 臺所重寶記 全一冊 定價金一圓 郵稅金十二錢

赤堀松吉 赤堀峰吉 赤堀菊子共著 家庭應用 洋食五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵稅金十二錢

赤堀吉松 赤堀峰吉 赤堀菊子共著 家庭應用 惣菜五百種 全一冊 定價金七十五錢 郵稅金十二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊補 年中惣菜 全一冊 定價金八十錢 郵稅金十二錢

故久保田米僊 毎日の惣菜案內 全一冊 定價金十錢 郵稅金二錢

故久保田米僊著 同息米齋、金僊補 茶の湯の栞 附茶席料理 全一冊 定價金八十錢 郵稅金六錢

赤堀吉松閲 奥村繁次郎著 名物 諸國料理 全一冊 定價金四十錢 郵稅金六錢

發行所 東京市銀座大通新橋際 振替貯金東京二〇〇番 新橋堂書店

心の花

第十六巻 三月號 第三號

大島ものがたり　幸田露伴
知人（チエホフ）　吳野潮音
鸚鵡　大沼匏村
少きアイヨルフ（イブセン）　草野柴二
竹根好忠　鴻巣盛廣
秋萩帖考　獺富濱雄
橘守部傳　橘純一
藥師寺　佐佐木信綱
悒惱の裏より　森田茂郎
獨思へば　橘糸重子
名殘　平田松堂
遠　稻葉の里人
幻の花　白蓮
下町風　石榑千亦

定價一部金十二錢郵稅一錢●半年前金七十五錢　一年前金一圓四十錢

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部　振替口座東京三四〇〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第二年 第三卷

ザムボア

朱欒

定價一册 二十五錢 送費二錢

三月號

戯曲 十一人の偏盲 木下杢太郎
詩一篇 蒲原有明
小説 太陽を見ぬ兒 小川未明
小説 遺書 長田秀雄
詩 少女のマリアに祈る歌 茅野蕭々
小説 合歡の花 秋庭俊彦
詩 素描 川路柳虹
小説 泉のほとり 相馬泰三
歌 海郷異志 吉井勇
詩 一篇 三木露風
散文 朱欒のかげ 北原白秋
歌 心 北原白秋
詩 習作 北原白秋

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目 振替東京五六一四 東雲堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

東雲堂最近發行書

■**演劇新聲**
小山内薰著
定價八十錢 送費六錢

北原白秋著及畫
抒情小曲集
おもひで
第五版發賣
空前の美本カルタ表紙
定價金九十錢送費六錢

■歌集 **黄昏に**
土岐哀果著
定價五十錢 送費六錢

■**哲人カアペンター**
石川三四郎著
定價八十錢 送費六錢

■歌集 **別離** 三版
若山牧水著
定價金七十錢 送費金六錢

東京市京橋區南傳馬町三丁目
（振替東京第五六一四番）

清新なる文藝雜誌

劇と詩

毎月一回 一日發行

定價一部 貳拾五錢

三月號要目

春と鳥　若山牧水
小夢と紫陽花　國枝史朗
オキザリスの花　相馬泰三
心のひらめき　佐藤楚白
譯詩四篇　秦豐吉
灯の思ひ　白鳥省吾
菩提樹の花（小説）　小川未明
幻燈の誘惑（小説）　田中介二
觀照と享樂と慾求と（評論）　相馬御風
蝮のやうな女（戯曲）　仲木貞一
一枚の繪葉書（小説）　津田青楓
ビリケンと女と　福田夕咲
鴎の群　人見東明
表紙繪　高村光太郎
欄畫　山脇信徳
裏繪　正宗得三郎
二月の創作■短歌十五首■編輯餘録■新刊紹介

■福田夕咲氏著『春のゆめ』新刊發賣（定價七十五錢 郵税八錢）■

小澤久雄氏著『流れ』新刊發賣（定價七十五錢 郵税六錢）■

東京小石川小日向臺町三ノ二四　劇と詩社

大賣捌　東京堂　東海堂　北隆館　上田屋　至誠堂　良明堂

作の日や雲雀に沈む峰の雲　闌更

俳味

三月號

要目

さうでも無い……（卷頭語）
蕪村と漢學（二）……久保天隨
私解芭蕉の發句（九）……沼波瓊音
長州の俳的人物……横山健堂
回想斷片……秋元蘆風

壽貞の沒年……一記者
精舍（小說）……長尾素枝
求むる路……沼波瓊音
去年の俳境……芳賀桑花
讀初……（懸賞俳句）

俳味ある雛人形……清水晴風
桃……小倉鶴峰
かはきり……天野眞名
實の人去來……長尾素枝
採茶庵略系……行山寺谷

錢……（懸賞文章）
通り雲……レモン法師
青柳の句（寫眞版）……馬場存義筆

附錄
去來發句集

毎月一日一回發行

定價
一部　金拾弐錢
郵税　壹錢
半年分前金　郵税共七十八錢
一年分前金　郵税共一圓五十錢

發行所
東京市本郷區西片町十番地
俳味社
振替口座　東京二三四三四番

六版又々賣切第七版發賣の盛況を示せり

▼文豪國木田獨歩の心血を傾倒せる書簡數百通を收む――

獨歩書簡

四六横型美本
小杉未醒氏裝
定價金六拾錢
郵送料金八錢

「戀の書簡」としての本書の面目

▲二六新聞曰く、其全部を通じて精神的な眞面目な熱力に充ちた調子は深く人を動す就中其戀人に送つた手紙には獨歩氏の眞情流露して再讀三讀するに足るものがある書翰集として此位人を引き着ける者は少なからう。

▲讀賣新聞曰く、獨歩が高潮の極に達したのは明治二十八年佐々城信子との戀愛時代であつた。私は今迄にかくの如く熱烈な戀愛萬能主義の文字を見た事がない。二人の愛を成功するのは人道の爲めだとまで叫んで居る。如何なる困難があらうとも二人の愛さへ變らなければ、それで滿足な生活が出來るものと眞に思つて居たらしい。

▲日本新聞曰く、殊に彼が生命を賭して戀へる佐々木某女に寄せたる數十通の書簡に至りては痛絶人を泣かしむるものあり。

▲大阪新聞曰く、殊に獨歩が相愛の人信子に與へた書簡の數々は、一言一句皆熱血である、熱涙である、「嗚呼わが信子よ。吾等一體は悲壯の歌を口吟して人情の大道を歩まんとするのみ」と云ふが如きは眞に一箇の哀詩である。裝釘も美しく、體裁も氣が利いてゐる。

發行所　東京市麹町區飯田町　電話番町二二二三番　新潮社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雑誌

歌舞伎

第百四十一號（三月一日發行）

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊二圓八十錢

オペラに就いて……相馬御風
舞臺に付く付かぬといふ事……楠山正雄
帝劇の日の出に就て……佐藤紅綠
政右衛門と伊左衛門……中村雁治郎
默阿彌著作解題……河竹繁俊
「土曜劇場」について……川村花菱
二月の各劇場（青々園、春浦）……
近來のお囃子……食滿南北

僧院（フェルハアレン）……鷗外譯
手袋（本號完結）……鷗外譯

「丹波與作」の鳴物……杵屋勝四郎
團藏の思ひ出……山野芋作
二月の脚本界……花菱生
倫敦に於けるラインハルト……坪内士行
「フランシスク・サルセイの演劇論……和田魚平
明治座の一大變々々々々……柳川春雄
歌舞伎座の二幕目……幸堂得知
劇談會——劇壇時事
附録脚本 **タンタアジルの死**（メエテルリンク）……灰野庄平

本郷區湯島切通坂町諧報社內
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八一〇六

女子文壇

▶二月一日發刊（第八年第二號）**三月普通號** 百五十頁充實○口繪原色版寫眞版數美葉（本社揃有）

◎婦人と食物の智識……農學博士澤村眞

◎習字の手本は良書を選べ……文學士久保天隨

◎女性の姙孕力（二）……大阪高等醫學教授田中祐吉

◎雪の山路……吉江さだ子

◎私は佛教を信じてゐます……子爵夫人小笠原秀子

◎七分三分の見立……番附

●小說「不如歸論」……知名文士數名

◎衣通姫……澤田撫松

◎耳袋……猿丸太夫

◎白日……三ヶ島葭子

◎木の芽時……長曾我部菊子

◎神戸の港……柴非やよ

◎碁盤……夢殿守

◎其儘應用の出來ぬ家政學……岩崎延枝子

◎年始……たへ子

◎化粧問答……藤波芙蓉

此次四月一日號は二倍大の**特別號**であります

定價

特別號金參拾錢　送料二錢五厘

普通號金拾五錢　送料一錢五厘

▶東京市京橋大鋸町十二　**女子文壇社出版**（振替貯金口座東京第壹七貳九番）賣捌各地書店◀

劇壇の新聲

毎月一回一日發行

シバヰ

定價廿五錢
郵税壹錢五厘

第壹卷第參號

■二月の劇評
- 歌劇熊野 …… しぐれ
- 新富座 …… 陶四郎
- 歌舞伎座の若手芝居 …… 二丁生
- 立見場より芝居めぐり（三崎座・宮戸座・蓬萊座） …… 同人
- 明治座

■將來の演劇美術家のために（ゴオルドン、クレエグ） …… 楠山正雄
■新しき舞踊（イサドラ、ダンカンの舞踊論） …… 中谷德太郎
■ショオの言葉 …… 吉村繁俊
■『伯爵令孃』の序文　ストリンドベルグ …… 二丁生
■第四の壁（歐米劇壇消息） …… 三太
■海外新潮 …… 編輯同人
■紙芝居（二月の創作） …… 木場町生
■劇界時評 …… 編輯同人
■机上閑談（雜錄） …… 同
■『業平』（舞踊劇） …… 河野りづる
■伯爵令孃（完結） …… 島村民藏
■小唄 …… 長谷川時雨
■箱根日記 …… 秋田雨雀
■對話 …… 池田銀次郎
■挿畫
- 最近のゴオルドンクレエグ
- 戯臺に現はれたるマツクス、ラインハルト
- ゴオルドンクレエグ意匠沙翁及び近代舞臺裝飾
- イサドラ、ダンカンの舞姿
- 各座二月狂言、舞臺面の扮裝
- 伯林に於けるラインハルトの一座、希臘劇のレハーサル

東京市牛込區西五軒町四十一番地
シバヰ發行所

慶應大學講師

戶川秋骨先生譯

エマーソン論文集

下卷目次

◉詩人論 ◉作法論 ◉政治論

◉經驗論 ◉進物論 ◉名門論

◉人格論 ◉自然論 ◉改革者論

上卷目次

◉歷史論 ◉戀愛論 ◉大靈論

◉自恃論 ◉友情論 ◉周環論

◉報償論 ◉細慮論 ◉智力論

◉靈法論 ◉勇壯論 ◉藝術論

總クロース金文字入

◎下卷 正價一圓二十錢 郵稅十二錢

◎上卷 正價一圓四十錢 郵稅十四錢

高橋五郎先生譯

ベーコン論說集

全一冊

總クロース

正價一圓二十錢

郵稅十二錢

要目

◎眞理を論ず ◎死を論ず ◎宗を論ず ◎美を論ず ◎復讐を論ず ◎逆運を論ず ◎迷信を論ず ◎狡猾を論ず ◎自愛を論ず

◎交友を論ず ◎商議を論ず ◎猜疑を論ず ◎攝生を論ず ◎談話を論ず ◎幸運を論ず ◎稱讚を論ず ◎親子を論ず ◎忿怒を論ず

◎戀愛を論ず ◎旅行を論ず ◎貴族を論ず ◎奢費を論ず ◎黨閥を論ず ◎統治を論ず ◎忠告を論ず ◎遲疑を論ず ◎似智を論ず

◎高位を論ず ◎無神說を論ず ◎功名心を論ず ◎習慣と教育を論ず ◎青年と老年を論ず ◎結婚と獨身を論ず ◎虛飾と假扮を論ず ◎學問及讀書を論ず ◎名譽と評聞を論ず

◎邦國の眞偉大を論ず ◎人に於ける天性を論ず ◎事物の變遷を論ず ◎嫉妬及美容を論ず ◎畸形及癈疾を論ず ◎仁愛と慈悲を論ず ◎禮式及禮儀を論ず ◎從者及朋友を論ず ◎外十四章

發行所 東京市神田區雉子町 振替東京七九九五番 玄黃社

大賣捌 東京堂 上田屋 至誠堂 北隆館 東海堂 大阪杉本 久留米菊竹 大連大阪屋號

與謝野晶子著

歌集

Umi koyem!
Izaya, Kokoro ni
Aranu Hi wo
Okuranu Hito to
Ware naram tame.

本郷四丁目有朋館版（發賣）

定價壹圓

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三月の卷發行

定價 一冊二十八錢郵稅二錢五厘 六冊前金郵稅共壹圓七拾錢

新婦人

現代式化粧研究號

化粧せぬ江戸女の……大隈伯爵
化粧と皮膚の美……田結醫學士
化粧と商品の價値……鈴木顧問
化粧おしろいはわるい……藤間房子
姿の化粧法……柴田環子
姿式の指輪……藤崎遊陵
化粧品の撰擇……佐々木玄兵衛
髮の毛の豫防……門田きみ
純日本式の刈方……篠原妙德

化粧は女の生命……東花枝
家庭美顏法……遠藤初子
洗粉の性質と用途……中目太‥
衣服の着方……安達藤識
婦人の服裝……飯野三三
身の廻りの嗜み……變度永
新ダイヤの全盛期……大西秋作
石鹸は濟世の具……山岸荷葉
鼠の尻尾髷……大場秀吉

流行製造者……櫻井法學士
髢毛と地毛……田中金三郎
椿油と頭髮……木村とら子
結つて居る頭……尾張屋みつ
間は人の髮……多田たつ
大阪の髮は生涯の修業……佐々木ひさ
調和は髮の命……關口ぶん
結髮時の氣分……高城いろ
付り惜しい高田式……小坂巳之助
東髮變遷史……松田幸次郎

繪畫及寫眞版

大森土產……川村清雄筆
書中の嬌聲 娓々として相語れるは何ぞ……鰭崎英朋筆
汐干狩 海中に足跡のある好い天氣……コロタイプ寫眞
姫宮 北白川殿下 德川公爵令孃●長谷場文部大臣夫人●大島陸軍少將令孃●海江田子爵夫人●伊集院法學士夫人●藤澤千枝子孃●諏訪子爵令嗣夫人●京都河邊照子孃●伊藤跡見女學校講師●新橋髮結の名手關口ぶん女●畑仙齡氏夫人及令孃●東花枝孃●岩崎辯護士夫人●甲府鈴木いその孃

卷末附錄 **家庭日誌** 三月分 溫度表●晴雨表●獻立表●來客控●九星舊曆添

見本 郵券三錢

賣捌所は全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 **聚精堂** 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三月壹日發行
第四年第三號

スバル

價三十錢
郵税二錢

死（論文）……山本禿坪
雁（小説）……鷗外
澪（小説）……長田幹彦
鉞（小説）……久米秀治
お駒（小説）……三島きぬ子
あなた（小説）……江南あきこ
食注（小説）……江南文三
短篇（小説）……茅野蕭々
短篇（小説）……平野萬里
地獄へ落つる人々（戯曲）……佐々木好母
掠鳥通信……無名氏

詩　歌

長田秀雄　佐々木好母　堀口大學
佐藤春夫　出野青煙　長沼重隆
竹友藻風　とよ子　よさのひろし
茅野雅子　原田琴子　三ヶ島葭子
岡本かの子　加納豊子
ベルレエヌのクリクチユア（翻譯）

東京神田　北神保町二
電話本局　四二六四番
昴發行所

新女學

三月一日 第三號 廿八錢 發行一冊 郵税一錢五厘 半年前金郵共一圓六十八錢 一年前金郵共三圓冊

(卷頭裝飾)

◎至尊兩陛下御製の御歌 坂正臣謹書

◎雛の組立圖 石版極彩色刷

◎兜巾形琴爪人の型紙 木版

◎椿の花造花參考寫生圖 御題人選者植松德子女史と坂本茂子女史の筆蹟

●天々たる桃の三月(市川桃園)●おひゐ樣と手毬●殘雪●石橋と寶船引人形●雛祭●古代雛と銀製の雛道具●美人と折鶴●摘草と潮干狩●水影の富嶽と六阿彌陀詣●編物小供掛布團●手提袋編●物帽子シャツ其等寫眞各種

懸賞募集 臺所設計圖案

▲地震、雷、火事、親父 自心、神也、家事、親父 …… 龜井櫻悟

▲潮の滿干は何に原因するか 佐藤傳藏

▲ツバメの話 …… 石川千代松

▲彼岸のいはれ …… 島地大等

容貌美と精神 後藤省吾

▲潮干狩から得た海の智識 … 速水不染

▲初めて小學校に入學さすべき兒童を有する家庭の心得 村田文次郎

流行に就ての注意 山中里子

▲簡單なる箏曲の獨習法(六段の調樂話) 淺川紫紅

▲一休和尚と蜷川新左衞門 … 骨皮道人

▲簡單にして優美なる女兒洋服の仕立方 伊澤米子

▲八重椿の花の造り方 …… 金子支江子

▲體裁好き兜巾形琴爪入の拵へ方 …… 加藤長次郎

▲歐米流行新形ハイカラ手提袋の拵へ方 …… 本田さみ子

▲歐米の御料理 …… 金風樓主人

▲中春の質素なる室內裝飾法 契月逸人

昔は雛遊今は雛祭 かみつれ女史

▲此月の摘むべき若菜 …… 小村千代子

▲桃の花 …… 唐橋翠紫

▲お臺所の改良を望む …… 櫻井ちか子

●歌御會講式●子供に就て可笑かつた實例●花籠●室內遊戲のいろ/\●誌友倶樂部●讀者の聲編輯部より三月曆等

■雜誌に讀まれず雜誌を讀むべし

理學博士 一戸直藏

■此母に此子

…… 文學士 三輪田元道

■趣味ある家庭を作れ

東京高等工業學校長 共立女子職業學校長 手島精一

發行所 東京日本橋角 大倉書店 振替貯金東京二三八 賣捌 全國各雜誌書店

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和43年9月15日発行　【第2回配本】

青鞜 第2巻 (第1分冊)

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 3,800円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
V.2
no. 3

University of Colorado at Boulder
U18304 6746157

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

四月から彌々開店いたしますから春の郊外を御散歩のおついでにれたちより下されまし切花盛花花環等をせいぜい勉強いたします

上駒込傳中拾九番地

萬大商會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER